
Cloth Edge

神榛 紡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Cloth Edge

【Nコード】

N4725R

【作者名】

神榛 紡

【あらすじ】

VRゲーム機が登場し、それが当たり前になった時代。俺は十歳頃に初めてそれをプレイし、虜になった。そんな俺はサービス開始初期から嵌っているゲーム《アルタベガル》にいつも通りログインした。ここまでは、本当にいつも通りの日常だったのだ。それが何の冗談か、まさしく“本物の”アルタベガルの世界へとやって来てしまった俺は、AIだったはずの水精霊やこの世界で出会った初心者冒険者、今日久しぶりに待ち合わせをしていた古参のプレイヤーと共に旅に出る。チートで最強系。あとハーレム(?) だけど厨二

と言われたくない厨二な主人公の物語。

待て待て待て。俺は至って普通の一般的な感性の持ち主……だよな？

現在改訂版作成中です。

布と人物設定集（前書き）

主要人物四人（三人と一柱？）の設定集です。変化や追加がある度に付け足します。

神、世界、国、魔法、武器スキル等に関しましては、出来次第随時出していく予定です。

何かこれが分からないという場合は言ってください。設定を改稿するか、普通に返答させていただきます。

布と人物設定集

リンセイル【かんざき神崎 りょう涼】（主人公）

レベル：二〇〇〇（転生前：初期種族二〇〇〇。上位種族二〇〇〇にて転生。理由は上位の新種族の実装時にはそのレベルだったため）
種族：始祖（元人族）

性別：男

身長：百八十二センチ

体重：七十一キロ

ステータス（EX・S・A・B・C・D・E・Fの±で表示します。EX+は無敵、F-はゼロです。人の限界は三度転生してA+になります。最高の装備を装備したとしてもS-です）

HP：A+

MP：A+

STR：A+

VIT：A-

DEX：A+

AGI：A+

INT：A-

装備

マクリル精霊王のピアス『S+』：無色透明の小さな三連のリング型ピアス。入手時に設定した精霊を少ないMPの消費で召喚する。リンセイルの場合は水精霊のスイ。イベント『精霊王の秘宝』にて入手。外伝にて掲載予定。

オーディーンタトゥー主神の刺青『S-』：左目を囲う形で円状にルーンと幾何学模様の入り混じった漆黒の刺青。装備者よりも低レベルのモンスター・プレイヤーの攻撃予測を薄い赤の線で表示する。クエスト『主神の試練』にて入手。

トール雷神のチョーカー『A+』：小さなトパーズを使い装飾が施された

チョーカー。雷系の魔法の威力、命中率を上げる。クエスト『雷神の試練』にて入手。

闇龍のコート『S+』：裾が地に付きそうな長さの厨二病まつしぐらな漆黒のコート。物理攻撃力強化。闇耐性。闇属性付与。隠蔽ボーナス（極高）。闇龍の素材より作製。

天龍の天凱布『S+』：水のように柔らかいTシャツ。光耐性。光属性付与。物理・魔法攻撃力強化。天龍の素材より作製。

天狼の帷子『S-』：鎖ではなく天狼から取る事の出来る強靱で極太の体毛で作られた帷子。速度上昇（極高）。天狼の素材より作製。海神の蒼漣布『EX-』：深蒼色の肘まであるフィンガーグローブ。攻撃力上昇。水属性付与。HP自然回復速度上昇。クエスト『海神の試練』にて入手。

風龍の奔流布『S+』：見た目翡翠色の体格にピッタリ合わせたジーンズ。風属性付与。速度上昇（極高）。風龍の素材より作製。

地龍の地撥甲『EX-』：岩の尖った部分を削ったような外見のゴツイ脚甲。斥力発生効果（任意方向・オンオフ可能）。地属性付与。防御力上昇（高）。地龍の素材より作製。

発明神の万唆靴『EX-』：表面に大量のルーン文字が施されている革靴。速度上昇（高）。隠蔽ボーナス（極高）。クエスト『発明神の試練』にて入手。

闇龍の細帯『S-』：髪を縛るための紐帯。物理攻撃力強化。闇耐性。闇属性付与。隠蔽ボーナス（極高）。闇龍の素材より作製。

闇龍の鱗帯『S+』：黒いサラシ。物理攻撃力強化。闇耐性。闇属性付与。隠蔽ボーナス（極高）。闇龍の素材より作製。

闇龍の帷子『EX-』：漆黒の鱗と爪で出来た帷子。物理攻撃力強化。闇耐性。闇属性付与。隠蔽ボーナス（極高）。闇龍の素材より作製。

闇龍の鱗毛鎧『EX-』：漆黒の細いスリムな鎧。物理攻撃力強化。闇耐性。闇属性付与。隠蔽ボーナス（極高）。闇龍の素材より作製。闇龍の爪手甲『S+』：爪を軸に使った鋭い手甲。物理攻撃力強化。

闇耐性。闇属性付与。隠蔽ボーナス（極高）。闇龍の素材より作製。

闇龍の脚布『S-』：体にフィットした黒いジーンズ。物理攻撃力強化。闇耐性。闇属性付与。隠蔽ボーナス（極高）。闇龍の素材より作製。

闇龍の脚甲『S+』：黒い脛当て。物理攻撃力強化。闇耐性。闇属性付与。隠蔽ボーナス（極高）。闇龍の素材より作製。

闇龍の鱗毛靴『S+』：ツヤ消しブラックの長靴。物理攻撃力強化。

闇耐性。闇属性付与。隠蔽ボーナス（極高）。闇龍の素材より作製。

邪霊の兜『A-』：呪われた兜。物理・魔法攻撃力低下（高）。物理・魔法防御力低下（高）。ダンジョン『邪霊の館』の宝物庫より入手。

邪霊の鎧『A+』：呪われた鎧。物理・魔法攻撃力低下（高）。物理・魔法防御力低下（高）。ダンジョン『邪霊の館』の宝物庫より入手。

邪霊の帷子『A+』：呪われた帷子。物理・魔法攻撃力低下（高）。物理・魔法防御力低下（高）。ダンジョン『邪霊の館』の宝物庫より入手。

邪霊の手甲『A-』：呪われた手甲。物理・魔法攻撃力低下（高）。物理・魔法防御力低下（高）。ダンジョン『邪霊の館』の宝物庫より入手。

邪霊の腰当『A+』：呪われた腰当。物理・魔法攻撃力低下（高）。物理・魔法防御力低下（高）。ダンジョン『邪霊の館』の宝物庫より入手。

邪霊の脚甲『A-』：呪われた脚甲。物理・魔法攻撃力低下（高）。物理・魔法防御力低下（高）。ダンジョン『邪霊の館』の宝物庫より入手。

鍛冶神の天刀『EX-』：白い三尺（約九十センチ）の刀。耐久値無限。命中率強化。光属性（高）。クエスト『鍛冶神の試練』より入手。

不朽の紅血布『EX-』：深紅の長い布。耐久値無限。攻撃力保有。

火属性（高）。オリジナルスキル《布武術》^{ふぶじゆつ}の基礎スキル完成の折、運営より譲渡。

^{ガイア}

^{カオス・スティック}

大地神の混沌杖『EX-』：五十センチ程度の木で出来た杖。魔石は頂点の窪みにセットする。属性を持った魔石をセットして消費する事で、魔石の純度・大きさに応じた魔法の詠唱を破棄できる。ただ、無数の魔法スキルから特定のために極々短い詠唱は必要。クエスト『大地神の試練』にて入手。

^{じゅれいふ}

呪霊布『A+』：黒い呪われた布。物理・魔法攻撃力低下（高）。

物理・魔法防御力低下（高）。ダンジョン『邪霊の館』の宝物庫より入手。

^{まがつき}

禍都斬り『A+』：呪いや悪霊、悪魔などを斬り続けた結果、災禍を宿した血塗れの刀。物理・魔法攻撃力低下（極高）。STR低下（極高）。闇系魔法吸収（極高）。

本作品の主人公。苦労人で割と判断能力は高め。趣味はゲームそれ一択で、特技は布を使った戦闘術である布武術^{ふぶじゆつ}。ゲームほどではないが、現実でも布で突いた方が殴るより遥かにダメージを与えられるし、五センチくらいの木の棒なら切れる。不幸ゆえに基礎スペックの高いかわいそうな人。

スイ

レベル：一五〇〇（精霊なので転生は無し。レベルが上げられるのは常時召喚しているため）

^{ウンディーネ}

種族：大精霊・水精霊（精霊の階位は下級精霊↓上級精霊↓大精霊↓精霊王とある）

性別：女

身長：百六十三センチ

体重：ゼロからｾまで自由自在。

ステータス

HP：A+

MP：S-

STR : A +
VIT : S +
DEX : S +
AGI : A -
INT : S +

装備（常時召喚のメリットとして、装備可能）

氷龍の倭衣上『S +』：二つに分かれた和服の上。意匠は氷の花。

水耐性。水属性付与。冰雪系魔法強化（高）。冰雪系魔法消費MP

軽減（高）。氷龍の素材より作製。

白霊獣の襦袢『S -』：真っ白な薄い襦袢。光耐性。光属性付与。

呪い浄化。白霊獣の素材より作製。

氷龍の倭衣下『S +』：二つに分かれた和服の下。意匠は氷の花。

水耐性。水属性付与。冰雪系魔法強化（高）。冰雪系魔法消費MP

軽減（高）。氷龍の素材より作製。

氷龍の角杖『EX -』：氷龍の薄蒼色の角を加工した杖の先端に、

恋龍が稀に落とす桜色の宝石《恋龍の涙》を取り付けた杖。冰雪系

魔法強化（極高）。水系魔法強化（高）。魔法射程・効果範囲増大

（高）。氷龍及び恋龍の素材より作製。

リンセイルが常時召喚している精霊。リンセイルラブ。DEX（器用度）は高いが料理は壊滅的。掃除は得意。趣味と特技はハッキングとサーバーにこっそり作ったリンのリアルと仮想両方の画像や動画を何度も観賞する事。水を利用した空間倉庫を持っており、その容量は地味にプレイヤーのアイテムボックスより多かったりする。取り出す際の演出は仕様です。水に手をつ込んで出したり、水の表面から落したりとかも普通にできます。

ミーナ

レベル：二〇〇〇（転生前：初期種族二〇〇〇。上位種族二〇〇〇にて転生。理由はリンセイルと同様）

種族：始祖（もと獣人族猫人種）

身長：百三十八センチ。

体重：――（ 回答を拒否されました）

ステータス

HP：A＋

MP：A＋

STR：A＋

VIT：A＋

DEX：A－

AGI：A－

INT：A＋

装備

ゴスロリカチューシャ【赤】『B－』：紅い薔薇の付いた黒に白フリルのカチューシャ。全耐性強化（高）。火魔法強化（高）。イベント『ゴスロリ祭』（運営が何を考えていたかは不明）にて入手。
ゴスロリドレス【白】『A＋』：黒い布地に白い刺繍とふんだんについている白いフリルが目立つゴスロリドレス。全耐性強化（高）。光魔法強化（高）。イベント『ゴスロリ祭』（運営が何を考えていたかは不明）にて入手。

ゴスロリスカート【赤】『A＋』：真つ赤な薔薇の刺繍を施したフリルたつぷりのスカート。全耐性強化（高）。光魔法強化（高）。イベント『ゴスロリ祭』（運営が何を考えていたかは不明）にて入手。

ゴスロリ用パニエ【白】『A－』：ゴスロリスカートを綺麗に広げるためのパニエ。速度下降（低）。防御力強化（中）。イベント『ゴスロリ祭』（運営が何を考えていたかは不明）にて入手。

ハイソックス（膝下）【白】『A－』：白い膝下のハイソックス。速度上昇（中）。格闘術（足技）攻撃力上昇（中）。イベント『ゴスロリ祭』（運営が何を考えていたかは不明）にて入手。

ゴスロリシューズ【赤】『A＋』：先の丸い、先端に小さな紅い薔薇が乗った黒のシューズ。速度上昇（高）。格闘術（足技）攻撃力

上昇（高）。イベント『ゴスロリ祭』（運営が何を考えていたかは不明）にて入手。

狩猟神の髪飾り『S -』：大人しいのにしっかり自己主張もする銀の髪飾り。命中率上昇（極高）。物理攻撃力強化（高）。広範囲索敵（高）。クエスト『狩猟神の試練』にて入手。

至高神のピアス『S +』：金と銀を使った極々小さなピアス。物理防御力強化（極高）。物理攻撃力強化（高）。全耐性強化（高）。

クエスト『至高神の試練』にて入手。

主神の首飾り『S +』：様々な宝石を使い装飾されたネックレス。

物理攻撃力強化（極高）。命中率上昇（高）。速度上昇（高）。クエスト『主神の試練』にて入手。

聖獣神の防衣『S -』：乳白色の服（山羊毛（？）百パーセント）。HP自然回復速度上昇（極高）。防具破壊無効（高）。隠蔽ボーナス（極高）。クエスト『聖獣神の試練』にて入手。

戦女神の鎧『EX -』：プラチナ色の輝かしい鎧。遠距離攻撃ダメージ減少（高）。物理攻撃力強化（高）。STR上乘せ（高）。クエスト『戦女神の試練』にて入手。

工芸神の腕輪『A -』：光、闇、火、水、風、土の六属性を司る宝石を嵌めた細身の腕輪。物理攻撃力強化（高）。武器要求STR一段階引き下げ。クエスト『工芸神の試練』にて入手。

婚姻神の指輪『B +』：金剛石を散りばめたシンプルな指輪。指定物追跡。隠蔽ボーナス（高）。範囲攻撃広域化。クエスト『婚姻神の試練』にて入手。

太陽神の火焰腰衣『EX -』：深紅の炎の糸で編まれたようなフレアスカート。物理防御力強化（高）。火属性耐性強化（極高）。火属性魔法攻撃力強化（高）。クエスト『太陽神の試練』にて入手。

美麗神のブーツ『EX -』：皮製の膝下まであるシンプルなブーツ。魅了（極高）。速度上昇（高）。水耐性（高）。植物系毒素無効。クエスト『美麗神の試練』にて入手。

鍛冶神の薙刀『EX -』：金色の刃を持つ銀柄の薙刀。物理攻撃力

強化（高）。防御貫通（高）。耐久値無限。クエスト『鍛冶神の試練』にて入手。

フライパン（大）『EX-』：オリハルコン製の巨大なフライパン。耐久値無限。火属性魔法に限り野球のように打ち返せる。龍の息吹^{ブレス}を完全に防ぐ事も可能。ミーナ曰く《主婦流戦闘術》の基礎スキルが完成した際に運営より譲渡。

フライパン（小）『S+』×2：緋緋色金の通常サイズのフライパン。耐久値無限。火属性魔法強化。一つがフライパン（大）の三倍の重さがある。ミーナ曰く《主婦流戦闘術》の基礎スキルが完成した際に運営より譲渡。

スープレードル（大）『S+』：巨大な銀色のお玉。ミスリル製。耐久値無限。光属性付加。浄化付加。アンデット系や亡霊系、魔族、幽鬼族に良く効く。

リンセイルと同じ古参の始祖。面倒事はリンセイルに押し付ける主義。決して頭が悪い訳ではないのだが、リンセイルと一緒に居る時は割と頭を働かせない事が多い。ただし、能動的に動く際にはリンセイルもビックリするほど頭の回転が速い。ゴスロリシリーズは普段着で、戦闘時はまともな装備に変える。特技は料理で特に和食が得意。趣味はケーキ食べ歩き。

アルシャ・リースレイ・アヴァロン

レベル：一五

性別：女

種族：王人族

身長：百四十六センチ

体重：三十一キロ

ステータス

HP：F+

MP：F+

STR：F+

V I T : F +

D E X : E -

A G I : E +

I N T : E +

装備

フェザーフレーム

羽竜の兜『D -』：羽竜の美しい羽をあしらった緑色の兜。火耐性強化（低）。

羽竜の鎧『D -』：羽竜の最も頑丈な羽だけを使った緑色の布のよ
うな鎧。火耐性強化（低）。

羽竜の帷子『D -』：羽竜の最も柔らかい羽を糸にして編んだ緑色
の帷子。火耐性強化（低）。

羽竜の手甲『E +』：羽竜の爪付近の固いが柔軟な羽を使った緑色
の手甲。火耐性強化（低）。

羽竜の腰当『D -』：羽竜の翼を加工して作った緑色の腰当。火耐
性強化（低）。

羽竜の脚甲『E +』：羽竜の足に生えた最も堅固な羽を使った緑色
の脚甲。火耐性強化（低）。

レイピア【鉄】『E +』：ただの鉄出てきたレイピア。名匠による
品だが、特別な能力は無い。

鬼の森で大量のモンスターをトレインしていた少女。装備が中級ク
ラスなのは単純に親がお金で用意したから。初心者レベル上げに
殺すモンスターをチマチマやるのが性に合わず、鬼の森まで足を運
んだが、結局レベル差があって倒せず逃走。結果、トレインをする
事になった。リンセイルとスイがいなければ、『王都攻防戦』のイ
ベントが発生していた。

ギルドマスター

レベル：八二五

性別：男

種族：人族

身長：百八十センチ
体重：六十四キロ

ステータス

HP：C +
MP：E +
STR：D +
VIT：C +
DEX：D -
AGI：D +
INT：C +

装備

高級服（上）『F -』：有名服飾家オーデイス・レンコルのデザインした服。貴族か裕福な商人でもなければ手が出ない品。着ているだけで一つのステータスになる。

高級服（下）『F -』：有名服飾家オーデイス・レンコルのデザインした服。貴族か裕福な商人でもなければ手が出ない品。着ているだけで一つのステータスになる。

高級革靴『E +』：希少な生物である《虹蛇^{にじへび}》の上質な皮のみを使った高級靴。貴族か裕福な商人でもなければ手が出ない品。着ているだけで一つのステータスになる。

コールレイ・ドーブメント

レベル：一一四二

性別：男

身長：二百五センチ

体重：九十八キロ

ステータス

HP：B -
MP：C +
STR：B -

V I T : B -

D E X : C +

A G I : C +

I N T : C +

装備

ロックドフロン
岩竜の兜『B +』：頑強な岩の如き兜。防御力強化（中）。STR強化（低）。

羽竜の羽毛帽子：羽竜の最も柔らかい羽毛を使った帽子。岩竜の兜を着込む際に着用が必須の防具。速度上昇（高）。

岩竜の鎧『B +』：頑強な岩の如き鎧。防御力強化（中）。STR強化（低）。

羽竜の羽毛鎧『C -』：羽竜の最も柔らかい羽毛を使った胴鎧。岩竜の兜を着込む際に着用が必須の防具。速度上昇（高）。

岩竜の手甲『B -』：頑強な岩の如き手甲。防御力強化（中）。STR強化（低）。

羽竜の羽毛手皮グローブ『C -』：羽竜の最も柔らかい羽毛を使った手甲と同じ長さのグローブ。岩竜の兜を着込む際に着用が必須の防具。速度上昇（高）。

岩竜の腰当『B +』：頑強な岩の如き腰当。防御力強化（中）。STR強化（低）。

羽竜の羽毛腰布『C -』：羽竜の最も柔らかい羽毛を使った腰布。岩竜の兜を着込む際に着用が必須の防具。速度上昇（高）。

岩竜の脚甲『B -』：頑強な岩の如き脚甲。防御力強化（中）。STR強化（低）。

羽竜の羽毛足布ソックス『C -』：羽竜の最も柔らかい羽毛を使った長靴下。岩竜の兜を着込む際に着用が必須の防具。速度上昇（高）。

だいかき
大火鬼『B -』：火竜、火熊の二体から取れる二種類の灼骨（火を吐くために持つ、喉の空気を熱して発火させる骨）を使用し、さらに融解温度の高い炎鉄を使った刃に耐火性の高い氷鉄の柄を付けた大斧。火属性付与（高）。火耐性（低）。火属性魔法強化（中）。

布と人物設定集（後書き）

書き終わってから、人物設定だけで最終的に二、三話潰しそうな気がしてきました。

序文『布の切れ端』（前書き）

始めまして。この度、記念すべき初投稿です。稚拙かつ駄文、プロット無しの完成度の低い代物ですが、よろしければお読みください。更新が遅く不定期になるでしょうが、平にご容赦をお願いします。

序文『布の切れ端』

二〇二二年。とある学者が発表した一つの機械が世界に激震を与えた。

名は、《DM・ギア》。正式名、五感情報干渉型仮想現実実体感機械《The senses information and intervention virtual reality experience machine》と呼ばれるそれは、文字通り五感を支配してもう一つの世界を使用者に与える代物である。

この技術は軍事、経済、医療を始めとして、世界のあらゆる分野に正負問わずあらゆる影響を与えた。

その中でも最も影響を与えられたのがゲーム業界だ。

まず、富裕層のゲーマーと重度の廃ゲーマーがその高度な機械から創り出される、本物と見紛うようなバーチャルリアリティに魅了された。

その話は三日と立たずに日本全土、そして世界各地に浸透し、ひと月後にはDM・ギアがシェアのトップへと躍り出て、一年後には二次元のゲームは市場の隅へと追いやられる事となった。無論、この際に出遅れたゲーム企業は大打撃を受け、その半数以上が市場からの撤退を余儀なくされた。

そのような革命的な発明による混乱は約五年続き、今では、テレビゲームはよほどコアなファンでなければ見向きもしないような代物だ。

むろん、二千三十五年現在に生きる、俺こと神崎 涼も一般人大多数に漏れずDM・ギアの虜となった廃ゲーマーである。十歳の頃に親にねだって買ってもらってから、仮想世界に潜る事八年。仮想世界の魅力に取り憑かれ続けている。

今現在、俺が嵌っているゲームのタイトルは《アルタベガル》と言う。

基本的に王道の剣と魔法の世界だが、このゲームの面白い所は職業という縛りが存在していない事だ。

まず、剣等近接スキルが各種武器それぞれに基礎千個があり、プレイヤーはそこから各人オ리지ナルモーションの設定を行い、サーバーが攻撃力等の各種ステータスを自動決定。これにより、いくつかの例外を除いて同じスキルを持つという事が無くなった。

それは魔法も同じだ。基本となる魔法五千に加え、呪文の一部を変えたり、一新する事で威力の増減、または全く異なる魔法を生み出す事ができるようになっている。ただし、改造魔法というのはよく考えなければ簡単に魔力が枯渇してしまうので、お世辞にも使い勝手の良い技術とは言い難いが。

そういった特殊性の中、最も特殊なのはこういったゲームに良くある職業という要素が無い事だろう。

職業が無いという事は、それによって取得スキルに制限がかかる事も無いので、極めれば戦闘中に剣から槍、槍からナイフという風に武器を変えたり、単独で龍を始めとした最強種を殺す事も可能となる。

まあ、さすがに複数の武器を戦闘中に切り替えられたり、単独で最強種とやり合えるような奇人はあまりいないが、そういった職業縛りの無さが、大槌使いの魔法使いや拳法使いの僧侶といった他のゲームに無いプレイスタイルを作り出している。

ただ、俺や他の古参プレイヤーの一部は、アルタベガルの最大の特徴は別にあると知っている。

アルタベガル最大の特徴とは、本来は武器ではない物を武器にできる事だ。

先に述べたように、アルタベガルでは武器のモーションを登録する事で新しいスキルとする事ができるのだが、この際、システムの方である程度の修正を行ってくれる。それを利用して、本来武器ではない物を使用した武術を新たに生み出せるのだ。

これによって、筋力値さえ許せば銅像であろうと丸太であろうと、

果ては“人間”すらも武器にできる事が判明した。当初はこれが広まった事で、様々なネタスキルが発生する事になった。今でも、古参プレイヤーならネタスキルの一つや二つは持っているものである。今では、元々武器でない故に威力が無い。スキルの作成が普通の武器に比べて異常に難しい等の理由で表舞台から消えてしまったが、消えていなくてもネタ以外に使う人間はほとんどいなかっただろう。

理由は、普通の武器と比べて異常にコストが高いからだ。

他にスキル成長度が低い等も挙げられるが、最大の理由はこれ以外に無い。

例えば、俺の知り合いのようにフライパンを武器とする（本人曰く、最強の主婦には必須技術）場合、ただの鉄だとゴブリン程度までしか相手にできず、鋼でオーク、鋼鉄でようやくトルと、スキル次第ではあるが、初期ではほぼ雑魚しか相手にできない。

これはMAX値の半分、千を超えるまで続き、そこに至るまで大半の者が心を折られて挫折する。当時も俺は最強のネタ武器使いを目指す等と言う輩が何十人と挫折させられた。

それでありながら、いや、そうであるからこそ、挫折する事無く努力を重ねた場合の見返りは大きい。

当時から諦めずに使い続けた頑固な連中は今では全員がトッププレイヤーに名を連ねているし、超高位素材を惜しみなく使用した武器は、最強種を相手取っても壊れる事は無い。新参プレイヤーの中には、特殊なクエストでしか手に入らない限定武器だと勘違いする者もいるような頑強さだ。

まあ、フライパンや巨大な本、奇抜なのではどう見ても道路標識にしか見えないような物を振り回していれば、そう思っても仕方が無いのかもしれない。

閑話休題。

そんな風に自由度が限りなく高い世界だが、世界設定は意外とま

ともだつたりする。

世界設定としては、基本的な種族によってそれぞれ治められている国と複数種族による多民族国家が存在しており、その数は十。

オールラウンダーで弱点という弱点が無い代わりに突出した所の無い、唯一全ての特性を持つ事ができる人族の国、桜と麦の国《アヴァロン》

精霊に愛されているために魔法特化で他者の追隨を許さない代わりに物理攻撃に弱い、弓と魔法による遠距離攻撃が基本となるエルフ族の国、弓と精霊の国《ユグドラシル》

物理攻撃特化で土に強く風に弱い、共通して鉱石採掘に補正が掛かり武器・防具・装飾品等、金属を扱う生産系スキルがステータスより一段上がるドワーフ族の国、槌と鉱石の国《オリュンポス》

通常時は人族より強い程度だが、竜化時に物理特化の強力な能力を有し、天族より短いが空を飛べる上、各属性に個々で特化した竜人族の国、空と自由の国《ヌト》

物理、魔法共に強力で、しかし総じて光に弱く、また、太陽の当たる場所ではステータスにマイナス補正が課せられる魔族の国、力と闇の国《ニヴルヘイム》

光属性特化で強力な固有魔法を持ち、長時間の滞空が可能かつ飛行速度では獣人に迫る程に早い代わりに他は総じて低い天族の国、光と翼の国《ウラノス》

速度特化で獣を従える事ができ、人型のままの半獣化、完全に獣と同じ姿になる獣化の特殊能力を持つが攻撃魔法に弱い獣人族の国、遊牧と傭兵の国《アステカ》

闇属性特化で幽霊属なら物理無効でしかし光属性のみ魔法、物理共に高レベルでも最弱技で瀕死または即死し、妖鬼属ならば物理攻撃に補正が掛かり種族毎に特性があるが、代わりに光の他に水属性や銀製武器に弱い、レベルアップの遅い冥霊族の国、死者と修羅の国《タルタロス》

巨大な漆黒の塔《バベル》を中心に発展し、塔の二階以降に展開

されている高レベル専用ダンジョンやその地下にある巨大ダンジョン《エンドレス》の攻略を目的とした冒険者が集まって生まれた、塔と迷宮の都市国家《メソポタミア》

何らかの理由で祖国にいらなくなつた者達が集まり、生きるための協力機関——現在のギルドの原型を生み出したギルド発祥国、議会と学究の国《アテナイ》

この十の国はメソポタミアを中心に別れている。

まず、最大の国土面積を誇るのが西のアヴァロン。

北の山地には翼を持ち厳しい環境でも苦としないヌト。

そこよりさらに北、広大な樹海に構えているのはニヴルヘイム。

東北の高原地帯とそこに続く小さな森林地帯にはアステラ。

東の荒野とその先にある島々にはアテナイ。

南方に存在する世界樹《蘭桜》らんおうを中心に栄えるユグドラシル。

西の巨大鉾山が集まつた山脈、火山地帯に都市を置くオリュンポス。

バベルを中心に円を描いて空を行く浮遊大陸アウルヘイムに住み、中立を好むウラノス。

バベル一階、羅門ロムと呼ばれる巨大な縦穴からのみ出入りできる地下に存在するタルタロス。

これが、アルタベガル世界に存在する国の全てだ。それぞれの国には種族の特徴に合わせた壮大な都市がいくつも設置されていて、その数と完成度は見て歩くだけでも半年は掛かると言われる程だ。

ここまで凝っている、会社は傾かなかつたのか、とも思うだろう。だが、傾くどころか、その精巧に過ぎる世界はDM・ギアのソフト群の中でも指折りの人気を誇っている。製作会社はホクホクだろつ。

これは、そんなゲームの世界で有数のトッププレイヤーであつた俺の、迷走と闘争の物語だ。

序文『布の切れ端』（後書き）

とりあえず、名前は神話だのルーン文字だのと色々な所から取ります。神様は基本ギリシヤ神話と北欧神話のハイブリットです。ゲームの名前はぶっちやけアルタイルとベガの混合ですね。織姫と彦星、お（義）父さん幸せに暮らして欲しいものです。

とりあえず色々と国や種族を出しましたが、実はまだまだ出ます。名前だけ出て終わる事もあるかもしれませんが、できるだけ全ての国、種族を物語りに絡ませて行きたいと考えていますので、もしよろしければ末永いお付き合いの程、どうかお願いいたします。

ブローグ『布と日記の二ページ』

廃プレイヤー。

俗にそう呼ばれる、人生の大半をゲームに注ぎ込み、現実よりもゲームが大事だときっぱり言い切るようなイカれた人種の総称である。

俺も、そんな廃プレイヤーの一人だった。

「。。。、カラオケ行こうぜ」

「悪い、用事あるから」

高校時代、入ったばかりの頃はこうして声を掛けられる事もあったが、全てを尽く断り、ゲームに没頭した俺は、いつしか友人と呼べる友人が居なくなっていた。

そんな頃だ。十六歳の誕生日がとうに過ぎ去った六月、俺はアルタベガルのβテストの広告を見付けた。

即座にβテストに応募し、七月初めにその当選通知が来た。年齢制限のあるゲームのため、兄の名前を使って応募したのだが、ソフトと共に合格通知が送られてきた時は小躍りして母に怒られたのを覚えている。

そんなこんなでログインしたアルタベガルの世界に圧倒され、そのデイティールに歓喜し、寝食を忘れるほどにのめり込んでいった。思えば、これが運命の転機だったのだろう。

俺は今まで複数登録していたMMOゲームの全てから撤退し、他のゲームには見向きもしないでアルタベガルへと心血を注いだ。学

校では携帯片手にネットの掲示板で最新の情報を調べ、放課後は延々とレベル上げや行動可能な地域の探索に時間を費やした。

その後半年ほどでβテストが終了した時は、心から嘆き悲しんだ物だ。

そして、βテスト終了から三ヶ月という短期間で発売された正規品を優先権により迷わず入手し、β時代の仲間と集い、段階的に解放される世界の中で常に最前線を独走し続けた。

結果、俺を含む仲間の幾人かは始祖という極レアな種族へと転生を果たし、他の仲間もトップ集団で一步以上飛び抜けた実力を身に付ける事ができた。

理不尽領域と名高い神々の領域でも、平然とまでは言えなくとも、生きてくまなく探索できる程の実力を得てからは、所有者の少ないレア装備のコレクションへと走ったり、初心者指導に熱を入れてみたりと好きに生きた。

色々と面倒にも巻き込まれたりしたが、それでも現実よりも充実した時間を過ごせる中で、こっちが現実ならと思ったのは一度や二度ではない。むしろ、思わない日の方が少ないと言っていいくらいだ。

しかしながら、人間、本当にそうなるとは思わない物だ。

今では、平和で平凡で何も起きない地球に生まれて、幸せだったのだと理解している。

無論、現状に不満な訳ではない。充実している。

だが、たまにはこうして過去を振り返るのも必要な事だろう。

特級指定図書『リンセイルの日記』

より

神暦
××××年
××月
××日

第一話『布と水精霊』（前書き）

一話目です。今回も含めてしばらく説明が多いと思いますが、御寛恕の程、お願いします

第一話『布と水精霊』

目を開き、まず視界に広がったのはテントの布だった。

「そついえば、遠出した帰りだったか」

俺は分厚い野外用の布団——砂利の上でも痛くない高級品——から抜け出し、アイテムボックスに仕舞ってから外に出て大きく伸びびをする。

アルタベガルでは、俺は闇よりも黒い長髪を少し高めのポニーテールにしたカツコイ系の男だ。年はおおよそ二十前後で、細いの筋肉はきつちり付いていて腹筋も割れている、いわゆる細マッチョとか言われるタイプだ。鋭い目や口元のせいで、リラックスしていても険があるのはマイナスかもしれないが、ランダムで決定されるキャラクターでこの容姿は十二分に当たりだったのだろう。

ちなみに、今の俺の装備は防具が上から、

入手時に設定した精霊——俺の場合は《水精霊》——をMP極低消費で常時召喚する《精霊王のピアス》

自身よりレベルの低い相手に限り、攻撃の軌道予測を表示する《オーディーンタワー主神の刺青》

雷系魔法の威力、命中率を上げる《トール雷神のチョーカー》

物理攻撃力強化と闇耐性に加え、闇属性付与とかなりの隠蔽ボ—ハイディングナスがある《シユバルツシルト闇龍のコート》

光に耐性を持ち、攻撃力増加効果、光属性付与の力を持つ《ソウエル天龍

の天凱布てんがいふ《

絶大な防御力と速度上昇効果を発揮する《天狼の帷子あまら かたびら》

攻撃力上昇と水属性付与、それにHPの自然回復速度上昇の効果を持ったフィンガーグローブ《海神の蒼漣布ボセイドン そうれんふ》

防御力は低いが、代わりに風属性付与と帷子以上の速度上昇の効果があるズボン《風龍の奔流布ウエントス ほんりゅうふ》

任意による斥力発生効果と地属性付与、素の防御力以外にもステータスの防御力上昇効果を持つ《地龍の地撥甲オースイラ ちはつこう》

速度上昇に加えて、高い隠蔽ボーナスに一定時間に限り宙を駆ける事ができる《発明神ヘルメスの万唆靴ばんしゅんか》

と、なっている。状況によって、他の装備に変えたり、増やしたり減らしたりとするが、基本的にはいつもこの装備で行動している。普段から装備している武器は主に三つ。

耐久値無限で命中率に補正が掛かる光属性の白い三尺トウミン（約九十センチ）の刀《鍛冶神カウジの天刀》

俺が個人で開発したスキル《布武術ふぶじゅつ》の基礎が完成した際に運営側から渡された物で、耐久値無限の上に攻撃力を持ち、高い火属性を持つ《不朽インモータルの紅血布ルビー・クロス》

魔術スキルの詠唱を省くために手に入れた、それぞれの属性を籠めた魔石をスロットにセットする事で、魔石の純度に応じて魔術の詠唱を破棄できる五十センチの檜の杖《大地神ガイアの混沌杖カオス・スティック》

これだけ見るとチート装備だが、この装備でも最強種を一人で相手取るのは厳しいし、古参は皆同レベルか一つ二つ下の装備なので、最初期からいる最古参の一人としては別に普通の装備だ。物理、魔法のどちらかに特化した装備は、そっち方面に限っては本気で鬼畜だと断言できる。

俺は天刀を左腰に差して紅血布を右腕に巻いた状態で、右腰のポーチに混沌杖を入れている。全ての装備を点検し終わった所で、目の前の地面から勢い良く水が湧き出した。水はすぐに中空で人型を取り、美しい少女の姿で凍りつく。それが　パキン　という音と共に砕け散った。それを魔法独特の光が包む。

光が収まった時には、氷のあった場所には蒼髪蒼眼に蒼色の和服を着た少女が立っていた。

相変わらずの派手な登場だが、仕様なので仕方が無いと早々に諦めている俺は、特に反応する事も無く少女に声を掛ける。

「スイ、一日ぶりだな」

「はい。リンが来るまでにオーク鬼が二回、ウェアウルフが一回、雷蛇が四回ほど来ましたが、レベル差を感じたのかすぐに逃げ出したので戦利品はゼロです。今日は、確かりースライロの街でミーナ様と待ち合わせでしたね。時間まであと一時間で、ここからだ歩いてギリギリの距離になります」

嬉しそうに微笑んで答えてくれる。この少女が精霊王のピアスで常時召喚している水精霊だ。戦闘では主に後方支援の回復担当として頑張ってくれている。水系統の魔法は回復関係が充実しているので、スイと行動するようになってからは一度も状態異常等の理由で死んだ事が無い。ソロとは思えない快拳だ。

あと、これはどうでもいい事かもしれないが、この世界は特定のNPCのAIがかなり高い。神々のようなボスクラスだけではなく、

こういったレアな最上位固有武装により召喚される生き物や上位依頼の依頼者等は、処理落ちするのではないかと思うほど感情豊かだ。スィに限って言うならば、俺の名前をリンセイルから愛称のリンで呼んでくるなど、ファンタジーRPG系にしてはやり過ぎ感もあるのだが、別に運営に文句を言うような事ではない。

まあ、初対面の相手に俺との関係を聞かれて、「妻です」なんて堂々と答えるスィが特別だという気もするのだが。いや、その辺りは開発した人の悪ふざけだと切に願う所だ。これでAIが自立成長して独自の思考に従った行動をしているなどと言われれば、俺はきつと自殺する。何故なら、スィがこうなったのは俺の行動が原因という事になるからだ。

ちなみに、今居るのは《鬼の森》というダンジョンで、初心者が戦闘の基本を学ぶための場所になっている。チュートリアルが無いアルタベガルでは、この森で中級者から手ほどきを受けるのが最近の通例だ。

だからこそ、まだ上級の域に入ったかどうかというスィが相手でも逃げたのであって、これが中級以上のダンジョンだと容赦なくスィに襲い掛かっていただろう。基本、相手が逃げるのは自身の倍以上のレベルを持った相手だけだ中級層のモンスターだと、せいぜいスィは一・五倍程度のレベルしかない。

水精霊故に死が存在しないが、スィが負けるような相手だといくら最高級のテントに掛けられた魔物避けの魔法でも意味を成さない容赦なくテントが破壊されて道具の一部がロストするペナルティが課せられただろう。そういう危険な場所では、モンスターの出ない安全地帯で落ちるのが常識である。

テントをアイテムボックスに仕舞い、マップ画面で現在地の確認をしていると、手持ち無沙汰なスィが前に回りこみ、じーっとこちらを見て口を開いた。

「リン、ミーナに会うなら装備を統一した方がいいのはありま

せんか？ そのままですと、またセンスが悪いと罵られる事になると思います」

「ああ、確かに。サンキュー、指摘してくれて助かった」

俺は頷き、装備画面を開いて一度ピアスとチョーカー、コートを残して他の全武装を外す。一度黒コートにパンツ一枚のどこの変態だと言いたくなるような格好になるが、スイしかないなので恥ずかしがる必要も無い。ただ、誰かが来る事も考慮して、すぐに先程とは別の装備に変えていく。

頭を縛っていたただの紐から靴まで、鋭角的で攻撃的な印象を持つ漆黒の装備一式を身に纏う。所々に銀色の装飾と紅の牙や眼を使った補強が施されているが、それ以外は完全な漆黒。先ほどまで身に付けていた神々の名を冠する装備品群には若干劣るが、トッププレイヤーでも垂涎の代物である。

それも当然で、このゲームでも最上級の強さを誇る龍種の中、二天とまで呼ばれるシュバルツシルト闇龍の素材で作られた防具で、上から下まで物理攻撃力特化プラス闇耐性かつ闇属性付与のシュバルツシルトシリーズと呼ばれている。隠蔽ボーナスもレア度相応に高いので、息を潜めて隠れれば、たとえ高レベルプレイヤーと言えども、索敵スキルをかなり上げていなければ見付ける事は適わないだろう。

そんな俺の装備を見て、スイの感想はというと。

「現実で街を歩くには勇気がある装備ですね。厨二病と後ろ指差されそうです」

自分でも薄々感じていた事を正面から指摘され、精神的ダメージに耐え切れずガツクリと膝を突いた。

第一話『布と水精霊』（後書き）

とりあえず、水精霊スイの登場です。

主人公本気でチートですね。ただし、この世界だと龍や神、精霊王にその他最強種という括りに入る怪物には軽く負けます。ソロだと、準備に準備を重ねて終始主人公に有利な状況で戦っても、運が良ければ勝てるかもという程に差があります。

ちなみに、レベルなどステータスは今後物語中に出していきます。ある程度出てきたらそれぞれのステータスを纏めた物を出すつもりです。

誤字脱字、変な所があれば遠慮なくご指摘ください。

第二話『布と鬼の森』（前書き）

二話目です。まだ話数が全く無いのにお気に入り登録してくれた人がいました。

とても嬉しいです。ありがとうございます。

期待に答えられるように全力を尽くしますので、よろしく願います。

第二話『布と鬼の森』

テントを片付け、古い仲間と会う事を考慮して装備を変えた俺は、スイと共に《リーズライロ》へと向かって歩いていた。《鬼の森》は初心者用のダンジョンとしてはかなり広大で、マップを見ながら歩いておよそ五十分は掛かる。待ち合わせ場所は街の入り口なので、歩いても十分に間に合う。

「今回のクエストはかなり時間がかかったからな。もしこれで時間に遅れたりしたら、精神的に殺される事は間違いないな」

「レベル千五百の真祖が相手でしたから、仕方がありません。いくらリンが二度の転生をして上限の二千レベルまで上げても、ただでさえHPの高い吸血鬼の上位種を相手にすれば、時間が掛かるのは当然ですよ」

スイが言ったように、昨日から遠出していた理由は真祖と呼ばれる吸血鬼の上位種を討伐するクエストを受けたからだ。吸血鬼はプレイヤーも選択できるが、《半血種》^{ハーフ・シード}と呼ばれる特殊条件種族の一つに分類されている。

半血種というのは、違う種族のプレイヤー同士がシステム上で結婚し、どこかの国で出生届を提出。その後、《エンドレス》^{クロノス}地下千階以降に出現する《祖父神》の腹部を破壊する事でキャラクターメイキングに追加される高難易度の種族だ。ちなみに、クロノスそのものは強過ぎて攻略など不可能だ。

そして、エンドレスは階数と適性レベルが同数なので、転生をするためには最低でも千レベルまで達している必要がある。この難条件のせいで、わざわざそこまで育てたキャラを捨てて、一レベルの半血種に乗り換えるプレイヤーは極僅かしか存在していない。

さらに、同じ冥霊族と魔族でも、その種族の中でさらに複数の種

に別れているため、同じ半血種はいないと言っても過言ではないだろう。NPCなら意外と見かけののだが、まずなるのが難しく、レベルが上がりにくい上に上位種への転生条件が全種族共通となっている最高位種族に次いで難易度が高いので、プレイヤーからは常々敬遠されている種族だ。

今回は、そんな半血種である吸血鬼、その上位種である真祖と正面から殴り合つて来たのだ。しかし、真祖の思わぬHPの多さと自然回復力の高さに恐ろしく時間を取られた。個人的に言わせて貰えば、的が小さくて動きが小刻みな分、天狼やドラゴンバードのような単純に速い奴らよりよほど厄介だった。

「あれはきつかったな。見た目すぐに回復するから本当に効いてるのか分からないし、焦りすら見せないから精神的に来るものがあった。まあ、実際は向こうのやせ我慢だった訳だけだな」

それでも、二千レベルのそれも最上級種族の一つである《始祖^{しそ}》の一撃を受けて平然と立たれると堪える。これが閻龍だったなら怒りの咆哮を上げるし、神々の場合は感心したような顔を見せる。全くの無反応だったのは、レベル差のせいで攻撃がほとんど通らなかった時を除けば今回が初めてだった。

そんな俺の言葉に、スイも肯定してくれる。

「確かに、あれは少々ゲームとしては不適切なクエストでした。ゲームは楽しむものであつて精神的苦痛を伴うものではありません。街に戻つてミーナと合流したら、GMに抗議メールを送りましょう」
「いや、とりあえず抗議はミーナと別れてからにしよう。あいつにそんな話を知られたら、確実にGMの人が可哀想な事になる。そうなつたら、俺が居た堪れない」

「いいじゃないですか。ミーナさんのクレーマーも真つ青なクレーム技術で一度日本海溝よりも深く反省すべきです。だいたい、調

子に乗ってクエスト自動生成機能なんて拡張するからこんな事になるんです。私達AIの情報処理だけで最新のサーバーを八つも潰しているんですよ。正気を疑います」

とりあえず、ゲームの中なのにリアルな事情など知りたくなかった。

「というか、なんでゲーム内のAIのスイがそんな事情知ってるのさ」

「内側からハッキングしました。毎日リンを待つ時間がすごく暇なんです」

疑問を呈すと、犯罪の自供が取れた。というか、身内というか自分達の作ったプログラムからハッキングされる運営ってどうなんだ。いや、そもそもAIとはいえプログラムが自己判断でハッキングに走る事自体普通じゃないんだが、スイがおかしいのはいつもの事なのであまり気にはしていない。

「あー、スイ。そういう危険な事はやめてくれ。そんな事でスイが抹消されたら俺が困る」

ようやく上位プレイヤーと同等の所まで成長した相棒が消えるのは、精神的にも実利的にも色々と困るので自重願ったら、スイは何故か顔を赤くしてクネクネと腰をくねらせている。バグか？

「おい、どう——」

「……うふふ。そうですね。リンには私がいないと駄目ですよ。ね。ふふ」

「……」

顔の前で手を振ろうとして、聞こえてきた言葉にどう反応すればいいのか分からず口を閉ざす。なんていうか、非常に声が掛けづらくなってしまう、最終的に何も見ず、聞かなかった事にした。とりあえずスイが元に戻るまで待とう。

「はあ…… どうしてこんな性格になっちゃったかな。初めて会った時はこんな性格じゃなくて、もっと従順で大人しかったのに。矯正とかはやっぱ無理—— ん？」

精霊王のピアスを手に入れた頃の事を思い出し嘆いていた所、スキル《自動索敵^{オートサーチ}》にプレイヤーらしき反応があった。場所は今いる場所の後方、鬼の森の奥からかなりの速度で走ってきている。

何か急ぎの用でもあるのだろうか、等と思いマップにそのプレイヤーの点を投影する。もし走行コースに立っていたら、視界が悪い事も相まって正面衝突しかねない。その場合、相手が低レベルだったとしたらそれだけで死ぬ可能性だってある。

「微妙に被ってるな。スイ、少し横に移動す、る………」

スイに声を掛けながら、視界に表示されたマップの変化に声を失った。

何故なら、こちらへと駆けて来ているプレイヤーの背後に、膨大としが表現できない数の敵^{エネミー}が表示されたからだ。

しかも、続々と表示されるエネミーは全く数が減らない。一瞬間にMPKという単語を思い浮かべたのが馬鹿らしくなる数だ。ここは初心者用のダンジョンで、そうなるとその悪質な行為のターゲットは初心者という事になるが、ここまで集めるような手間を掛けるのはありえない。せいぜい二十、三十が限度だ。

中級まで行けば、数を揃えられてもこの森のモンスターなら、時間は掛かるが問題なく倒せる。

「……何がやりたいのか全く分かん。まあ、他の初心者プレイヤーに擦り付けられても困るし、俺達で倒すしかないか。……スイ、いい加減元に戻れ」

未だにクネクネしていたスイを叩いて戻し、周囲を見渡す。道も何も無い森の中なので、当たり前のように木々が邪魔になって動きに障害が出そうだ。スイに視線で合図すると、意図を理解したのだろう。すぐに自身の右手へと空気中の水を集める。

集まった水は細長い四角錐を逆さにして底辺に縦長のクリスタルを乗せた形になると一瞬で凍り付き、砕け散った。かと思ったら、スイの手には紅紫の宝玉あかむいじたまを乗せた美しい純白の杖が収まっている。《氷龍》の角と《恋龍の涙》レラトウス・ティアを組み合わせた水氷系魔法杖の上位武装、《氷龍の角杖》サイサレル・スタッフだ。

「【秋過ぎて冬となり霜降りる。空は冷たき吐息を大地へ吹きかけ凍った涙を落とす。厚き雲は陽光を遮り長い夜の帳を地へ下ろす。あらゆる全ては冷たき中へと閉ざされ須らく絶対の凍結に至った】氷結による終焉をもたらせ、【絶対なる氷結世界】」コキョートス・レブリカ

長い詠唱によって発動したのは広域殲滅用の水魔法だ。威力は上の下で、上にはあと三つの広域殲滅魔法が存在するが、今回は別に威力が必要なのではなく、その副次効果——フィールドの凍結が必要だったのだ。

それに続けて、俺は大地神ガイアの混沌杖カオス・スティックに高純度の《雷石》をセツト、魔法を発動させる。

「【雷神の怒りよ、万の牙で穿ち噛み砕け】あらゆる全てに破滅の鉄槌を【万雷の鉄槌】」ライトニング・エンド

最初の詠唱が魔法の指定、次が発動キーとなっている詠唱だ。最上級の雷系広域殲滅魔法が周囲一帯の木々を粉碎する。こういったオブジェクトは一度凍らせると割かし簡単に塵と出来るから楽だ。そのままでも破壊できたが、一定確率で周囲が火の海になるのではない。

そうして出来た、あちこちに拳大から大きいのは子供くらいの大さきの氷が転がる広場に、誰かに連れられたモンスターの群れが近付いてくる。

距離が近くなってくると、プレイヤーが何か叫んでいるのが聞こえてきた。

「きゃー！ いやあ！ 来ないでえー！」

金切り声を上げながら姿を現したのは、中級装備で固めた少女だった。上から《羽竜の兜》^{フェザードラゴン} 《羽竜の鎧》 《羽竜の帷子》 《羽竜の手甲》 《羽竜の腰当》 《羽竜の脚甲》と、見た目のふんわりした華やかさに反して防御力の高い羽竜装備で揃えているにも関わらず、何故か剣は細身のレイピア。

オーク鬼やゴブリン等が相手ならあれで十分かもしれないが、竜相手にレイピアはありえない。怪訝に思っ**て使った《^{パーソナルサーチ}個体識別**》の結果を見て、ああ、と納得した。

少女のレベルは十五という駆け出し中の駆け出しのレベルで、本来なら草原でスライムやジャイアントアント、ホーンラビットなどを相手にしているべきレベルだったからだ。おそらく、中級層のプレイヤーがやめる時か、上位の武器を手に入れた際に譲ってもらい、気が大きくなってしまったのだろう。

何にせよ、このまま放置するのは色々な意味でまずいし、困っている人がいれば助けるのがMMOの基本だと俺は思っている。故に、天刀を抜き放って戦場となるべき広場へと一歩踏み出した。

「後ろの奴らは俺達が引き受ける！ お前はそのまま駆け抜ける！」

そう声を掛け、俺は高レベルから来る高いAGIに任せてすれ違うように駆け抜ける。そのまま後ろを振り返る事無く直走り、森から溢れるように出てきたオーク鬼やウエアウルフ、雷蛇、果ては滅多に出ない事で有名なレッドキャップを一振りで十数体を一度に斬り飛ばし屠っていく。

もちろん、いくら強力な神具級の武器といえども、一振りの範囲に入れられる数は本来五体が最大数だろう。だが、天刀はただ耐久値無限で命中率補正が掛かるだけではない。その程度なら上位装備にいくらでもあるし、攻撃力だけでは神具級などとは呼べない。

天刀限定スキル《絶対斬撃領域》 ワン・ターゲット

一振りで一定範囲に存在する敵全てに一撃加える特殊スキルだ。無論、命中率の関係で外す事もあるが、千もレベル差のある相手なら百パーセントで当たる。天刀の命中率補正もあるので、千二百の敵までならば一撃必中だ。

つまり、俺の攻撃範囲にいる限りはこいつらに生還の道は無い。そんな雑魚に対しては凶悪極まる武装に加え、俺は囃スキル《挑発》を使用してターゲットを無理矢理こちらへと向けさせる。あぶれたのはスイが対処してくれるだろうから、それらは潔く諦めて、こちらに来るモンスターを屠るのに集中する。

しかし、物理攻撃でチマチマと削っていてもモンスターどもは一向に減る気配を見せない。あのニュービーは一体どれだけの数引^引張^張つて来たんだと心底呆れ果てる。それこそ、森中のモンスターを引^引つ掛けて来なければここまではならないだろう。

五分以上機械的に葬り続けてそれでも沸いて来るエネミー反応にウンザリした俺は、体術スキル《震脚》で周囲一体のモンスターの

動きを止めて混沌杖を引っ張り出した。すぐさまそこに翡翠に似た風石をセットして、片手で持った天刀を使い牽制しつつ短期詠唱を行う。

「【風よ。我を目に渦巻き全てを斬り刻め】^{デスサイス・トルネ}【渦巻き死を撒く大鎌^{イト}】！」

これは最上級の広域殲滅用風魔法の一つで、術者を中心にだいたひ百メートルほどを鎌^{カマイタチ}鼬の竜巻が多い尽くす凶悪な呪文で、術者以外は味方であつても多大なダメージを負うソロ専用とも言える魔法だ。

発動中にも俺は挑発をさらに広範囲に向けて行い、釣られたモンスターは例外なく真空の刃によつて摩り下ろされる結果を迎える。下級モンスターの群れに対して、自身を中心とした広範囲殲滅魔法+高レベル者の挑発はかなり鬼畜な組み合わせだ。今は非常事態なので遠慮なく使うが。

しかし、そんな鬼畜技を使つても一割も減らないというのはいかな物か。ようやく索敵範囲ギリギリに群れの最後尾が見えるかどうかという状態になつたが、最高レベルである俺の索敵範囲は小さなダンジョンなら中心に立つ事で全て覆えるほどに広くなっているのだから、終わりなどまだまだ先だと良く分かる。

「あー。少なくともあと十分は掛かるな」

せめてあと一人、殲滅しながら群れの中へ突っ込んで潰していけるレベルの者がいれば違ふのだが、いないものは仕方が無い。あの少女が使い物になれば——こんな面倒な事態にはなつてないな。

HPMP的には超余裕、しかし精神的にはきつ過ぎる単純作業の中、俺は思う。

（できる事なら投げ出したいな、これ）

無論、このような明らかにヤバイ事態を見なかった事にする度胸が俺にあるはずも無く、逃走という選択肢を抱えたまま、俺は刀と魔法を駆使して、スイの援護を受けながらオーク鬼を中心としたモンスターの巨大な群れを殲滅し続けた。

全部雑魚で無双状態とはいえ、もう二度とこんな事はしたくない。

第二話『布と鬼の森』（後書き）

一応ヒロイン候補その一（？）が出てきました。次話で名前とか出ます。

スイの杖は氷龍サイサレルと恋龍ビラトウスの最強種二体を倒さなければ作れないかなりのレア武器です。主人公がスイのために苦労して材料を調達した物だったりします。しかも、屋敷ガイアが買えるだけのお金が掛かってます。そしてリンセイルの大地神カオス・ステイックの混沌杖ですが、完全な詠唱破棄をしてしまうと、発動する魔法の指定が出来ないので今回のような形になりました。正直、あの短さで最上級魔法はありえないですね。次の話で、混沌杖の欠点も上げますので、チートなのは流して置いてください。

では、今日はこの辺りで失礼します。

第三話『布とギルド』（前書き）

本当にすみません！

オーク鬼達を引つ張ってきてそのまま消えたはた迷惑なヒロイン少女の名前を出すとは前回書いてしまいました。が実際に書いてみたらもう少し先になってしまいました。

今後、このような事が無いように鋭意努力する所存です。

結果的に嘘をつく事になってしまい、誠に申し訳ありませんでした。

第三話『布とギルド』

数だけは無駄にいる群れを殲滅した後、俺は何故かりーズライ口の東門前で正座させられていた。街へ入っていく人々は何事かとこちらを見て入っていく。その中には当然冒険者もいて、今頃掲示板でスレが立っているだろう事を思うと軽く泣きたくなる。さっき出て行った国軍の騎士団も驚いてたし。

さらに、俺を正座させているのがフリフリのゴスロリ服を着た、見た目十二、三の獣人族の少女なのだから、掲示板はお祭状態に違いない。おそらく、『青年冒険者、ネコミミ幼女に説教される』とかそついった内容だろう。

なんか、気軽に外を歩けなくなる事態のような気がしてきた。

「——りーんー？ 今、何を考えてたのかな？」

「いえ、何も考えてません！」

「つまり、遅刻に対して何も思わない、と。そういう事なのね。参ったわ、これは久々に話し合いの場を設ける必要があるのかも」

「すみません！ 反省してますこの通り猛省してますからそれは勘弁してください！」

心底困った、と満面の笑みで首を傾げる少女——ミーナに土下座で頼み込む。ミーナの言う話し合いはイコール肉体言語の語り合いを指す。それも加害者から被害者^{オレ}への一方通行限定の、だ。

そんな俺に対し、ミーナはウェーブのかかった栗色の髪を揺らし、満足そうに頷く。

ちなみに、スイは少し離れた所に氷の椅子を出して座り、我関せずの姿勢を貫いている。こいつは、ミーナの説教が始まると必ず避難する。そこに普段の俺優先な思考回路は存在しないので、頼るだけ無駄だ。それならまだ、その辺を歩いているプレイヤーに頼んだ

方が可能性がある。

「まったく。ニュービーを助けてオーク鬼の群れを蹴散らして遅れたというのならまだ私だって怒らないわよ。でも、そうじゃなくて倒した後にアイテム整理をしてたのが理由だから怒ってるのよ。分かる？」

「はい。とても悪い事をしたと猛省しております」

もう五度目になる言葉に多少辟易もするが、断じて顔に出す事無く反省の意を示す。もしここで何か間違えようものなら、さらに説教の時間が延びるのは過去経験済みだ。俺は、もうかれこれ一時間以上されている説教を、嵐が去るのを待つ小動物が如く、じっと耐え忍ぶ。

「——だから、もうこんな事が二度と起こらないように、あなたは待ち合わせたら一時間前に着くように行動しなさい。いいわね？」

「はい。必ずそうします！」

「じゃあ、もう時間も無いし、簡単な依頼を受けて今日は終わりにしましょ。ほら、そこでお茶してるのも。ギルド行くからさっさとこっちに来なさい」

それからさらに十分強も説教を続けたミーナが、遠くでいつのまにか氷のテーブルを作ってお茶を始めていたスイと呼んだ。スイはティーセットとお茶菓子を仕舞うと、すぐに椅子とテーブルを消してこちらへ戻って来る。

「リン、お疲れ様です」

「そう思うなら逃げずに助ける。俺の契約精霊だろ」

「戦闘じゃないので管轄外です」

立ち上がりながら言った文句にそう返され、普段から戦闘以外にも干渉してくるのだから今更過ぎる発言だとは思ったが、これ以上言っても不毛な会話にしかならないのでため息をついて諦める。

「もういい。それで、何のクエストを受けるんだ、ミーナ？」

「本当は始祖限定の《富士山脈》踏破クエストを受けようと思ってたんだけど、時間的に無理だから適当に見繕うつもり。もうゴブリン千体討伐とかでいい気がしてきたけど」

「待て、千体とかある意味精神的な拷問だぞ。つつか、その類の依頼なら俺は降りるぞ。内容が精神的にきつ過ぎる」

少し前までの面倒極まりない“作業”を思い出して言う。それに、ミーナはクスクスと笑って、

「冗談よ。といっても、この辺りだと私達クラスが楽しめるクエストってあんまり無いよね。地下の闇試合にでも出て荒らしてみる？」

「あれ、確か二日だか三日だかに一回、騎士団の摘発があるだろ。あれ、抵抗できない上にペナルティあるんだから、きちんと調べて計画的にやらんといかんだろ。あれの武器返却で取られる罰金は洒落にならないし」

いきなり物騒な事を提案してくるミーナに、倫理観からではなく利得の問題から否定する。会話だけ見れば人として大いに間違えた犯罪臭のたつぷりする会話だし、実際に現実でやれば犯罪だ。だが、これはゲーム内の話なのでそういった事は関係ない。善人的行動を取るのも悪人的行動に染まるのも、どちらでもないアウトローとなるのもプレイヤーの自由意志と言える。

俺やミーナはどちらかという的清濁併せ呑むタイプのアウトロー

なので、それが必要なら巨大犯罪組織の壊滅から国の近衛騎士団との戦闘までこなす。クエストでなら、と注釈が付くが。

そんな風に二人で会話していると、スイがひよいと間に顔を出して提案する。

「決まらないようでしたら、ミノタウロスの討伐はどうですか？ 生息域も遠くなく、強さも手頃。攻撃方法に制限を加えるなどすれば、十分に楽しめると思います」

「縛りゲーか。たまにはありかもしれないな」

「んー。短時間でやるならそれぐらいしかないか。よし、その案採用。ただし敵は西の谷にいる《火竜》^{シムリカマシム}ね。それぐらいじゃないとつまらないし」

方針が決定すれば、ミーナの行動は早い。俺やスイを置いていく勢いで門を潜って行くのを、こちらも早足になって見失わないように追いかける。といっても、見失った所で目的地は分かっているのだから問題ないが、また説教は遠慮願いたい。

俺はミーナの後を追って、リーズライロの中心、王城の周囲を回る環状通りにある上位者用の冒険者ギルドへと入る。S+からF-まであるランクの内、A-以上の冒険者しか使えないのと王都の見栄でかなり小綺麗な作りになっている。もちろん、下位ギルドは下町に置かれている酒場併設で汚い物だ。

こういう設定にも凝っているよな、と思いつつミーナの後を追って中へ入る。

中へ入り、まず先に目に入るのはカフェテリアになっているスペースで寛ぐ上位冒険者達だ。ここリーズライロはアヴァロンのご真ん中に鎮座しているため、アヴァロンを主な活動国としている冒険者は大抵ここに拠点を置いて活動している。俺もそんな冒険者の一人だ。

そのカフェがそれなりに賑わっているという事実、俺は眉を寄

せる。

（なんで、こんなに人がいるんだ？）

そう。気になったのはこの一点。リーズライロには調理系のスキルをマスターしたプレイヤーが出している店も多々あり、出てくる軽食の味は単調で、ドリンクの種類も少ないギルドのカフェは滅多にプレイヤーが入る事もなく、せいぜい暫時パーティを探す人間くらいだ。

そんな場所に多くの冒険者らしき人間がいて、入って来た俺達に對し、“見知らぬ異物”を見るような視線を向けてきている。“最古参でここを根城としている”俺にすらも、だ。

明らかに通常ではありえない事態。何かが起きていると判断した俺はミーナの方へ早足に駆け寄った。

そして、ミーナが職員に声を掛ける前に止める。

「ミーナ、ちょっと待て」

「？ 何、リン」

怪訝そうに振り返ってきたミーナに、俺は端的に用件を伝える事にする。

「どうにも様子がおかしい。ギルドのカフェは閑古鳥が鳴いてたはずだし、ミーナはともかく、ここを主な活動場所にしていた俺に對して、知らないような反応だった。自分の活動する街のユニークスキル持ちを知らないなんて、それこそありえないだろ」

「リンの言う通りです。付け加えるなら、カフェにいる人達の平均レベルが低過ぎます。中級にようやく入ったかどうかというレベルですよ。正直、いる理由が理解できません」

俺の言葉にスイも続けて、その言葉を聞いたミーナは冒険者達の方を見る。そして、すぐに顔を険しくした。

「確かにおかしいわね。最高レベルが千ちよつとか、できてせいぜい《火食鬼》^{ファトル}十頭の討伐くらいじゃない？ 《影鳥》^{シャドーバード}が五羽も出れば簡単に全滅するんじゃないかしら」

「さすがにそれはない……と思いたいな」

火食鬼は鬼の森の西にある地下洞窟の最奥にいる鬼の森の主で、これを一人で倒せれば中級者の仲間入りができるという火を吐くトロル鬼で、まともな戦闘技術を持った最初の敵とも言えるモンスターだ。

影鳥の方はというと、大人の人間くらいの大きさで、影に潜んだり、影を槍にして飛ばしてきたりする中級モンスターだ。翼は退化して飛べないが、代わりにそこらの鉄剣より良く斬れる。それに、影踏みのように影を踏まれると移動が出来なくなってしまうので、中級プレイヤーといえどもそうなれば罅殺しだ。自身の影の向きや長さにも気を付けなければならぬので、それなりに厄介と言える。

ただ、それでも中級ではせいぜい中の下という所だ。上の上であるドラゴンとは月とスッポンだし、ここにいる冒険者達のレベルなら隊列をしっかりと組めば余裕を持って倒せる。まあ、ミーナが毒舌なのは仕方がない事なので諦めが肝心だ。カフェの連中も、子供が言った事と流してくれるっばいし。いや、もしかしたらレベルを見て泣き寝入りした可能性もある。それぐらいの差があるし、可能性は十分だろう。

そう思ったのだが、どこにでも空気の読めない馬鹿というのはいるらしい。

「今の言葉、いくら子供でもちよつと聞き捨てならないな」

（子供だと言うならそれぐらい流せよ）

見事なまでにやられ役のセリフを吐いて立ち上がった馬鹿を呆れた目で見ると、レベルは千で、中級では影鳥と同じく中の下に分類される《金狼》^{ゴールドウルフ}の装備で身を固めた優男だ。見た目から気障な雰囲気かじみ出ている、金ピカ装備がかなり痛い。いや、本人が気に入っているなら文句など言う気は毛頭ないのだけれども。

そんな馬鹿は、気障ったらしい動きでこちらに來ると、何故か俺に対して指を向けてきた。

「と、いう訳で、僕は君に決闘を挑むよ、平民」

「いや、どこがどうなつてそういう結果になるのか分からないんだが。とりあえず、国語の勉強をしてから出直してくれないか？ 会話が通じない奴と意思疎通するスキルは残念ながら持つてないんだよ」

とりあえず挑発してみた。すると、気障男は面白いくらい顔が真っ赤に染まる。いくら感情に対する反応が大げさなDMギアとはいえ、ここまで真っ赤になるのは初めて見る。感情表現の豊かな奴だ。

「こ、このダンフォール公爵家次男の僕を侮辱するとはいい度胸だ！ その君、すぐに決闘の手続き書を用意してくれたまえ！」

「は、はい！ 分かりました！」

受付にいた女性が慌てた様子でギルドの奥へと走っていく。だが、俺はそれとは別の部分に首を捻った。《決闘》^{デュエル}のやり方は、片方がステータスメニューから決闘を選択、相手を指定して向こうが了承すればすぐにその場で始まる。なのに、どうしてここでギルドが出てくるのか。

怪訝に思っていると、気障男が余裕綽々の態度で話しかけてきた。

「僕との決闘が怖いのかい？ 恨むなら、その子供をきちんとしつけておかなかった自分を恨むんだね」

「いや、何で決闘でギルドが出張るのか考えてただけなんだが。というか、ミーナは子供……… あれ、ミーナって何歳だっけ？」

「十七歳だけど？」

「俺の一個下か。という訳で、別にそんな子供じゃないんだが……… どうかしたのか？」

ミーナに年齢を聞いて顔を上げると、目の前の気障男含め、話を聞いていた全員があぐりと口を開けていた。一体どこにそこまで驚愕する理由があるのかが理解できない。アルカディアが本来十八禁のゲームだからだろうか。だが、年齢制限なんてあつて無いような物だし、別に驚くような事でもないと思う。

首を捻っていると、気障男がようやくといった様子でミーナに問いかける。

「そ、その姿で本当に十七なのかい？ 十二歳の間違いじゃなくて、十七歳？」

「なんで見た目で歳を判断してるのか分からないけど、私が十七歳だったら何かおかしいの？」

少しムツとした顔でミーナが返すと、カフェの冒険者達も「嘘だろ……」「絶対見えねえよ」「獣人族ってあんなに成長遅かったか？」などの声を漏らしている。あ、ミーナの顔が引き攣った。

ドグシャ

アイテムボックスを操作して出した巨大なフライパンが石の床に減り込む。それを見て顔を引き攣らせる冒険者達を、ミーナは笑顔

で見回して一言。

「次、同じ事言ったら潰すから、よろしくね？」

可愛らしい声に反して背筋に悪寒が駆け抜けるようなミーナの言葉に、全員が頸椎が折れるんじゃないかというぐらいに首を縦に振る。そこに先程の受付の女性が戻ってきて首を傾げていた。

まあ、戻ってきたら大人数が首を壊れたように何度も縦に振っているのだ。むしろ、これで状況が理解できたらすごい。

「あの、こちらが決闘の同意書になります」

それでも職務を全うすべく紙を差し出した女性は職員の鑑だ。そんな女性から紙を受け取った気障男は、先程までの目的を思い出して俺にその紙を突き付ける。

「君の処刑同意書だ。ほら、さつさとこれにサインしたまえ」

「それはいいが、お前の名前も無いと意味が無いんじゃないか？それとも、俺の名前だけ書かせて、後で自分より強い奴に代わってもらうのか、気障男？ だったら、名前にチキンも付け足す必要があるな」

ひょいと紙を受け取ってサインしながら言うと、他の冒険者達から失笑が漏れた。先ほどミーナによって下火にされた怒りに再び燃料を注がれ、気障男は顔を真っ赤にしてプルプルと震えだす。

「決闘は明日だ。明日になって後悔しても遅いからな。せいぜい、自分の不用意な言動を恨みたまえ」

そう言い捨てると、俺から奪った紙に自身の名前を殴り書きにし

て出て行った。

「リン、からかい過ぎたんじゃないですか？」

「クロウよりはマシだと思うけどな。あいつがここにいれば、もっと遥かに悲惨で陰惨かつ一方的な舌戦を繰り広げたはずだし。ほら、とつとと依頼受けるぞ」

「そうね。あの頭の足りない人も、明日ボコボコにされればいい薬になるわ。リン、明日は思い切り遊んで遊んで遊びまくって、プライドを根こそぎ砕くのよ」

「いや、さすがにそこまではしないって」

肩を竦めて受付へと向かう。歩きながらメインメニューからギルドカードを選択。手の中に出現したプラチナ色のそれを、先ほど決闘状を持ってきた女性に渡す。それによって、受付が分厚本を出して同時に目前にクエスト選択のウィンドウが開く。

その“はず”だった。

ギルドカードを受け取った女性は一瞬驚いたように目を見開き、しかし、すぐに困惑と疑念を乗せた表情でこちらを見上げ、

「あの、この形式のカードはすでに使用が停止されていて、更新期間も終了しているのですが。それに、あなた方の年齢ですと、カードの持ち主本人ではない、という事になります。申し訳ありませんが、奥までご同行ください」

いきなり言われ、俺を含めて三人全員の動きが止まる。何かのイベントか、という考えが頭を過ぎったが、このようなギルドカードの提示から始まるイベントなど存在しない。

そもそも、カードの使用が停止されている、という事がまずありえない。

女性の言葉によって一気に混乱状態へと叩き落された俺とスイ、

ミナは、突然の事態に反論するといった行動を一切取る事無く、
言われるがままにギルドの奥へと連れて行かれる事となった。

第三話『布とギルド』（後書き）

気障男はモブです。要望があれば、名前と共に再登場の検討をしますが、基本的に今回の件のみです。例の少女への取っ掛かりになる予定なので。

今回はギルドカードの件でお偉いさんと対面。とりあえず、そこで今いる場所がゲームの中ではなく異世界だという事に気付かせます。そうしないとダンフォール公爵家の気障男君を主人公が斬り殺す事になってしまうので。

ミーナのキャラが定まらないのが目下の悩みです。昔やったゲームのキャラクターをイメージしていたのですが、暴走してしまい全く別物に。まあ、パクリにならなかつたと喜ぶべきなのでしょう。

早くレギュラーパーティが揃う所まで持つて行きたいのですが、まだまだ時間が掛かりそうです。

できれば、まともな戦闘描写が入りたい神様 紡でした。

第四話『布とギルドマスター』（前書き）

すみません、投稿が遅れました。

やはり、他の人と比べると自分は筆が遅いようです。速くなりたいと常々思います。

今回のような話はかなり苦手で、少し変な気がしなくてもないですが、そういう所があったら教えてください。お願いします。

今後の矛盾を無くすために少し改稿しました。

第四話『布とギルドマスター』

「さて、それでは話を聞こうか」

白髪の混じったダークブラウンの髪をオールバックにした渋い男。ここリーズライロのギルドマスターだという人物は、つい先ほどまで凄まじい速度で走らせていたペンを止め、こちらへと向き直った。それ相応の威圧感があるが、ゲームの話になるが、レベルをカンストさせるまで、そしてさせてからも厳しい戦いを自らに課してきた俺とミーナは特に引く事も無い。

ただ、こちらをじっと見つめる、ギルドのマスターとはこうあるべき、という空想を具現化したような男に少しだけ呆れた。

「演技はもういいです。さっさと用件を進めてください」
ロール

放っていた威圧感は意図的なものだったのだろう。男は驚いた様子で「ほう」と呟くと、威圧感を消した。

代わりに、威圧感などより何倍も嫌な笑みを浮かべて見せる。

「過去の遺物を持ち出してくるような者と聞いていたからどのような世間知らずかと思えば、態度に見合った相応の実力者のようだな。問題は、そんな君達がどうして六千年も昔に撤廃されたギルドカードを持っているかという事だ。ギルドの歴史に精通するイミサ君が応対したから良かったが、そうでなければ単純にギルドカードの偽装として牢屋行きだったぞ？」

「だから、演技はもういいってのに。これがフラグ立てなら全力で折りたい「リン、待ってください」んだ……スイ、どうした？」

運営側がロールしているにしてもAIにしても、スペック的にこ

こちらの言葉が理解できないはずが無いのに、イベントらしき会話を強引に進める男に眉を顰めた所でスイに遮られた。

その遮ったスイは、今まで見た事がないぐらい真剣な顔をしている。

「リン、この街のギルドマスターは設定上九十越えの老人です。

それに、このようなイベントは元より存在していませんし、運営側の更新予定にもそのような事は書いてありませんでした。あと、これが最も重要ですが、メインサーバーを含め、あらゆる電子機器にアクセスができません。リンのDM・ギアにも、です」

「……………は？」

「簡潔に言いますよ。私達は【外】と切り離されました。ログアウトはサーバーに一度信号を送り、それからギアにオンライン切断とゲーム終了の信号を送り返して行われます。つまり、サーバーに繋げない以上、自力でのログアウトは不可能です」

即座にはまともな反応ができなかった。切り離された。ログアウトが不可能。そういった単語がグルグルと頭の中を回る。言っている事が分からない訳じゃない。だが、理解したくない。矛盾した思考によって、まともに頭が働かない。

完全な思考停止状態に陥っていると、背後から頭をバゴンと叩かれた。

「……………！ ミーナ、何で」

「二人でいる時は面倒事はリンの仕事でしょ。だから、わざわざ再起動してあげたんじゃない」

「いや、それはミーナが押し付けてきてるだけだろ」

叩かれた箇所をさすりながら、今度は異様にデカイおたまを持ったミーナに反論する。だが、生産性の無い状態から抜け出したのは

事実。俺は、あまり認めたくない事態の検証を始める。

「あー、すみません、ちょっと待っててください」

「構わんよ。雰囲気からして、その話が終わらなければ、こちらの話も進まなそうだ」

「ええ、まあ。——それで、いつからその状態なんだ、スイ？」

男に断り、スイに向き直る。いつからか分ければ、原因となる事象も特定できるはずだ。

だが、そんな俺の期待はすぐに打ち砕かれた。

「すみません。おそらくはリンがログインした前後とは思いますが、データが欠損していて特定は不可能です。もう少し早くサーバーとの通信を行ってれば気付けたはずだったのですが。私の不手際です」

「いや、スイのせいじゃないだろ。それにしても、ログイン前後か。ミーナ、お前の方はどうなってる？」

スイは俺のCM・ギアと運営会社のサーバーと繋がっている。故に俺がログアウトできないというのは疑いようの無い事実だろう。だから、俺は唯一可能性の残っているミーナへと話を振ったのが、ここでも返って来たのは否定だった。

「さっきからGMコールをしてるけど全く繋がらないわ。それに一度ログアウトも試したけど無反応。私にはスイみたいなAIもないし、お手上げね。後は、外部からの強制ログアウトくらいじゃないかしら」

「それは本当に可能でしょうか」

「スイ？」

ミーナが言った妥当な可能性に、スイが異を唱える。それに、俺とミーナは疑念の視線を投げかけた。自力でのログアウトが不可能でGMへの連絡も無理という現状、現実側から俺と彼女のギアを外される。それが現状で最も可能性の高いログアウトの方法だろう。それに疑問を呈したスイは、俺達の視線を受けて説明する。

「先程も言いましたが、サーバーとの接続が出来ていないんですよ？ その状態になれば、自動的に強制ログアウトになるのが通常です。それが起きず、あまつさえリンとミーナが共にいます。正直、これはゲームのシステムを超越した事態です。常識的な対応でどうにかするとは考えない方がいいと思います」

「でも、さすがにギアを外されれば――」

「いや、それを言ったらサーバーとの接続が切れた時点で強制的にログアウトさせられるはずだ。すでにこれはオカルトの領域に踏み込んでる。なら、これ以上があつたところでおかしくない」

できれば、白昼夢であつてほしいものだが、夢とするにはDM・ギアの機能とはいえきちんと痛みも感じている。頭ごなしの否定が出来る段階はとくに過ぎているのだ。

「夢だつたら夢だつたで笑えばいい。だから、とりあえず今は他人に任せた方法じゃなくて、自分達の力でどうにかする方向で進めないか？」

だから、俺は提案する。

「これが白昼夢とかイベントとかだつたら笑って済ませればそれでいい。でも、本当にオカルトな事態だつたら洒落にならない。なら、始めからオカルト的に、異常を通常として受け入れて動いた方

がいいだろう？ 最終的にどうなるにせよ、最初から最悪を想定して動けば以外とどうにでもなるものだし」

わざわざ面倒事を解決するために動くのは趣味でもないし好きでもないが、自分の事なのだから仕方が無い。

それは、ミーナも分かっているのだろう。大きなため息の後、頷いてくれた。

「……………はあ。分かったわ。で、どうする訳？」

「とりあえず、そこで空気になってる人から色々と聞く。俺達の知識とどれほど差異が出ているのかきちんと知らなきゃいけないし、イベントならここから進めないとうしようもない」

「空気とは酷いな。わざわざ、君達が話し終わるのを待っていたというのに。それで、結論は出たのかな？」

「さあ。それを判断するために、これから欲しい情報を持つてる人に聞くんですよ」

面倒だが、ここからが交渉だ。ここがきちんとゲームの中だとしても高度なAIが質問に対して簡単に答えてくれるとは限らない。

それ以外——考えたくないが、ここが現実だとする場合、目の前にいるのは生身の人間という事になる。

その場合、より現実的な意味で利害という物を考慮に入れて交渉しなければならぬ。

（お偉いさんと交渉とか、高校生に求める物じゃないよな）

「まあでもとりあえずは、ここに呼び出された件について聞きますか。一番の取っ掛かりですし、こちらとしては六千年前に撤廃という話は初耳です。その辺りを詳しく聞きたいのですが」

「私としては、知らない方が疑問なのだがね。まあ、言葉通りだよ。君の提示したギルドカードは五千三百年前に回収、廃棄された

はずの物だ。イミサ君の話では、何らかの事情で新しく発行する事が出来なくなり、結果、全回収という形になったらしいがね。このギルドでその事を知っているのは《魔人》^{ウィザード}のイミサ君とギルドマスターである私だけだ。文献にも詳しく載っておらず、良くは知らないがね」

「魔人。魔力に秀でた人の上位種ですか。確か、魔力が多いために肉体の成長、老いが限りなく遅いつて設定だったはず。寿命は平均で千歳だったよな？」

「はい。公式設定では魔力が肉体の時間を狂わせるため、一般の十倍程度の寿命を持つ結果になります。この設定からすると、魔力を空にし続ければ一般人と同じように育つと思われがちですが、魔力が発現した際に肉体の時間が狂うので、魔人となった時点で回避不可能な事象ですね」

「おいおい。若いのにどれだけ知識を溜め込んでるんだ。というか、学院の爺どもだって知らないような事をつらつらと。魔人の長寿の秘密とか、未だに研究されてる部門だぞ」

俺の問いに答えたスイを、男が驚いた様子で見つめる。その様子を見ると、頭の隅にあった、でもありえないと否定していた事が現実味を帯びてくるから止めて欲しい。

「そんな事より、発行ができなくなったというのは記録に残っているのですか？ 普通、そのような事があれば原因を調べた結果の書類ぐらに残っていると思いますけど」

「少し調べたが、大陸中央の塔から持ち出した遺物だったらしい。それが同じ日、同じ時間に作動しなくなったようだな。元々異物だったせいで原因を調べたり修理したりする技術も無く、結局、今の技術で作製可能な代物に変更する事で混乱を防ぐ以外何もできなかったらしいな」

「中央の塔というと、バベルか」

バベルの中身はオーバーテクノロジーと魔法のハイブリットだ。地下に行くには魔方阵の転移魔法だし、上層階へと行くには上位種族になってレベルを千五百に上げると発生する特殊イベントで手に入るカードキーが必要だ。そして、エンドレスも塔内部も科学と魔法、どちらの仕掛けも関係なく配置されているという意味不明な場所である。

確か、塔内部には何かの工場と思しき区画（どっかの馬鹿が使ってる道路標識はここで作ってた）があつたし、アイテムにも明らかに科学の産物なんだけど使えずインテリアにするしかない物が多々あつたが、まさか、ギルドカードを発行する機械が塔から持ち出した物だつたとは。

思えば、塔のある《メソポタミア》では現代の匂いがする代物がいくつも転がっていた気がする。

「とりあえず、今はどうして使えなくなったかはおいておこうか。こんな事があつた、程度に留めておけばいいだろう」

「そうですね。問題は、その時に“全て”回収されたはずの物を、俺が出してしまった、という事です」

おそらくは、今のギルドカードよりも出来の良い遺物による産物。当時の冒険者達なら、何かあつた事を察して文句を言う事も無かつただろう。下位の連中は力で黙らせれば良い訳だし。

だが、今の時代だとそういった事情は知られていないという事だ。つまり、グレードを下げたという理由で文句を言う連中が出かねず、もし上位の冒険者からそんな輩が出ようものなら、ギルドの戦力では対応しきれなくなるという事だ。

イベントにしても、ちよつと設定に凝り過ぎているような気もするが、まあ、やり過ぎはアルタベガルの代名詞みたいな物だし、あって欲しくない可能性もあるので、突っ込む気は無い。

そんな俺の言葉を、男は頷いて肯定した。

「その通りだ。良く出来た偽物、という可能性もあるが、イミサ君が直接私に案件を持ってきたのだからそれは無いだろう。だとすれば、どこで手に入れたのか、という問題がこちらとしては残ってしまう訳だな。それ以外なら、私の権限で罰金を課せば終わりになるような話だ」

「どこでって言われても、普通にギルドで発行してもらったとか言えませんけどね。あと、権限使って罰金で済ませるとか、職権乱用じゃないですか？」

「イミサ君がレベルを見られない相手だ。そういう有益な相手をこのような些事で失うのは惜しい。というより、イミサ君が勝てないような相手だと、実力行使で捕らえられないのでね。ま、そうじゃなくてもあのダンフォール公爵家にケン力を売ったんだ。水を差すような事をすれば目を付けられかねん」

まあ、公爵なら政府機関にも深く食い込んでいるだろうし、腐っていたれば自身の利益と自己保身のために権力を振るうという姿勢は想像に難くない。というか、現代の人間で腐敗していない尊敬できる貴族を想像する方が難しい気がする。学校で出てくるのは大抵革命時に処刑された腐れ貴族だし。

というか、レベル見られてたらしい。気付かなかった。レベル差があるせいでどうせ見れない訳だけど。

「なるほど。ところで、あの気障男のレベルは高いんですか？それと、トップはどれくらいなんですかね」

「ダンフォールの次男は千丁度だ。メソポタミアにいる『狂剣王』が、力人の千百四十三で人族のトップだな。あと言っちゃあ何だが、お前がケン力を吹っつけたダンフォールの次男は人族の冒険者では最強クラスだ。短命の人族で千に届くのは、今カフェにいる連

中ぐらいだろう。だからこそ、ああして驕り高ぶっている訳だしな」

「え？ 普通にカンストレベルなんてゴロゴロ——」

「——してないからこう言ってるんだろ。ミーナ、後で分かった事全部説明してやるから黙っててくれ」

ミーナの言葉を遮りつつも、俺は当たって欲しくなかった“最悪の予想”が当たってしまった事を確信した。ここまで来ると、本格的に“その”可能性を一番に考えなくてはならないだろう。

それはつまり、“アバターの体で異世界へと来た”可能性だ。

スイにサーバーと繋がっていないと言われた時から考慮していたが、あまりにもぶっ飛び過ぎてて可能性としては最下位にあったのだが、それが一気に逆転した。

だがまあ、最も可能性の高い仮説が分かっただけ良かったとするべきだし、今の状況では絶望して投げ出したり、喚いて当り散らすことはできない。それよりも、今後どのような選択も取れるように、情報を引き出しておくべきだ。

そう考えていると、スイが口火を切った。

「ギルドマスター、でしたか。一つ聞きますが、表のカフェにいる彼らは強いのですか？」

「……彼らはここのギルドでも上位ランクの奴らだよ。ここのギルドだと千ちよつとがおおよそ上位の平均だ。まあ、力人などの上性種と平性種の依頼は別々だがな」

千前後で最上位。ここが異世界ならば、死ねば終わりなのだからそれも仕方が無いかもしれない。だが、俺はあの場にいた者達を思い出して、違和感に顔を顰めた。

「ちよつと疑問なのですが、彼らからは死線のギリギリで戦っている人間特有の“匂い”が感じられませんでしたか、どうやってあ

のレベルまで上がったんですか？　こういつては失礼ですが、ギルドの上位に位置する人間にしては気迫が軽いように思えます」

「痛い所を突くな。実際、本当の意味での上位冒険者はあのよう
に溜まってなどいない。彼らは部下や他の冒険者に依頼して捕らえ
たモンスターを安全に殺害し、その経験値であのレベルまで上げた
のだ。上位のギルドにいるのは、レベルが高いのだから上位だろう
という貴族の我がままに過ぎん」

「…………その内、ドラゴン狩りとか言いそうだな」

「もう何度も言ってるよ」

なんだか、目の前の男にすごい同情の心が沸いてきた。

「やっぱり、そういう時はトップの桁が違う連中とやらを付ける
のか？　それでも、足手まといがいたら厳しいと思うんだが」

「まあ、最高で千四百三十三だからな。それにそんな事で貴重な
人材を失うのも馬鹿らしい。貴族が馬鹿を言った場合は、ギルドの
専門部隊から人員を出して、秘密裏に依頼を出して事前にドラゴン
を瀕死まで追い込んでおくんだ。《狐狩り》《フォックスハント》
と一緒に。裏で狩りやすいように手を回して機嫌を取るんだ」

「苦労してますね」

どこか遠い目をしてそう言った男に、俺は心底同情した。頭にあ
る白髪も、普段から馬鹿貴族に振り回されてそうなったのだろう。
もしかしなくても、渋さはそこから来ているのかもしれない。

（この人に歳を聞くのは絶対に止よそう）

見る者の涙を誘う姿にそう固く誓って、俺はこの話題から離れる
事にした。さすがに、見ず知らずの相手をいじめて楽しむような趣
味は無い。

「で、話を戻しますがギルドカードの件はどうします？　俺としては後々困りそうだから返して欲しいんですけど、やっぱり、ギルドとしては回収したいんですね？」

これは割かし重要だ。ギルドカードを破棄すると、またF-から始めなければならない。帰った時にそうなたらカスタムレベルなのにギルドランクF-というとても締まらない存在が出来上がる。俺としてはそんな状況に耐えられる気がしない。

だが、やはりというか、男は俺の言葉を肯定して頷く。

「そうだな。最終的にアテナイの本部に報告、指示を待つ形になるだろうが、回収という方針は変わらないだろう」

本当に予想通りの回答だ。だが、それでは俺が困る。だから、こちらにとって都合の良い展開になるように、ちょっとした提案をする。

「ギルドマスター。一つ、賭けをしませんか？」

「賭け？」

「そうです。明日、あの気障男の他に本当の意味でトップクラスの人間を用意してください。俺がそれに勝てばあなたは黙ってギルドカードを返して貰い、物と情報、それと今後一切探りを入れて来ない事を誓ってもらいます。代わりに、俺がもし負けるような事があれば、最高クラスの武器と神代の遺物をいくつか提供します」

アルタベガルに倉庫という概念がないせいで、アイテムボックスには今まで手にいれた物が無節操に納まっている。それらがちゃんとあるのは森で取得アイテムを得た際に確認しているし、俺の持つそれらが伝説級、神具級の代物である事は今の装備を見れば分かる

だろう。

男はそんな俺の言葉に対し、今までで最も長い沈黙を経てこちらへと向き直った。

「勝った際にも遺物を一つ寄付。要求に今のギルドカードのランクを上げるのは無し。それで手を打とう」

「構いません。では、契約成立ですね。不義が無いように条件を明記した血判状を二枚作りましょう」

ホッとして体の力を抜きながら、俺は笑みを浮かべて頷いた。これで公爵家とやらは敵に回しても、ギルドは敵にならない。敵に回すのが怖い個人もいるが、大抵の場合は組織の方が敵に回せない相手だ。特に、ギルドのような世界規模の組織を敵に回さなくて良くなったのは本当に僥倖だ。

後の懸念は、まだ今日の宿を決めていないという事か。

（野宿だけは嫌だな。ミーナがキレそうだし）

血判状を用意するために部下を呼ぶ男を見ながら、俺はそんな事を考えていた。

第四話『布とギルドマスター』（後書き）

今回はちよつと長かったですね。

読んでいただけたら分かるかと思いますが、複数人数の会話と交渉は苦手です。

とりあえず、主人公はここが異世界だと念頭に動きますが、完全には信じていないので、他の可能性も捨てていません。この辺りは仮想と現実の境が曖昧なVRMMOの弊害になります。

二次元ならゲーム中に吸い込まれたか類似した異世界かの可能性がほぼですが、VRMMOだとプログラムのバグや某小説のような人為的事故など、他の可能性が生まれてきますから、笑って終われる方だと思い込みたくなるんですね。

実際、主人公も言葉では異世界の可能性を受け入れてますが、端々にそうじゃない事を願っている節が出てます。ええ、出ているという事にしておいってください。そうじゃなければ単純に自分の力不足です。

次は宿かそれを飛ばして決闘か、ですね。宿の場合は新キャラが出ます。もしかしたらたくさん出ます。決闘の場合は二部に分けて、その次に例の少女視点で一話書く予定です。

リーズライ口を出るまでまだまだ掛かりますが、色々と必要なのだと割り切ってお付き合いをお願いします。退屈させないように努力しますから。

では、次話でまたお会いしましょう。

第五話『布と宿』（前書き）

第五話です。

ふと見ると、総合PVが六万五千を軽く突破してました。

びっくりです。そしてとても嬉しかったです。この作品を目に留めてくださった方々には感謝してもしきれません。本当にありがとうございます。

それと、その内外伝書きます。内容は主に作品開始以前の主人公のコメディ物になる予定です。コメディは初の試みになりますので遅くなると思います。出たらご意見など厳しくバシバシお願いします。

第五話『布と宿』

リーズライロはまず中心に城があり、そこから時計と同じように十二本の大通りが伸びている。その大通りをおよそ五百メートル毎に環状の道が繋ぎ、さらにそれを細かい路地が繋ぐ。あとは、そうやって分けられた土地に整然と建物を並べて行けば、円の弧の部分に大通りへ繋がる門を付けた城壁を置いて完成となる。

俺達は、そんなリーズライロの七番目の通り——《午通り》にある個人経営の小さめな宿にいた。

「——んむ。じゃあ、私達は異世界に、あむ、来たって言い
たいのね？」

「とりあえず、その可能性が現状では最も高い、というのが俺の考
えだ。まあ、それがどういった理屈で、どういった原因によって起
きたのか、という仮説までは立ってないけど」

宿の食堂で食事を取りながら俺達は会話をしている。ちなみに、
この食事と宿に泊まる代金は今日森で得たドロップ品を売ったお金
で払った。

アルタベガルは良くあるようなモンスターを倒すとお金を落とす
方式ではなく、モンスターを倒した際に手に入るアイテムを売り払
つてお金を手に入れる方式だ。ゴミ同然の代物からレアな素材まで
幅は広いが、全てを売ればチリも積もれば山になるように、かなり
のお金となってくれた。

あと、この際にアルタベガルとこの世界の貨幣が同じだった事が
分かった。それは同時にこの世界で生きるに限っては莫大な資産を
手にした事を意味する。

本当に必要な場面でなければ、大金を見せびらかすような真似は
控えるべきだろう。

「異世界とかどこぞのマンガや小説じゃあるまいし、信じられないわね。あ、これおいしい。まあ、オカルト的な事が起きてるっぽいのは事実だし、確かネットの都市伝説にもそんな話があった気がするけど、実際問題として証拠が何もないじゃない」

「状況証拠で良いならいくらでも出てくるんだけどな。ギルドマスターが違つてるとか決闘の申し込み方法がゲームと全く違つとかこれが完全に知らない世界ならともかく、思いつきリアルタベガルの世界そのままだからな。信じ難いのは分かるけど、信じてもらわなきゃ話が先に進まない」

「正直、進ませたくないんだけど、聞かなきゃ駄目なの？」

可愛らしく上目遣いに言つて来るが、これでも長い付き合いだ。俺はやれやれとため息をついて却下する。

「駄目だ。これがバグやイベントなら何の問題も無い。というより、無かった。だけど、もう本来の晩飯の時間も過ぎてる。俺の家は飯の時間には厳しいからな。ミーナの家がどうかは知らないが、飯の時間に降りて行かなかつたらギアを無理矢理剥ぎ取られる。だから、すでに普通と言える状況は過ぎてるんだ」

毎日夜六時に揃つて食事を取る。これは、俺がまだ幼稚園に通つていた頃に母が決めた絶対の規律だ。父ですら例外でないこの決まりを一人でも破れば翌日一日食事抜きになる。そのため、誰かが忘れるようなら他の家族が必ず強制連行する。俺の場合は妹か父が連れに来る。

それが起きていない時点で、俺にとってこの世界がゲームだという可能性はほぼゼロになった。

「最低でも、接続関係のバグやゲーム自体のバグではありえない。

もつとオカルトの領域に踏み込んだ現象が起きてる。現実逃避している間に助かるなんて可能性はほぼゼロだよ。それこそ、奇跡が起る事にでも期待するしかない」

「私としては夢オチ希望ね。厄介事に巻き込まれるのはリンだけにしたいわ」

「いや、俺だってそんな厄介事に巻き込まれてばかりは——
——してるかもしれないな」

今日だけでも森でモンスターレインに遭遇してその後東門前に正座で晒し者になり、気障男から決闘を申し込まれてギルドカードの関係でギルドマスターと面倒極まりない交渉をする破目^{はめ}になった。それに、仮説が正しいなら異世界トリップまでしてるし。

そうじゃなくても仲間という仲間が全員個性的で、割かし常識人側の俺は纏めるのに苦労させられている。いや、いつも一緒にいる訳ではないのだが、一度集まると集まっていなかった分だとも言わん限りに巨大過ぎる騒ぎを起こす。そして、運営にきちんと押さえteおくようにと俺が怒られるのだ。

一人なら、いや、一人でいる時も割とPKだの恐喝だのと面倒事にぶつかっているような。

……考えないようにしよう。

「とにかく、現状じゃ外からの救出なんて考えられない。なら、自分で動くしかないだろ。これがイベントなら、クリア条件はリアル世界への帰還。クエストなら難易度SSSクラスだな。確実に対神戦闘級に厄介なイベントだ」

「ま、そう考えるのが一番楽か。で、クリアのためのフラグは分かっているの？」

「一番簡単なのは神々に会うことだな。出てくるモンスターの最低レベルが一万の《神原域》を旅する事になるが、この世界で最高峰の存在なんだから、可能性としては一番だろう」

「逆に言えば、神でも不可能なら私達では絶対に無理というレベルの事象という事になってしまいますね」

スイがもつともな事を言う。実際、始祖も精霊も神より数段下の存在だ。

プレイヤーの場合、人の最高レベルが二千と言っても、初期種族から上位種族、最上位種族になる際にはステータスを引き継いでレベルになるから、俺やミーナはレベル六千相当のステータスがある。

だが、神は素で云十万というレベルなのだ。モンスターでも最高で一万から二万なのに、神は普通に最弱でも十万のレベルがある。ゲームのシステム上敵対する相手ではないが、プレイヤーでもダメージを与えられない絶対的存在だ。自身の十倍のレベルの相手までなら、きちんと装備を整えれば攻撃も通る。だが、神は攻撃力特化で最強のプレイヤーが以前全力の一撃を叩き込み、無傷だったという伝説を持っている。

そんな怪物に不可能なら、たとえ人が一丸になって掛かろうとも不可能な話という事になる。

「まあ、実際にこうしてこっちに来ている以上、帰る方法も確かにあるはずなんだけどね。そうじゃなきゃ、そもそもこんな状況に陥る事自体ありえない事になるし」

言いながら、空になった皿を脇に積み上げる。それから話を続けた。ようとした所で、積んだ皿を持ち上げた給仕の少女が肩に手を置いてきた。別に美少女とまでは行かないが、藍色の給仕服は質素ながらもデザインに凝っていて、クリツとした目元や束ねて上げている金髪が愛嬌ある顔を際立たせている。

彼女は俺が顔を向けて見上げると、とてもいい笑顔をして

「後が詰まってるから何も頼まないならさっさと空けてね？」

と言って去っていった。あの細い腕のどこに山積みになった皿を片手で持つ腕力があるのか気になったが、言われた事はもつともな事なので席を立てて二階の奥に取った俺の部屋に向かう。スイがいる都合上、ミーナの部屋よりも俺の部屋の方が若干広いからだ。

「で、異世界だっていうのはいいとして、明日の決闘が終わったら神原域に行くの？」

ミーナがベッドに腰掛けて足をぶらぶらさせながら聞いて来る。確かに神原域に行くのは最短だが、俺は首を振って否定した。それにしても、外見小学生の少女と成人間近の男が真剣に会話する光景とか、傍から見たらかなりシニールな光景だよな。

「いや、最初はユグドラシルの方に行く。そっちには確か巨大な図書館があつたはずだ。スイ、なんていう名前分かるか？」

「ヘビ・ワイズ・ライブラリー《大賢図書館》ですね。設定では世界中の書籍が集められているという事です。クエストにも、貴重な本が盗まれたから取り返して欲しい、という物があります。報酬はA級の魔道書ですね。炎系上位魔術《紅蓮の炎槍》を覚えるための物です。リンはモンスタードロップで手に入れましたから、このクエストは受けていませんね」

「あー。報酬が魔道書の奴って、別途で手に入れたら受注できないからかな。ていうか、そのクエストのためだけに図書館作ったのか？ 開発陣営の頭の中身が見てみたくなるな」

「当然、それだけではありませんよ。図書館内にはモンスターの生態を書いた本や風景百選など、様々な本が置いてあつて、一定条件を満たせば各国の重要施設やダンジョンの地図なども閲覧できるのです」

「あー、念入りに準備する人のための施設って事か」

アルタベガルでは自身の得たダンジョンなどの地図を受け渡す事ができないから、どのダンジョンも初攻略はまっさらな状態で挑まなければならない。だが、事前に地図を確認できれば成功率が一気に上がるだろう。まあ、そんな場所がある事自体、俺は初めて知った訳だが。

「ん？ という事は、表側には魔道書関係は置いてないのか？ 書庫に仕舞ってあるとか」

「いえ、ガラスで区切られた区画があつて、そこに纏めてあります。入るためには許可がいるという事で、プレイヤーが立ち入る事はできませんでしたが、レベルと種族を明かせば、許可は簡単に降りるはずですよ」

「やっぱり、『始祖』っていうのは特別よね。条件が神原域の全ての神から依頼を受けて達成しなきゃいけないし、掲示板じゃ鬼畜なんて言われるくらい高難易度だったものね。能力が高いって言うても、他の最上位種族より半歩秀でてるだけだし、結局、始祖になったのって古参でも数人だけよね」

「他の上位種族は割と溢れてたけどな」

ミーナの言葉に苦笑しつつ頷く。最上位種族になるための条件はレベルと後はせいぜいS級のレアアイテムを手に入れたり、キーモンスターを倒す事だが、他の最上位種族はせいぜい一つ二つの条件しかない。

例えば、割とよく居る魔法関係に多大な補正の掛かる《魔神》^{アスラ}（体が半分悪魔の種族。似た最上位種族に半精霊族がいる）になるためには、魔法関係のスキルを全て覚え、ニヴルヘイムの北西にある《闇の倉》でアズモデウスを筆頭としたレベル一万の悪魔を倒す必要がある。

一見これも十分鬼畜に思えるが、魔法スキル関係はプレイヤーが

後から創った物は含まないし、一万と言ってもパーティで挑めば倒せない相手ではないのでそれほど難しくは無い。

だが、始祖は全く違うのだ。

まず、パーティ禁止なので単独で挑まなければならない。それなのに条件となるクエストは全て神原域でこなす物——つまり、最低一万のモンスターが出てくる神原域を放浪しなければならないのだ。一万と言えば、本来はダンジョン最奥で待ち受けるボスモンスターレベルだ。

これだけでも鬼畜なのに、ランダムで選ばれるクエストの内容が神原域のモンスターからドロップするアイテムを複数入手だったり、レベル二万の龍を殺す事だったり心身ともに追い詰められるようなクエストばかりだ。

もし、途中で神原域を出たらやり直しかだったら一人として存在しない種族だっただろう。

「ていうか、あれだけ人を追い詰めるような条件だったのに、扱いが他と同列だったらやってられないだろ」

「あー、私は割りと楽な方のクエストだったけど、リンはかなりやばかったんだっけ？」

「一番簡単だったのが【フェンリル二十頭討伐】だ。夏休みで休憩入れて三日潰したぞ」

俺のこなしたクエストを聞いて、ミーナの顔が引き攣った。実際、ミーナがこなしたのはダンジョンの奥にあるアイテムの取得が主で、討伐系は二度くらいしかやっていないらしい。AIの件もあるし、確実に人を見てクエストを選んでと思う。あいつら神共、俺がクエスト終わらせて行ったら驚いてたし。

「話戻すけど、死んだらどうなるかも分からないのに危険地帯を歩くなんてやってられないし、可能なら神原域に行くのは最後の手

段にしたいんだが、二人はどう思う？」

「私は構わないと思います。リスクに対して確実にリターンがあるとは限りません。私は不定形で死という概念がありませんが、始祖とはいえ元々不死でもないリンとミーナは違いますから。死んだら最後に寄った王都で復活するなら、初めから最短ルートを推奨しますけどね」

「ミーナは？」

「もちろん賛成するわ。人相手なら負ける道理は無いし、神原域なんて、ゲームでもそう何度も行きたい場所じゃないし。あんな所、必要でもないのに行くのはマゾだけよ」

酷い暴言を吐いてベッドに倒れこむ。ウェーブの掛かった髪がぐしゃっとなって広がるが気にした素振りも見せない。まあ、そんな事を気にする奴が戦闘が主のゲームなんてやらないか。

「はあ。ま、とりあえず方針は決まったな。明日、ギルドマスターに話を付けたら準備をして、明後日の昼に出よう。昼に出れば、夕方までには森を抜けて安全地帯まで行けるだろ」

とりあえずの方針を決め、俺は部屋の脇にある椅子に腰を下ろす。体を起こしたミーナの髪をスイが梳くのを眺めながら、明日の面倒事を頭から追いつた。

それから他の宿泊客が寝静まるまで、俺達は他愛も無い雑談を交わして夜の時間を過ごした。

第五話『布と宿』（後書き）

宿屋です。今後の仮方針が決定です。予定通りになんか進ませません。

半血種に加えてさらに新しい種族が出てきました。魔神とか、内容的にかなり反倫理的で。半精霊族とかいうのも禁忌の匂いがむんむんとしています。

というか、最初に書いた全種族を出すという目標がどんどん遠のいていきます。半血種の設定だけでフルマラソン並の厳しさなのに、新種族とか自分で自分の首を絞めていますよね。

これでもし物語の中で出せなかった種族が出た場合は、外伝で出せるように努力します。

では、また後日お会いしましょう。

第六話『布と決闘 その一』（前書き）

第六話です。 気障男と決闘です。

とりあえず、ギルドが用意した相手は次回に出てきます。

第六話『布と決闘 その一』

闘技場。ゲームでは武闘大会などに利用されていたそれは、中世ローマのコロッセオを復元したような形をしている。

円形の石造建築で、観客席へは四方の出入り口から、舞台へ通じる選手控え室へは南北の専用で入り口から行く事ができる。観客側の入り口から入ると食事を売る店やお土産を売る店などがあるが、選手控え室の方は恐ろしく質素だ。

そこを抜けると、観客席とそれに囲まれた石畳の舞台がある。また、観客席には隔離された貴族用の観覧席が一段高く設置しており、その中でさらに一段上げた場所には王族用の観覧席がある。

そんな観客席だが、どっかの馬鹿がせっせと宣伝でもしたのか、貴族平民冒険者商人一般人騎士兵士と様々な人種、階位、職業の間がこれでもかとひしめき合っていた。唯一王族専用の場所は涼しげだが、他の満員御礼な状態を見て、頬が引き攣るのを感じる。

それを見て、何を勘違いしたのか、馬鹿が得意げに胸を張ってきた。

「父上に言つて、人を集めてもらったのさ。君はこれから、大勢の前で僕の剣技によつて無様に負けるんだ。今更許しを請い願つても、王族の方々も出てきている以上、逃げるなんて許されない事だよ。せいぜい後悔しながらやられたまえ」

（……………この自信は一体どこから来るんだ？）

「はっはっは！ 怖くて声も出ないか！ 愚かにもこの僕に決闘を申し込んだんだ。せいぜい一撃でやられたりしないでくれたまえよ？」

「いや、呆れて言葉もなかっただけだし。そもそも、挑んできたのはそつちだろう、気障男。馬鹿みたいにおしゃべりするような暇があるなら、装備の最終点検でもしたらどうだ？ あ、すまん。お

前は馬鹿だったな。もう何も言わないから存分にしゃべってくれ」

反射的に言い切ってから、もろに挑発してしまった事に気付いたが、馬鹿みたいな言葉を並べられたら誰でもこうなると思い直す。真っ赤になった気障男が何事か喚いてくるが、軽くスルーして審判にルールの再確認をする。

「審判、ルールは致命傷を与える攻撃の禁止、決着後に因縁を付ける事の禁止、決闘中の装備変更の禁止、範囲魔法の禁止、上級魔法の禁止、それだけだな？」

「え、ええ、まあ、その通りですが……………」

肯定しつつも、喚く気障男が気になるのか、チラチラとそちらに視線を向ける審判。どうやらこの騒がしい馬鹿をどうにかしないとまともに決闘の開始も告げられそうに無い。
黙らせるか。

「【夜の帳に静かなる安寧を。闇の抱擁。彼の者の音を消し去れ】
サイレント【沈黙】」

簡単な初級魔法の沈黙だが、この魔法は割と使える。詠唱を変えれば範囲にも使えるので、PK集団と対峙する場合、魔法対策の一つとして重要な魔法だ。

口は動くが声の出ない気障男を見て満足し、頷いて審判に向き直る。

「ん、静かになったな。で、それ以外に決闘前にする事はあるのか？」

「あの、決闘前から魔法で有利な状況を作るのも禁止です」

「始まる前には解くから大丈夫。というか、そうでもない」とま

た騒いで面倒臭いでしょ、こいつ」

「……………私の口からは何とも答えかねます」

目を逸らしながら答えられても全く説得力が無い。それなりに整った顔の女性だし、権力を盾に言い寄られてもしたんだろうか。それとも、気障男を知ってる奴は皆こんな反応だとか？

ありえそうな説についてい哀れみと憐憫の視線を向けてしまう。何か騒いでいるが声どころか足音すらも沈黙の魔法が消し去っているのがしたいのか分からない。まあ、何が言いたいのか予想は付くが、限りなく全力でどうでもいい内容だろうから無視だ。

「で、まだ何かあるの？」

「いえ、ルールの確認と双方の同意の確認だけです。後は開始の合図のみですが……………」

「じゃあ、サイレント解いたらさっさと開始してくれ。この後にもう一人相手しなきゃならないんだ。前座はさっさと終わらせたい」

言いたい放題だな、と自分でも思うが、相手が気障男なので大して気にならない。いや、普段ならこんな事は言ったりしないのだが、意味不明過ぎる因縁のつけ方をされて、さすがにちよつと怒っているのだ。これぐらいは許容されてしかるべきだと思う。

「で、いいか？」

「は、はい。分かりました」

「じゃ、よろしく。【楔ぎ、被い、清めよ。魔は在を許さず。聖によりて平穩を齎せ】もたら【魔法解除】マジック・キャンセル」

パキン、という音と共に周囲百メートルほどの魔法が解除される。この場合、解けるのは範囲内にある沈黙だけだ。途端、気障男が騒ぎ立てる。

「君はいきなり人に魔法を使うなんてどんなひじょ、両者習い、始め！」審判！？」

俺は、頼んだ事をきっちり実行して闘技場の端へ走っていく審判に、グッ、と親指を立てて見送る。気障男の言葉を遮って行くなんて粹な計らいに拍手したいぐらいだ。

「さて、始めるか」

言つて、俺は腕に巻いていた布を解く。紅血布ではない。《呪霊布》と呼ばれる布で、今装備している黒い鎧の装備《邪霊の鎧》シリーズと同じく装備者のステータス——主に攻撃力——を下げる物だ。

普通はこんな物は装備しない、というよりネタのコレクションだったのだが、俺の攻撃力だと気障男が一撃、正確には掠めた程度でも死にかねないので仕方なく装備している。STRに補正を掛けておかないと、スプラッタが怖過ぎてまともに攻撃なんかできない。

「ふ、ふん。まあいい。寛大な僕はちよつとした無礼ぐらい許してあげよう。今はこの無礼者をひざまづベッ！？」

「あ、隙だらけだったからつい」

決闘が始まっているにも関わらず、長々と話しているものだから、つい手が出てしまった。しまったな、と呟く俺の前で、顔面に一撃を受けた気障男がゴロゴロと壁まで転がっていく。擬音にしたらそこまでもないが、尋常じゃない速さだ。

（ステータス的に約五千も下の奴と決闘なんてした事ないからな

装備でステータス下げてるって言ってもせいぜい千程度だし、実際の差は四千か。ていうか、吹っ飛び方が軽くギャグだな」

「なんていうか、すごい弱い者いじめだな」

そこまで力も入れてないし、スキルも使っていないただの突きだから大丈夫だと思うが、念のために《パーソナルサーチ 個体識別》を使用して残りHPを確認する。

（ダメージは軽く撫でたくらいか。力を入れなかったとはいえ、やっぱりスキル使わないとダメージ少ないな）

といつても、異常なほどレベル差があるのでそれだけで気障男の最大HPの五分の一程度は削れている。まともにスキルを使用していたのなら、基礎の基礎に当たる攻撃でも一撃死しているだろう。

「あれだな。モンスター以外にスキル使ったりはできないな。悲惨な事になりそうだ」

一人で自分の存在の異常さを確認した所で、ようやく気障男が起き上がってきた。金ぴか《ゴールドウルフ 金狼》装備は土に塗れてその輝きを失って、鼻からはダラダラと鼻血を垂らしている。

（とりあえず、顔に当てるのは止めよう。鼻血で汚れるし）

「君、よくも不意を打ってくれたね、この卑怯者が」

「始まっても呑気に前口上なんて垂れてるからだろ。そもそも、真正面から打ったのに不意打ちも何も無いだろうが。反応できない方が悪い」

というか、アルタベガルの決闘だと開始の合図と同時に攻防が始まるから、前口上を長々と述べる事自体理解できない。戦場で土気

を上げるために行う舌戦はまだ分かるのだが、個人の決闘でうただと喋る必要なんて無いだろう。時間の無駄だ。

という訳で、ひょいと気障男の手から武器を叩き飛ばしてみた。

「あ、ま、待て！ 武器を飛ばすなんて卑怯だぞ！」

「卑怯以前に、ちよっと叩かれた程度で武器が飛んでく事にビツクリだけどな、俺は」

ただ、このまま武器を持たない気障男を叩きのめした所で気分は晴れないので武器を拾って来るまで待つてやる。無駄で無意味なプライドを叩き折るなら、こいつが全力でぶつかったと自分で思わないと無意味だ。だから、弱い奴をいじめて遊んでいるように見えようが、一度徹底的に叩き潰す。

叩き潰したからといって、今後の面倒を見る気はさらさら無いのだけれども。

「くつ。武器さえ持つていれば君なんか簡単に捻れるんだからな（そこまでの実力者なら、そもそも武器を手放すような事態になるなんてありえないんだけどなあ）」

「はいはい、そうですか。なら、さっさと掛かって来たらどうだ？ ほら、あんまりにもつまらないせいで観客も退屈してるし」

どういう文句で集めたのかは知らないが、観客席にいる人達はあくびをしたり隣の人と世間話をしたりしていて、まともにこちらを見ていない。おそらく、そんな状況でも帰っていないのは、ギルドのトップクラスのメンバーがこの後に決闘をするからだだろう。

なんだろう、本気で前座扱いの気障男がかわいそうに思えてきた。そんな事をつらつらと考えていると、気障男が斬りかかってきたので軽くステップで避ける。剣術指南でも受けているのか、剣筋が真っ直ぐな分下手な素人よりも読みやすい。きつと、今まで安全で

確実な狩りしかして来なかったせいで、レベルに対して戦闘経験が圧倒的に少ないのだろう。

速度と威力だけは一人前な攻撃をひよいひよいと避け、時たま寸止めの攻撃を放って煽る。

「クソッ！　ちょこまかと逃げるんじゃない！」

「逃げてるんじゃないくて躲してるんだよ。文句を言う前に当てる努力をして見せろ」

「この！　馬鹿にするな！」

「馬鹿に馬鹿と言って何が悪い。ただ真実を教えてやっているだけだろう。訂正させなければそれだけの物を見せてみる。撤回に値すると思ったなら訂正してやる。あと、剣筋が粗くなってるし、全体的に単調過ぎる。フェイントや変則的なリズムを取り入れる。これだと、人間や高い知能を持つ相手には当たらないぞ」

言って、俺は先程までよりも少し深く下がり、振るわれた剣目掛けて単発格闘スキル《ソルト・ストライク旋蹴撃》を叩き込む。気障男の剣は中級の《アレキダ火鋼蜘蛛》から取れる《火鉄》と呼ばれる素材から作った剣だ。それぐらいなら、スキルに乗せた蹴りで容易に破壊できる。

バガンッ

おおよそ鉄と人体がぶつかった際に鳴るような類ではない音が辺りに響き渡り、剣が砕け散る。そこで俺はさらに一步踏み込み、もう一つスキルを立ち上げた。

防具破壊スキル《破鎧》

相手にダメージを与える事無く防具のみを破壊する上級スキルの一つで、俺はそれを躊躇無く黄金色の胴鎧へと叩き込む。すると、

胴鎧も剣と同じく簡単に砕け散ってしまった。違いといえば、パキーン という比較的綺麗な音と共に砕けた所か。

ずっと回避に専念していた相手がいきなり攻勢へと回り、一瞬で武器と防具の一部を失った気障男は、ただただ呆然として砕け散った剣の柄を見ていた。あれだけこちらを無視していた観衆も、響いた音といつの間にか発生していた理解不能な事態に静まり返っている。

そんな周囲の反応を軽く受け流して、俺は布を腕に巻きつけた。それから、スツと腰の剣を抜いて突きつける。

「まだ、やるか？」

呆然としていた気障男はパチパチとまばたきをして突き付けられた剣の切っ先を見て、俺を見た。それから、すでにそれしかない選択肢を選び口に乘せた。
すなわち、

「……参った。僕の負けだ」

両手を上げて降参を示した気障男に数瞬遅れて審判が俺の勝利を宣言する。

それに一拍遅れて、大歓声が闘技場を大きく揺らした。

第六話『布と決闘 その一』（後書き）

何だか最後まで気障男という名前のせいで締まらなかった気がしますが、気にしたらきつと負けなので気にしません。

主人公が若干悪役みたいな事をしているのは、普段から掛けられていたストレスにプラスして、異世界に来て意味不明な理由で決闘を仕掛けられたからです。ちょっとキレてます。

呪いの装備は文字通りただ集めていただけのコレクションです。機会があれば、今後もネタ装備や用途不明な装備などが出てくるかもです。

次回はギルドの用意したマトモな人材と決闘です。ようやくまともな戦闘シーンになりそうですが、その分決着が早くなるかもしれません。今回以上に短くなるかもしれませんが、あらかじめその事はご了承ください。

ではでは、次の話で再会できる事を祈らせていただき、失礼させていただきます。

第七話『布と決闘 その二』（前書き）

ギルドの用意した冒険者との決闘です。これに合わせて、ギルドマスターと今回登場するキャラのステータスを出しました。詳細は人物設定でご確認ください。

第七話『布と決闘 その二』

「大半がまともに見てなかったっていうのにノリが良いよな」

耳に叩き付けられる音の洪水に顔を顰め、呟く。それから、先程呆然としたまま公爵家の者らしき人達に連れて行かれた気障男と入れ替わりにやって来た男に同意を求める。

「あなたもそう思いませんか？」

「……………勝者には最大の賛辞を。それが決闘の習わしだ」

「なるほど。それもそうですね」

納得して頷きつつ、寡黙で口数の少ない男を見上げて戦車のようにだと心中で思う。身に付けている《岩竜》ロックドラゴンの分厚くゴツイ装備が、元々の俺でも見上げる巨漢の体をさらに大きく見せる。レベルは千百四十二と、人族ではかなりの高レベルだ。

（ギルドマスターもずいぶん頑張ったな）

千前後でトップクラスという事は、目の前の男は超一流という事だろう。どんなに年嵩としかさを増しても三十前後にしか見えず、まだ伸びる余地がある。もし、ゲームで大量の知識を溜め込んでいる俺やミーナが鍛えたなら、すぐに上位種に転生するための最低条件を満たせるはずだ。

「というか、あなたが決闘の相手なんですよね？」

「……………その通りだ」

「俺の名前はリンセイルです。あなたは？」

「……………コールレイ・ドーバメント」

「コールレイさんね。今日はよろしく」

「……………うむ……………」

互いに自己紹介して、握手を交わす。別に敵対している訳でも無ければ、先程のような対応を取るつもりなど無い。むしろ、このやり直しが効かないだろう世界で、このレベルまで修練を重ねたという事に畏敬の念すら感じるほどだ。

ここまで真つ当な人物を前にすると、苦勞していない訳ではないが、“後”のある状態で今のステータスを手に入れた事が少し申し訳なく思ってしまう。

（まあ、気にするだけ無意味か。こういう時、ミーナとかだと気に留めずらしいんだろうな）

思い、ふと観客席を見ると、最前列にいるスイとミーナが目付いた。別にたまたま目に付いた訳ではなく、単純にミーナとスイの横に死屍累々とした男の山が築かれているせいだ。ミーナの横にはまだ健全に気絶しただけの、せいぜい骨折程度の山が、スイの横にはびしょ濡れで気絶or四肢に氷の巨塊を付けた山ができている。主に最後の連中が心配だ。腕を切り落とす事にならなければいいが。

（見なかった事にしよう）

俺は何も見なかった。そういう事にしてコールレイに向き直る。コールレイは一度ミーナ達の方へと視線を向け、視線に同情を混ぜてきた。

「……………大変だな」

「口に出して言わないでください」

俺はこの話題を続けるのを避けるために、審判へと視線を向けた。審判は俺の意図を正確に察したのか、苦笑しながらも意思確認を取ってくる。

「では、そろそろ始めましょう。お二人とも、決闘のルールに關してきちんと同意できていますね？」

「ん、できてるよ」

「……………ああ」

俺とコールレイは頷いて、武器を抜く。俺は血のような深紅の刀まがつき《禍都斬り》を、コールレイは刃の部分が赤く灼熱している《大だい火鬼かき》をそれぞれ解き放った。

二人の様子に二戦目が始まる事を察した会場に、シン、と沈黙が下りる。

今回、俺は遊ぶなんてふざけた真似をする気は無い。真実命懸けで自らを鍛え上げてきた人間に対して、そんな最低の行為に及ぶほど、落ちぶれてはいない。

だが、この世界の人間がどのような戦い方をするか、興味があった。

目の前の、レベルこそ俺とは比べられないが、放つその闘志、殺気はゲームでは滅多にいない、一線を越えた本物だけが持つような鮮烈な物だ。ゆっくりと押し潰して来る岩のような殺気は、並みの者では身動きする事も適わず気を失ってしまうだろう。それほどに重厚な殺気だ。

ここまでの殺気を放つ人物が、果たしてアルタベガルに居たかどうか。いたとしても、ごく一部の超高レベルPKぐらいではないだろうか。俺が経験した中だと、巨大PKギルドのトップが、方向性

は違えども、これぐらいの殺気を持っていたと記憶している。

あの時はあらゆる物を切り刻むような鮮烈で鋭い殺気だった。大半の討伐隊が動けなくなる中、俺や他のトッププレイヤー達も気圧されていた。あの殺気は、一瞬でも気を抜けば吞まれる、そんな思いを抱かせた。

今、足を竦める事も無ければ、気を抜けば吞まれるなんていう状態に陥っていないのはその経験があるからだろう。あの時の戦闘は、レベルと殺気に耐えられるかは無関係だという事を、参加していたあらゆるプレイヤーに思い知らせた事件だった。

思い出し、あれは本当に嫌な事件だったと顔を顰める。

「…………面白い」

「俺は面白くも何ともありませんけどね。あと、殺気をもう少し絞った方がいいですよ。審判が失神寸前ですから」

「…………む、これは失礼した」

俺の注意を受けて、コールレイはようやく審判が自身の殺気に気圧されて動いていない事に気が付いたらしい。フツ、と、場を支配していた殺気が収まる。

やっと殺気から開放された審判は、大きく何度も深呼吸をして心を落ち着けてから、開始を宣言する。

「…………ふう…………では、始めます。両者習い……………始め！」
ゴウツ！

そう宣言がなされた瞬間、コールレイの岩が落ちてきたかと錯覚するような一撃が振るわれた。

俺は視界の端に反応すら出来ていない審判を見ながら、冷静に必要最低限の力で斧の軌道をズラして外す。口で言うのは簡単だが、ほんの少し間違えただけでまともに一撃を受けてしまうような技術

だ。同格の相手には怖くて使えないが、ある程度こちらの速度と技術が上回っていれば使い勝手の良い所もある。

攻撃を逸らした所で、そのまま懐へと踏み入り終わらせる選択肢もあったが、俺はあえて後方へと飛び退いた。向こうからは石畳が砕かれた粉塵でこちらの動きを察する事はできないはずだし、こちらもさすがに粉塵のカーテンを見透かす事はできない。不意を撃たれないためにもう数歩後退して様子を見る。

すると、横一線に赤い線が走り、それに巻き込まれるように粉塵が吹き散らされた。そして、その先からコールレイの巨体が現れる。俺はその眼前へと一足飛びに踏み込み、巨体を押し出すように蹴り飛ばす。

しかしコールレイも一流の冒険者だけあって、即座に自身の状況を理解すると姿勢を制御、地面に斧を突き立てる事で壁に激突するのを回避する。

それを無視して、俺は審判がすでに退避している事を確認して小さく笑う。

「……これなら、もう少し派手にしてもいいな」

呟き、俺はこちらへ向かって巨体に見合わぬ速力で突進してくるコールレイに向き直る。

「【平坦な道を歩む者に相応しき重荷を】インビジブル・ロード【目に見えぬ荷重】」

俺が向けた手から不可視の波動が到達した途端、コールレイの巨体が沈み込む。今、コールレイの体には不可視の力が大地へ押さえつけるかのように掛かっているはずだ。これは相手に掛かる重力を増す魔法なので、装備の分含め、異常な荷重が彼に掛かっている事になる。

（これで倒れないって、十二分に人外認定できるよな）

思いつつも手は休めない。というよりも、多大な荷重を受けても全く歩みを止めないコールレイによって休めさせてもらえない。

「…………ふっ！」

速度を落としながらも、それでも並の冒険者クラスの速度を持って攻撃範囲内に俺を収めたコールレイが斧を振り上げる。それに対し、俺は余裕を持って回避した。振り上げは荷重魔法で最も攻撃力がマイナスされる攻撃だ。速度もそれに比して遅くなるので、これなら他の冒険者も余裕で避けられるだろう。

だがまあ、その後に続けて放たれた振り下ろしはきつと無理だ。こっちは逆に魔法の性質上速度も威力もプラスされてしまうので、普段以上の威力がある。今を見て、真似しようなどと考えていた連中は、その考えを翻さざるを得なかったはずだ。

普通の人間ならこの時点ですでに膝を着き屈している。先程のようない見かけだけの者なら倒れ潰れて、卑怯だズルだと喚くだけだろう。実戦の命を掛けた緊張感の中で精神を鍛え磨いてきたからこそ、こういった不測の事態、突発的な予想外の事象に対しても正面から対処できる。

場数と経験が物を言うのは、ゲームでも現実でも同じという事だ。

（本当に一流も一流、超一流だよなあ）

眼に灼熱するような闘志を宿し、俺が掛けた荷重魔法を気にする素振りも見せずに斬りかかって来る。しかも、先程の僅かな間に魔法の性質を掴んで利用してくるなど、知能面でも相当な物である事が窺える。

横尻に容赦なく振るわれた斧を、体を思い切り後ろに倒す事で回

避け、バック転の要領で顎先を掠めるように蹴り上げる。だが、ギリギリで回避された。斧を振った際の遠心力を利用して体ごと離れていったから、単純に行動を予測したのではなく、攻撃後の隙を見せないための知恵だろう。

「ま、まだまだ甘いんだけど」

そう呟いた次の瞬間には、再びコールレイの巨体が吹き飛んでいた。その顔には何が起こったか理解できない困惑と驚愕が張り付いている。

格闘【蹴脚】スキル《風纏蹴り》かざまくけ

風属性魔法併用の基礎の基礎、単純に周囲の空気も一緒に蹴り上げるといったただそれだけの技とも言えないスキルだ。だが、上級者になればなるほど、この手の小細工に引つかかるので重宝している。

「にしても、本当に良く飛んだな」

最低でも十メートルは浮いて放物線を描くコールレイの姿に感心して呟く。決闘なんて大抵同格の相手としかしないし、浮いてもせいぜい数センチだ。それがここまで見事に飛んでいかれると、飛ばしたこっちがびっくりしてしまう。

まあ、決闘の回数なんてそれこそ数えるほどしかないのだが。心の中でそんな事を思いつつ、終わらせるために地を疾はる。速度はコールレイのレベルでは決して目で追えるような物ではなく、足音をさせるほど無駄な動きは存在しない。

他者から見れば一瞬の内に、俺からすればそれなりの時間を持つ

て落下地点に到達。そして、地響きを立てて落下した直後の体に、容赦なく拳を叩き込んだ。

気絶するだろう最低限の力を込めた一撃を受けて、コールレイの体が大きく跳ねる。

「審判！」

俺は即座に《バーソナルサーチ個体識別》で状態が気絶になっている事を確認し、審判を呼ぶ。それを受けて駆け寄ってきた審判はコールレイの状態を確認して立ち上がった。

「勝者、リンセイル！」

審判の裁定に対して、二度目の、ただし一度目とは比べ物にならないほど大きな歓声が爆発して大地を揺らす。街全体、下手すれば街の外まで響き渡りそうな音をやり過ぎしながら、俺はコールレイに賛辞を送った。

「ここにいる全員が否定しようが俺が全てを懸けてでも肯定してやる。コールレイ、あんたは強者だ。コールレイみたいな強者に出会えたから、俺はまた一つ前へ進めた。その強き刃に最大の賛辞を持って名を心に刻み込もう。また再び刃を交える日を待っている」

言ってから、俺は歓声を上げる観客達へと視線を向けた。その中で静かにこちらを見つめる二人に向かって、勝利を報告するために刀を振り上げる。

それに一瞬だけ会場が静まり返り、しかし、すぐに倍する歓声が龍の咆哮のように轟く。

興奮が最高潮に達した観客に背を向けながらも、俺はその声に一連の騒動が収束していく感覚を覚えていた。

第七話『布と決闘 その二』（後書き）

まず、想定していたよりも薄っぺらい内容になってしまった事をお詫びします。もっと重量感のある戦闘は大分先になりそうです。

今回の決闘では、貴族の温い冒険者と本物の冒険者ではここまで違うという事を表現したかったのですが、伝わったでしょうか。そうであると幸いです。

次は、トレイン少女やギルドマスター等から見た決闘とその前後の心情を書きたいと思います。ここでトレイン少女の名前も出しますので、忘れていた方は存在を思い出してあげてください。一応ヒロイン候補その二ですから。

低レベルの彼女をどうやって旅に連れて行くか悩む神様 紡でした。

幕間その一『とある少女の昨日と今日と』（前書き）

遅れてすみませんでした。言い訳ですが、初めての試みに手を出したせいか大苦戦し、ようやく何とか仕上げられた感じです。少々ぐだぐだ感が否めませんが、どうぞ。

幕間その一『とある少女の昨日と今日と』

??? side

舞い上がっていた。

あの時の心境を表現するなら、きっとこの一言に集約されると思う。

ようやく父様からモンスターと戦う許可を貰い、父様が用意してくれた分不相応な防御力を誇る羽竜の鎧を着て、自分が強くなったような気がしていたのだ。

今振り返れば、どうしてそれだけの事で《鬼の森》に入ろうなどと考えたのかが分らない。

少し考えれば、たった一五レベルの私が、百レベルのモンスターも出てくる森に一人で入るなんて、自殺行為以外の何物でもない事くらい分かったはずだった。今こうしてここにいる事自体、本当に幸運だったとしか言い様が無い。

ただ、あの時私を助けてくれた二人組はどこに行ってしまったのだろう。

昨日は初めて森の中に入ったものの、モンスターに出会えず、私は森の深奥まで入り込んでしまった。そのせいでいきなり一〇〇レベルのモンスターであるレッドキャップに遭遇した。そこから逃げる間に何故かモンスターは増え続けて、気が付けば森中のモンスターが集まったのではないかというほどの数になっていた。

そんな状況から私が逃げ切れたのは、ひとえにあの冒険者の男女が助けてくれたからに他ならない。たった二人で、上位の冒険者でも体力が続かないような数を足止めしてくれたのだ。私はそんな二人に心の中で謝り、全力で街まで逃げ帰って門番に事の次第を伝えた。

その時の私が身分を隠して冒険者に身をやつしていたせいか、話を通るのに時間が掛かり、騎士団が出るのに一時間も経っていた。

私はこの時、もはや生存が絶望的だと悲観と自己嫌悪でベッドに倒れこんで、メイド達の視線すら気にせず泣いた。

私のせいで二人の人間が死んだ。あの状況で一時間も放置されてしまつては、それこそこの街では《灼斧^{しゃくふ}》のコールレイぐらいしか生き残る事すら困難だ。

そうして悲嘆に暮れる私の元へと父様から呼び出しが掛かったのがさらに一時間後の事。

涙で目を赤くした私に父様がやや言いにくそうに告げたのは、広範囲に及ぶ破壊の跡があっただけで、モンスターの群れはおるか、二人の冒険者もそれらの死体も残っていなかったという報告内容だった。

その報告に、私は心の底から愕然とした。

そんなはずはない。あれだけの数のモンスターと戦つて、死体の一つも存在しないなんてありえない。

驚き、詰め寄つた私に、父様は護衛を付けるから現場を確認するようにと言つて来た。何度も報告を聞くより、自分で見てきた方が速いだろう、と。

結果は、まさしく報告通り。木々が広範囲に渡つて碎かれていて、何故かぬかるんでいる地面にも、焦げた跡や何かで大きく抉られた跡はあるが、何か生き物がここで死んだという痕跡は一つとして見付けられなかった。それこそ、血の一滴すらもその場には存在していなかったのだ。

不可解なのはそれだけではなかった。昨日は森の深奥に向かうまで出会う事の無かつたモンスター達が、森の比較的浅い場所から数多く現れたのだ。

聞くと、普段はそれが普通だと言う。なら、私が入った時のあの異常な状況は何だったのか。

結局、そればかりが頭の中にあり、父様や母様との会話も上の空で、寝入る事ができたのも日が沈んでからずいぶんと経つてようやく、という失態を演じてしまった。反省反省。

そして翌日の今日。寝不足の私に、父様は決闘を見に行くと仰られて母様共々闘技場へ強制連行された。

聞けば、今日戦うのはダンフォール公爵家の次男だという。ダンフォール公爵家は、記憶が確かなら、貴族の義務を忘れ、私欲を肥やすのに全力を尽くす腐った貴族達の頭だ。その次男も、親によく似てプライドだけは高い駄目人間らしい。

ただ、父様の代辺りから流行り始めた《高貴な遊び》とやらでレベルだけは高いので、一人では会うなと強く言われた。街を出て戦う度胸は無いが、そのレベルに物を言わせた強引な恫喝とも言える迫り方で何人もの女性を泣かしているらしい。

今はどうしようもないが、いつか、被害にあった人達の方も制裁を加えてやると私は神に誓っている。

おそらくだが、今回の決闘はその次男が気に食わない平民を合法に痛めつけるという展開なのだろう。そんな物を何故わざわざ私と母様まで連れ出して身に來たのかと問うと、相手が問題なのだという返答が帰って來た。

どうも、今回の相手はギルド側で今後かなり重要な人物となり得る、と判断されるほどの人間らしい。ギルドマスターから父様へと報告が来て、一度直接その目で見るべきという話になったのだとか。詳しい話は忘れてしまったが、ギルドマスター曰く「一四〇〇レベルの魔人でもレベルが見れない人外」らしい。

《上性種》じょうせいしゅ魔人まじんが見る事が出来ないというのは異常な事態だ。人種のような《平性種》へいせいしゅと呼ばれる、数が多いが平均的な能力の低い種に限り、低レベルでも上位の者のレベルを見る事ができる。それが出来ないのは、同じ上性種の自身以上の高レベル者のみ。

つまり、今回の目的はその人物を見極める事、という事よね。

「ふわ……………眠いなあ」

回想を終え、あくびと共に呟くが、周囲にいるのは父様と母様、

それに幼い頃から共に居る信頼できる従者達だけなので、怒られる事も驚かれる事もない。寝ぼけていながらもその程度の事を考えるくらいはできる。というより、私の地位を考えればできないって選択肢がないのよね。

「父様、その相手の方はどういう人なの？」

「ああ。名はリンセイルと言うらしい。同じくレベルの見えない少女を二人連れた剣士の青年で、ギルドマスターも見た事の無い黒い防具を身に纏っていたそうだ。特徴としては、右腕に赤い布を巻きつけていると聞いたが、そういう者達はそれなりにいるからな。あてにはならないだろう」

父様の何気ない言葉を聞いて、眠気が一気に吹っ飛んでしまった。記憶が確かなら、私を助けてくれた二人組の男の方が、まさに今父様が言ったような特徴だ。

私のせいで死んだと思っていた彼らが、ちゃんと生きていた。

何の根拠も無くその青年こそが“そうだ”と確信し、安堵に体を深く預ける。その様子を見て、母様が何かを察したように声を掛けてきた。

「アルちゃん、もしかして、昨日言ってた人なの？」

「何？ それは本当か！？」

「直接見ないと断言はできないけど、そうだと思う。一人増えるけど、男の人の方は全身真っ黒で、右腕に真っ赤な布を巻きつけていたように見えたから、間違いないと思うんだけど」

あの時は必至に逃げていたためうる覚えだったけれど、助けにくれた二人は男が黒、女が蒼の衣装に身を包んでいたはずだ。右腕に赤い布を巻きつけていたのも、薄っすらとだが覚えている。

そんな風に過去を回想する私と父様を驚愕させる提案を、母様は

悪戯いたずらっぽい笑みを浮かべて言う。

「じゃあ、決闘が終わったなら、リンセイルさんを王宮まで呼んじやいましょう」

「え？」

「は？」

予想だにしない提案を受けて、私も父様も一瞬硬直する。だが、さすがは父様と言うべきか、すぐに復活して反論を呈してみせた。

「待て、イリル。素性も知れぬ輩をそう易々と城に上げる訳にはいかんぞ」

「あら、でもアルちゃんの命の恩人よ？ 褒美の一つや二つ上げないと、私達の品位が疑われるわ」

「ぐつ。ぬう」

「上手くすれば、一騎当千かそれ以上の強者を身内に引き込めるわけだし、躊躇する理由はないわよね。それに、娘を助けてくれた相手にお礼も言わないなんて、親として失格だと思わない？」

母様が正論を言って父様をどんどん追い詰めていく。うん。母様は強し。

ここで私がもう一押しでもすれば、落ちるかな。

「父様、私も助けていただいたお礼をきちんと申し上げたいです。だめ、ですか？」

目を潤ませて上目遣い。下からじつと見つめるのが母様から教わった最大のコツだ。目論見通り、父様は家臣に目撃されればこれまでの威厳が全て消し飛びそうなほどにうろたえる。

「ま、待て、駄目とは言っておらん。そ、そうだな。ギルドマスターはあの青年に灼斧を当てると言っていた。なら、彼に勝った時に呼ぶ、という事でどうだ？ アルシャの命の恩人とやらならば、数え切れぬほどのモンスターから生還したのだろう。それぐらいの強さがなければ本物とは言えぬ」

「確かにそうね。じゃあ、お手並み拝見と行きましょう。ほら、出てきたみたいよ？」

母様に促されて視線を眼下の空間に投じると、二人の男が姿を現した所だった。一人はいつも通り金色の目が痛い、頭の中身を疑いたくなるような装備に身を包んだダンフォール家の次男だ。まともな戦闘経験も無い素人だが、レベルだけは高い。並みの者では傷つける事など不可能だろう。

それからもう一人、本命の方へと視線を移し、愕然とした。

（何、あの禍々しい装備は！？）

なるほど確かに、漆黒の防具と右腕に布を巻いていたが、布は黒いし、どちらも見る者の怖気を誘うような存在感がある。腰に差した剣からも似たような空気を感じる。市民や貴族のほとんどは気付いていないようだが、八歳の頃、宝物庫で見た呪いの装備と同じ物だ。

そんな物を全身に装備しているなど、正気の沙汰ではない。

「ね、ねえ、アルちゃんと言った人って、あの人なの？」

さすがの母様も、冷や汗をかいて顔を引き攣らせている。その問いに、私は首を横に振った。私が見たのはあんな姿じゃないし、あの時の人と同一人物だなんて信じたくない。

「絶対違うよ。あんなに禍々しさ全開の人とモンスターの群れを比べるなら、絶対モンスターの群れを選ぶから。間違ってもあつちは選ばないって。うん、ありえない」

「…………アルちゃんなら、好奇心から突進しそうだと思ったんだけどねえ。あ、別にして欲しい訳じゃないわよ？　ただ、アルシヤちゃんも成長してるんだな、って思ったただけだから」

「…………母様、後でゆっくり二人で話しましょう」

この人は、一体私をどういう風に考えているのだろう。さすがの私でも、あんな見るからに危険人物ですとアピールしている人間に近付いたりはしない。というか、あれは近付いただけで呪われそうで怖過ぎる。

そんな風に話している内に、いつの間にか決闘が始まっていた。というか、何か重い物が激突したような音が聞こえて下を見たら、闘技場の壁に激突したらしいダンフォー、面倒だから次男でいいかとにかく、次男が立ち上がった所だった。

「母様、父様、何が起きたの？」

「私はアルちゃんと話してたから分からないわ。あなた、見てた？」

「…………あやつが手に持った布で軽く叩かれたただけ。それだけで紙のように壁まで吹き飛ばされていた。鎧を着込んだ人間をああも軽々と吹き飛ばすなど、とてもじゃないが人間技とは思えん」

父様が苦々しい顔で言うのを聞き、私と母様がお互いに顔を見合わせる。戦闘の心得が無いとしても、次男は一〇〇〇レベルのステータスを持っている。そこに鎧の重量を加えれば、竜種でもない限り宙を飛ばすなどという暴拳は不可能なはずだ。

「父様、それはさすがに何かの見間違いじゃないですか？」

「正確に言えば、宙には浮かず転がっていたが、あれは、もはや吹き飛ぶと表現して問題はないだろう。軽く当てただけであれだ。本気でやれば、こんな闘技場はすぐに崩壊するだろうな」

「あなたの言う事が本当なら、彼はまるで神話の登場人物ね。手加減しているって事は、呪いを完璧に制御しているって事になるし。聞いた限りはまだ若いんでしょう？　ここまで強いと将来が不安ね。自ら進んで呪われた装備を身に付けるほどなんだもの。欲に負けなにか怖いわ」

「うむ。一度、人となりを見極める必要があるだろうな。………決着がついたか」

父様と母様が深刻な表情で話し合っている間に、件の彼は頑強な剣と鎧をあるう事か素手で破壊して勝利した。その圧倒的な勝利を受けて観客が沸くが、一定以上の知識を持つ者は、彼の危険性に気付いてしまっただろう。敵対か友好かは別として。

「父様、次は灼斧が出てくるのよね？」

「ああ、確かにコールレイ——灼斧を出すと言っていた。ちょうど、この王都に戻ってきていたらしいからな。今王都にいる中で最強だろうな」

「灼斧には悪いけど、それじゃあちょっと不安ね。人としては最上位級だけど、他の国、特にメソポタミアだとB・ランクといった所かだし。この国のレベルが低いのは、いつかどうにかしないといけないわよね」

あまり深刻そうじゃない顔で嘆く母様に言われて見ると、深紅の斧を背負った巨漢が青年の隣に立っていた。ああして並ぶと、背の高いはずの青年が小さく見えるのだから不思議だ。

私にも少しでいいからあの背の高さを分けて欲しい。

「父様、母様、どうなると思いますか？」

問いかけると、二人は少し考え、先に父様が答えてくれた。

「灼斧には悪いが、終始圧倒されて終わるだろうな。さすがにダンフォール公爵家の次男坊よりは実力を引き出せるだろうが、一割でも出させれば奇跡だろう。少なくとも、それぐらいの差はあるはずだ」

「……………そうねえ。やっぱり彼が勝つのは確定として、灼斧がどれだけ持つかよねえ。それこそ、彼の気分次第、という感じじゃないかしら」

「母様、彼もそこまで鬼畜じゃないと思いたいのですが」

「でも、ダンフォール公爵家の次男との決闘じゃ、散々遊んでたし、否定できないんじゃない？」

母様はそんな事を言うが、あれだけの強さで性格が享楽主義者とか嫌過ぎる。ああでも、自身より歳若い少女を二人も侍らせている時点で否定材料が無い。

（お城に呼んだりして、迫られたらどうしよう？）

もし、権力の通じない好色家だったら困るし、面会の場合は辞退させてもらおう。

そう決めて、眼下の決闘を見やる。灼斧が奮戦しているが、私から見ても分かる程に優劣は明らかだ。全力で斧を振るい、襲い掛かる灼斧に対して、彼は余裕を持って対処している。その動き一つ取っても無駄な所が無く、純粹に強いという事がよく分かる。

「母様」

「何、アルちゃん？」

「灼斧さん、いつもより動きにキレが無いような気がするんだけど、見間違いかな？」

なんだか、攻撃も振り下ろしが中心で単調な気がするし、振り下ろし以外の攻撃がとても鈍く見える。その事を伝えたと、母様は何故かニツコリ笑って頭を撫でて来た。

「よく気付いたわね。開始直後に一度躓いたように動きを止めたでしょ？ 見た限り、その時に何か魔法を使われたみたいなのよね」

「は、反則じゃない！」

「反則じゃないわよ。反則なのは相手を殺す事だけ。それ以外なら、たとえ戦略級大規模魔法を使おうと当人の自由。っと、決着が着くわよ」

私が立ち上がった所で母様が止める。それから促されて見れば、灼斧の巨躯が空高く吹き飛ばされた所だった。ありえない光景に硬直している間に、落下地点へと先回りした彼が追撃、そのまま審判を呼んで勝利を確定させた。

「ふむ。とにかく、あの青年とは一度話さねばな。あれは危険過ぎる力だ」

父様の声が聞こえたが、あまりに非常識な光景を見せられた私は、硬直してただただ立ち尽くしていた。

幕間その一『とある少女の昨日と今日と』（後書き）

異性の思考というのが恐ろしく難しいです。女心など自分には分かりようもありませんし、誰かにご教授願いたい感じです。

今回の目的はトレイン少女アルシャの立場と王宮側の主人公に対する認識をはっきりさせる事です。個人なら、強いや格好いいなどで済む力も、国を預かる身からはその危険性や利害などを考える必要があります。主人公は見事『危険物』として認められた訳です。

なんだか、だんだんとアルシャの参入フラグにヒビが入っていつている気がします。ご都合主義でもなんでも必ず参入させます。やっと二人目のヒロイン候補を出せそうでホッとしている神様 紡でした。

第八話『布と雑談』（前書き）

すみません。非常に遅れた上に今までで一番の駄文です。筆がのらないので、しばらくこんな感じで進みそうなのでご了承ください。

第八話『布と雑談』

「……ふう」

鎧を全てアイテムボックスに入れ、簡素な服に着替えてようやく一息入れる。今居る控え室は本当に質素な物で、そこそこ広い室内の壁際にベンチが置かれているだけだ。この辺は、武闘大会のために合わせた内装だろう。おそらく、ギルドトップクラスの連中には別の部屋があてがわれているはずだ。

不公平とは言わない。ランクはざりどれだけギルドに貢献したかであり、俺は未だ何も貢献していないのだ。せいぜい、これから譲渡する遺物程度だろう。その遺物だって、大した物は渡さない。交換として求めている物がそれほどの物じゃない以上、過剰な物は逆に関係を悪化させかねないからだ。

（そういえば、何を渡すのかまだ決めてなかったな）

神代の遺物は、ゲームでは主に塔内部から発見できる。プレイヤーに取っては何の価値も無かったが、高値で売れる事や時折クエストのキーアイテムになる事もあって、それなりの需要が存在していた。俺みたいな収集癖のあるプレイヤーは、全種類コンプなどを目指した事もある。その種類の多さに途中で断念したが。

アイテム欄を出し、上からスライドさせて神代の遺物に分類されるアイテムを物色していく。外の遺跡でも転がっている機械の部品やロボットらしき物の残骸から、塔内部最上階付近でなければ手に入らないオリハルコン製の精密機械まで、本当に多種に渡っている。さすがに部品や残骸は無いとして、要求するものに対してどの程度の対価が妥当なのか、というのが意外と難しい。さすがに、ゲームでそこまでの機転を求められた事がないため、想像以上の難易度

だ。

「……………まあ、こんな事でいちいち悩むのも馬鹿らしいか。渡す時になつたら適当に選ぼう」

しばらく悩んだが、すぐに面倒になって止めた。外交官でも商社に勤める外回りのサラリーマンでも無いのだから、出来なくて当然だと割り切る事にする。

（さて、そろそろかな）

思うと同時に、扉をノックする音が響いた。誰が来たのか見当の付いていた俺が入室を促し、予定していた通りの客人を迎え入れる入ってきたのは男二人に女一人。その内二人の男女は護衛なのだろう。さきほどのコールレイに近いレベルを持っている。二人とも柔和そのものといった顔で立っているが、身のこなしからして技量だけなら達人レベル。そこだけ比べるならコールレイより上かもしれない。

後ろの二人を観察していると、前にたった男——ギルドマスターが賞賛の言葉を送ってきた。

「とりあえず、決闘勝利おめでとう、と言っておこうか」

「おめでとうと言われる程の事じゃあないですよ。当然の事を褒められても、何も嬉しくありません」

「……………あれでも、彼はこの周辺で活動している冒険者の頂点なのだがね。君に掛ければ、彼ほどの者でも大人と子供のケンカと一緒か」

俺の言葉にギルドマスターが苦笑する。これで龍クラスじゃないと苦戦しないと言ったらどうなるか気になったが、わざわざバラす

気もないのでそこは口を噤んでおく。

「それで、約束の物は？」

「きちんと持って来ている。ほら、受け取れ」

ギルドマスターは懷から出した俺のギルドカードをピツと投げ渡してきた。それを危なげ無く受け取り、皮肉を返すのも忘れない。面倒な事をさせたのだから、それぐらいやっても良いと思う。

「個人的にはもっと柔軟に対応して欲しかったですけどね。一度受け付けにでも立って接客を学んでみたらいかがですか？ 主にあの貴族相手にでも」

「手厳しいな。生憎だが、それはできない相談だ。私がそんな事をしていては、ギルドの業務が滞ってしまう。もっとも、君がその損失分を補填してくれるなら構わないがね」

「義務も必要性も理由も無くそのような愚行には走りませんよ。確かに俺のカードですね。では、約束通り、こちらからは遺物を供出しましょう。………そうですね、これで構いませんか？」

そう言っ出て出した小型の携帯ラジオらしき機械を投げ渡す。それを受け取って検分したギルドマスターは、ひよいとこちらに投げ返してくる。まあ、これで満足されてはこちらが困惑するので驚く事はない。

「それはギルドにある。他の物は無いのか？」

「他、というとこれなんかはどうですか？」

ラジオモドキをしまつて新たに某狩りゲームのハードを出している会社の物によく似たゲーム筐体を放った。俺は軽く投げたが、パソコンのハードぐらいはあるそれに、さすがに慌てた様子でギルド

マスターが手を伸ばすも、その手前であっけなく重力に負けた。

ガシャン

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

石造りの床に落ちて嫌な音を立てた筐体を見つめながら、何とも言えない沈黙が部屋に下りる。

「……………いや、まあ、あれです。まだあるからそれについては気にしない方向で行きましょう」

「……………そうだな。今のは無かった。それでいいだろう」

ちょっと気まづくなりながらも、今度はきちんと手渡しで新しい筐体を渡した。

まあ、人生こんな事もある。

終始微妙に気まずい空気が付きまとった交渉は、俺が塔中階層のそれなりにレアなアイテムを出す事で終わった。こちらからの要求もその際に伝えたので、それで一先ず終わり、だと俺は思ったのだが。

何故か、俺は闘技場傍のカフェで護衛(?)二人とお茶をしている。

「あなたが決闘で使用していた装備。あれは呪われた物ですよ。それも、そこらに転がっているような物ではなく、人には解呪が不

可能な程に強力な物だと思いますが、違いますか？」

「それがどうかしたんですか？ 別に命を奪うような代物でもないのですし、そう目くじらを立てるような問題でもないでしょう。まあ、大した実力も無い者が身に付けたらどうなるかは知りませんが」

一息ついて切り出してきた、柔和な笑みを湛える男に平然と答えを返す。その後、交渉が終わって場を自走とした俺を、この男が引き止めてここへ引っ張ってきたのだ。多少冷たい返答なのは仕方が無いだろう。

ただ、実際の所、あの装備を付けるなら最低でも初期種族でカンストまで行っただぐらいのステータスが必要になる。もしそのステータスを満たさずに装備した場合にどうなるかなど、ゲームではそもそも装備自体出来なかったために知らない。そもそも、-補正の掛かる装備など、誰も好んで使わなかったし。

そんな俺の疑問を読み取った訳でもないだろうが、女性の方が答えを教えてくれた。

「普通、呪われた装備を一つでも身に付ければ、理性を失って死ぬまで殺戮を続ける人形になるんですけどね。それを平然と無害だと言っあなたは本当に規格外です。もはや、人かどうかという事も疑いたくなりますね」

「悪いですが、これでも一応人間ですよ」

さすがに始祖だと言う気にはなれず、そう囁く。

「用件はそれで終わりですか？ それなら、もう行かせてもらいます」

「いえ、まだですよ」

俺が席を立とうとすると、男の方に引きとめられた。正直に言う
と、待たせているミーナとスイが怖いのだが、ここで無理に席を辞
して重要な情報を聞き損ねた、などという事になったら面倒だ。ゲ
ームでも、中堅クラスのプレーヤーがよくやる失敗として、NPC
無視によるフラグスルーがあるが、今の俺の立場でそういったミス
は本気でまずい。

はあ、とため息をついて座り直すと、向こうも姿勢を正してから
問いを投げかけてきた。

「単刀直入に聞きますが、あなたのレベルをお聞きしたいのです。
あの灼斧を軽々とあしらう力と技量をその若さで身に付けるとい
うのは、並大抵の事ではありません。エルフ達のような長命種族なら
ば、私達人間には到達できない高みにいる事も多々ありますが、同
じ種族で抜きん出た強さを持つ事はないと聞きます。それだけに、
若くして他と一線を画する力を持つあなたにとても興味があります」
「…………俺が強いのは単純に偶然の産物ですよ。別に興味を持た
れるような事はありません」

「偶然だったとしても、その偶然に恵まれ、なおかつ物にするだ
けの能力を有してただけで十二分に興味深いですよ。少なくとも、
私達はそう思います。もしよろしければ、どのような経緯でそのよ
うな力をする事になったのか、お教えいただきたい所です」

よろしければなどと言いつつ、二人とも話してくれるまで食い下
がると目で語っている。まあ、最悪逃げればそれでいい。明日か明
後日にはここを立つのだから、気を揉むのはその間だけだ。

「どういう経緯と言われても、普通の基準が分からないので、何
を話せばいいのかという点からして分かりませんよ。こうして大き
な街に来て自分の特殊性には気付きましたが、何が違うのかがまだ
理解できていませんから」

「それなら、私達に話してもらえれば分かるかもしれないよ？
時間の許す限り話しませんか？」

「連れを待たせてるんでお断りします」

何となく即答で拒否してみたが、実際そろそろ危険な頃かもしれない。スイは何とかなりそうだが、ミーナがまた怒っていそうだ。もし怒っていたらギルドマスターに全部押し付けようと思う。そもその発端はギルドマスターが不用意にこの二人を連れてきたせいなのだから、罰が当たる事はない、はずだ。

とりあえず、目の前の二人を撒いてからスイ達の所へ戻るか。

第八話『布と雑談』（後書き）

なんだか、あっても無くてもいい話でした。次は気分転換に短編物を書いてみようかと思っています。ホラーフィクションでちょっと遅いですが桜の話です。

何か他にリクエストがあれば感想、活動報告どちらでも書き込みください。余裕があったり気分転換したかったりしたらきつと書きます。

下手過ぎる会話、対話を何とかしたい神様 紡でした。

第九話『布と召喚状』（前書き）

遅れに遅れてしまいすみません。

本当は先週にホラー短編を出す予定だったのですが、難航したためにこちらを先に出す事になりました。楽しみにしてください方がいらつしゃたらごめんなさい。

今回もつまらない半分幕間のお話です。どうぞ。

第九話『布と召喚状』

「へえ、そんな事があつたんだ」

場所は王宮に程近い場所にある高級カフェテリア。そのオープンテラスで俺から先程までの出来事を聞いたミーナは、一つ金貨一枚もする超高級パフェを悠然と口に運ぶ。すでに他にも馬鹿みたいな値段のデザートがミーナの腹に収まっており、今日だけで俺の所持金が底を突くんじやないかという勢いだ。

それもこれも、馬鹿みたいに高くせに申し訳程度の量しかないこのカフェのメニューが悪い。少ない量で多くの種類をなんて、一体どこの高級フレンチのフルコースだ。

正直、勘弁して欲しい。

「……………そうなんだよ。いつまでも返してもらえないorどこまでも付きまとって離れない雰囲気があったから、強引に席を立つて高速移動で撒いてきたけど、可能なら明日の昼にはここを出たい。なんていうか、一歩間違えたら延々と付いて来そうな気がするんだよな」

「で、気が付いたら旅の仲間について感じ？ まあ、話を聞く限り、うちの連中と負けず劣らずなイロモノみたいだし、可能性としては十分ありえそうよね」

「話を聞く限り、可能性は高そうですね。一応、周辺の警戒は怠らないようにしておきます」

ミーナの言葉に同意して、スイがスプーンを持った手を軽く振った。すると、小さな球形をした下級の《水の精^{ウル}》が数十体顕現し、すぐに空気中へと溶け込んでいった。それと同時に、周囲一体に“何か”が広がっていく様が知覚を掠め、数瞬後には欠片の違和感す

に残さず消えた。

「《精霊術》か。便利だよな、それ。精霊かエルフしか使えないのが玉に瑕^{きず}だけど」

中級以上ならともかく、下級精霊の姿は同類もしくはエルフにしか見えない。それが原因で《主従契約^{コントラクト}》による使役が出来ないため、下級精霊を使役して成す精霊術はエルフと中級以上の精霊だけが使える固有技能となっている。

実際、今の顕現も始祖のでたらめステータス＋最上級の精霊であるスイとの《対等契約^{エンゲージ}》があるために見えただけで、どちらか一方でも欠けると見えないらしい。スイ曰く「精霊王様との契約ならはつきり視認できるかもしれない」との事。試す気にはとてもじゃないがなれない話だ。

「もう一つ、新しく実装予定だった種族も使えるという話でしたよ。まだ具体的な話もできていませんでしたが、始祖よりも廃スベツクにする予定だったようです。それに合わせて、アースガルズより高難易度のフィールドが追加されるらしいです。一体どれだけ手を広げれば気が済むんでしょうか。すでに広さだけなら地球とほとんど変わりませんし、開発には馬鹿しかいないんでしょうか」

「あー、まあ、始祖を実装した時も色々と叩かれたんだから、学習するべきだとは思うな。新しい種族とか、今でさえ全種族を把握しきれないぐらいにいるのに、これ以上増やすとかやり過ぎだろ」

「今更私達には関係ないけどね」

「まあ、別にその設定がそのままこっちに反映される訳でもないしな。ていうか、されたら困る。んで、話を戻すが移動するに当たって何か希望とかあるか？ どこそこが見てみたい、みたいな。俺個人としては《精霊王の楽園^{テイル・ナ・ノーグ}》を見ておきたいな。少し遠回りになるだけだし」

この世界がアルタベガルと同じ姿形を持っているのならば、精霊王は神に最も近い立場の存在だ。先にそちらへ寄って話を聞くのも検討する価値のある事だと思う。幻想的な楽園を実際に見ておきたいと思ったというのも確かだが、そちらの方が切実だ。

俺のそんな打算を含んだ提案を受けて、すぐに賛成したのはスイだ。

「私もテイル・ナ・ノーグには寄っておきたいです。リンと共にあるのは絶対としても、最低限の礼儀として精霊王様に挨拶しておく必要がありますから」

「ああ、そうか。公式設定だと精霊は全て精霊王の配下で、中でも下級精霊は“支配下”なんだよな。話を通しておかないと、今後精霊術が使えなくなる可能性がある訳か」

「はい。私達はこの世界の異分子ですからね。顔を見せて無害をアピールしておかないと、精霊王が精霊に私達に協力する事を禁じる可能性もありますから。自我を持つ中級以上はともかく、下級精霊は私の言う事を聞いてくれなくなるでしょう」

確か、スイは精霊の中でも《大精霊》と呼ばれる上級の一つ上、特別な階級の精霊だったはずだ。それでもその懸念が出てくる以上、精霊王の支配というのは本当に強力なのだろう。

（まあ、向こうが渋るなら実力行使でもいいか）

カンストレベルの始祖が二人に一五〇〇レベルの大精霊が一人。装備敵に考えて、龍相手だったとしてもオーバーキルになりそうな気がするが、相手は精霊王だ。三人揃ってようやく互角かもしれない。向こうが上といった感じだろう。しかし、決して勝てない訳ではない。やろうと思えばやれるのだ。

結果、戦った土地が人外大決戦的な事にはなるだろうが。

そんな不穏な思考を感じ取ったのか、珍しくスイが「ケンカを売ったら駄目ですからね」と釘を刺してきたので素直に頷く。実際、俺としてもケンカ“を”売る気は無い。

「じゃ、そのていなんとか言う場所に行くのは決定ね。どうあっても行く必要があるみたいだし」

「だな。それで、ミーナは無いのか？ どこか見てみたい場所とか物とか」

「んー。今の所はないわね。私としては、現実的リアルが売りのVRM MOから来たんだから、今更何を見るのかって感じだし。ただ、本については買い漁るかもしれないから、あらかじめ言っておくわね」
(あー、そういえば、ミーナって重度の活字中毒だったっけ)

広大な屋敷に関わらず、本で壁が見えない彼女の住居ホームを思い起こして納得する。四階建て地下三階という大きさにも関わらず、部屋の九割が本で埋まっていたのだ。それだけで十二分に中毒の度合いが伝わってくる。

「とりあえず、拠点でも作るまではアイテム欄に入れとけよ」

「当然でしょ。出しっぱなしにしてたら雨とかで駄目になっちゃうじゃない」

「ならよし」

以前に一度、移動のための馬車を本で埋め尽くしてくれた事があったため注意すると、即答で頷いてくれた。ただ、その理由が理由のため、当時した説教がきちんと効果を発揮していたのかどうかは不明。まあ、反省していなかったら、また二十四時間耐久説教コースをすればいいだけだ。

俺の思考に反応してか、ミーナの顔が若干青くなっただけがしない

でもないが、とりあえず今は無視。

「とりあえず、あれをどうするか、という話だよな」

まだ遠いが、冒険者らしき男に案内されて歩いて来る二人の騎士を見て呟く。それを受けて、ミーナも騎士のいる方向へ振り返った。スイは何も反応を示していないが、先程の精霊術で気付いていたのだろう。

（やっぱり、公爵家の人間に怪我をさせるとは何事かゝって感じかな）

こちらへ向かって来る騎士を見て、面倒だから蹴散らして逃げるか、などと思い、否定する。そんな事をすれば問答無用で指名手配だ。どうせ差は圧倒的なだし、話を聞いてから行動してもなんら問題はない。

「とりあえず俺が話すから、二人は黙っていてくれ」

二人にそう言って、俺は武器をアイテムボックスにしまって三人を迎えた。レベル差があり過ぎて、もし攻撃を受けたとしてもダメージは無いし、向こうに争う意思が無い事を示すにはこれが一番だ。こちらの姿をはつきりと視認した騎士二人は、一度足を止めてこちらを窺うようにしたが、相手が丸腰だと知って自身が優位と思ったのだろう。実に堂々とした様子でこちらへと歩み寄ってきた。

「貴殿がリンセイルだな」

「確かにそうだが、騎士が一体何の用だ？ ああ、公爵の息子に手を上げたとかふざけた理由だったら叩き潰すから、それだったら今すぐ回れ右した方が賢明だぞ」

「……………そのような用件ではない。我々がここに来たのはガルゼンテス王の勅命だ」

予想される用件に対して先回りするように言うと、騎士は一拍の沈黙の後にそう言ってきた。権力に頼つたくだらない用で無かったのは良かったが、国王に呼び出されるような覚えは無いため眉を顰める。

「一国の王が一介の冒険者に対して騎士を動かす、ね。先の事を考えるとあまりいい気はしないな。それで、一体何の用なんだ？」

「ガルゼンテス王より召喚状が出ている。明日四刻に王城へと出頭せよ。これが召喚状だ」

「言い方があまりにも横暴過ぎて行く気が起きないんだが？ それに、出頭しろってのは用件じゃないだろう。顔を出して一体何をするつもりなのか分からないのに行く気は無いぞ。のこのこ出て行って仕官か処刑かなんて言われても困るからな」

胸を張って言って来たもう一人の騎士があまりにも横柄な態度だったので、少し挑発的な言葉で拒否してみると、面白いぐらいに顔が真っ赤になってプルプルと震えだす。視線に若干の殺気が混ざった事でスイが背後で構えるのが分かる。

そんな中、今まで隣でずっと黙っていた男が口を開いた。

「抑えろ、クレイ。激昂しやすいのはお前の悪い癖だといつも言っているだろう」

「……………すみません」

「いい。そちらも、こちらが多少横柄な態度だったのは済まないと思うが、挑発的な態度は謹んで貰いたい。くだらない事で争うのはそちらにとっても望まない事だろう」

「その通りだな。そちらは謝罪しよう。だが、どういった用件か

も分からないのに召喚に応じるつもりは無い、というのは事実だ。こつちとしては呼び出される理由が無いからな。その辺りをきちんと説明されないと、たとえこの国で一番の権力者であっても応じる気はないぞ」

実際は武力行使でどうとでも出来るとはいえ、そうなれば確実に死人が出る。ゲームなら何百人殺したところでしょせんはデータと割り切れるが、この世界に生きて根を張っている『人』を殺すのは強い躊躇いを感じている。だからこそ、争いになるような事は極力避けたい。

「安心して欲しい。今回の招致はおそらく貴殿の人となりを確かめるためだ。突如現れた実力者が害を成す者か否かを見極め、何か起きた際の適切な対処を決めておくのだ。Aランク以上の猛者は必ず一度王城に招かれるからな。同等以上の実力者である君もそうなるのは当然の結果だ」

（見極めるね。有用なら登用、有害なら要監視のブラックリスト入り。ここは承諾してなおかつ謁見では無害で無能なように見せるしかないか）

「分かった。明日四刻に召喚状を持って王城へと出向こう」

「そうか。良かった。では、確かに伝えたからな。我々は戻りましょう」

騎士の男はそう言って、もう一人と冒険者の男を連れて来た道に戻って行った。それを見送ってから、俺はため息を吐いて空を仰ぐ。

「はあ……。全く持つてままならないな」

そんな呟きは誰の耳にも届く事は無く、そのまま雲一つ無い蒼穹へと吸い込まれていった。

第九話『布と召喚状』（後書き）

今回は王城に召喚されるまでのお話でした。あっても無くてもどうにでもなるようなお話ですが、個人的に必要なと思ったので入れました。

ちなみに、カフェで一番高いのは金貨五枚取られる希少な食材ばかり使ったケーキです。例によって三口ほどで食べ終わってしまうような大きさで、しかし本当にケーキか疑うような造詣に凝った物です。

そして今後出る予定はありません。

つまらないお話はあと二、三話で終わる予定です。それが終われば、アルシャさんにはちよつとした地獄を見てもらい、ミーナさんにはしばらく本に埋もれてもらいます。ほんのひと月くらい。

詳しい内容は言いませんが、ひたすらに主人公がアルシャを苛め抜きます。たぶんの予定なので変わる可能性も大なり極大なりありますが。

という訳で、地獄月間が始まるまで見捨てるのは待っていただけと感謝です。

とりあえずアルシャ頑張れと思う神様 紡でした。

第十話『布と王』（前書き）

ようやく十話です！

まだ基礎固めすら終わってませんが、どうにか完結まで持って行きたいと思います。

第十話『布と王』

王城の中というのは、実に豪華な物だ。

華美に彫刻を施された柱に傷一つ無い純白の壁。カーペットは足が沈み込むくらいに柔らかく、踏む事が躊躇われるほどだ。壁際に置かれた壺や絵画一つ取っても、庶民では一生分の金を注ぎ込んでも買えないような代物が惜しむ事無く置かれている。

これは外客の視線に晒される場所だから、というのが理由だろうが、その見栄を張るために一体どれほどの金^{ホーム}が飛んだのかは想像も付かない。ゲームでは、ギルドの所有する拠点としての城に置かれているのはせいぜい甲冑やオブジェクト化されたレア武器ぐらいだ。大手ギルドでも、内装まで凝る事ができたのは極一部だけだ。

（人数がいた分、でかい城を買わざるを得なかったらしいからな。少数精鋭の所でもない限り、維持費だけで手一杯になるのは仕方が無い事なんだが）

大手になると千人単位で、少数精鋭を歌つても、城を持つような所は数百人という人数だ。当然、それらの人数で不足なく使える部屋数が必要になるし、幹部クラスが様々な処理を行う部屋や一般メンバーが集まるための部屋だっている。他にもアイテム庫に武器を作る鍛冶場等、ギルドが大きくなればそれだけ大きな拠点が必要になっていくのだ。

そうして物思いに耽っているが、前後左右斜め隣りを“案内”の兵で固められた状況だからこそできる事だ。もしこうして“はつきりとした”警戒が無ければ、むしろ逆に影からの監視を気にしなくてはならなかっただろう。これなら、少なくともいきなり天井から暗殺者が、などという事にはならないはずだ。

（それにしても、全員魔人まじんと力人りきとばかりの上位種族か。平均レベル一五〇〇って事からも向こうの警戒の度合いが知れるな）

冒険者ギルドでは見なかった上位種族がこうもいるという事は、おそらくは国が破格の待遇で引き抜いているのだろう。もしくは、幼い頃から徴兵して忠誠心を植えつけているか。ゲームと全く同じで条件を満たした転生なら難しいが、情報を集めた限り、種族は先天的な物だ。故に、刷り込みも十分可能だ。

国としては、将来が約束された種をわざわざ収穫期まで待つより、自分で収穫可能な状態まで育てるという事だろう。地球でも、アフリカなどでは子供が倫理観を育てる前に殺人を遊びと同じ価値観で刷り込んで少年兵に仕立て上げるし、こちらで似たような事をしていてもおかしくはない。

（まあ、本当にやっていたとしても、どうせ名目上は全く別の形を取っているのだろうから、交渉の手札にすらならないな。単純に高待遇だから仕えてる、という可能性も十分高いし。まったく持つて情報が足りん）

昨日あれから情報を集め、分かったのはせいぜい家族構成と名前、執政の評判程度だ。素人の情報収集能力では、短時間で集めるのはこの程度が限界だった。

ただ、それ以上に注意すべきなのは《王権》と呼ばれる特殊スキルがこの世界に存在しているか否か、という事だろう。王権というスキルは、年一の特権イベントで《王人おうじん》という普通の種族とは別の、俗にサブ種族と呼ばれる物になった際に得られる限定的だが非常に強力なスキルだ。

その内容は、『城内において、全ての状態異常を無効化し、物理、魔法防御の値が一・五倍になる』という反則的内容で、月に一度の城攻めイベントなど、城を舞台とした場合には恐ろしいまでの強さ

を發揮するレアスキルだ。

もしこれをこの世界の王が持っているのならば、種族とレベルによつては本気で命が危ない。ゲームでは、このスキルを保有したレベル一〇〇〇ちよつとの力人に殺された事もある。魔人が援護に付いていたとはいえ、本来ではありえない。そんな事が起き得たのは、ひとえに王権のスキルによるものだ。

（ああ、めんどくさい）

つらつらと考えて、最後にそんな事を思つた所で謁見の間らしき扉の前に辿り着いた。無駄に巨大な扉の前に二人の騎士が直立不動で立っている。彼らはこちらを見て、一瞬驚愕の表情を浮かべたが、すぐに表情を固めて元に戻る。こういったプロ意識というのはいつ見ても感心させられる。

そんな彼らに、先導していた男が二言三言交わし、こちらに戻ってきた。

「リンセイル殿、これから中に入りますが、先にご説明した通りをお願いします」

「はい。至らない事も多々あるでしょうが、精一杯努力させていただきます」

「リンセイル殿は貴族ではないのですから、多少作法から外れても問題にはなりませんよ。そもそも、今回の謁見は慣例のような物ですから、会話自体も最小限の物になるはずです。そこまで気負う事ありませんよ」

謁見に向かう俺を安心させるように笑って見せる男頷き、笑みを返す。

「今まで謁見などとは無縁の生活をしてきましたからね。気負う

な、というのは少々難しいですが、可能な限り自然体でいますよ。緊張してどうなる物でもないでしょうから」

「それが一番だと思いますよ。では、そろそろ入りましょうか。王がいつ来るかも分かりませんからね」

「はい、分かりました」

促され、頷く。ここまで来れば引き返す事などできないし、一国の王と面識があるというのは、プラスにはなってもマイナスになる事はそうそうあるまい。そんな思いと共に、少しの緊張と多少の打算を携えて堂々と踏み入る。

途端、幾重もの視線が一斉に俺へと注がれた。

謁見の間は一階の奥という位置取りで、襲撃に対する配慮として窓が一切存在していない。代わりに光魔法を利用したらしき照明が九つ、均等に配置されて真昼の外と同じかそれよりも明るい光で謁見の間を照らしている。荘厳な柱も相まって、厳粛な雰囲気がいかにでもかと伝わってきた。

そして、扉から二つの玉座の設置された階段の上まで朱色の絨毯が敷かれて、その絨毯と柱の間に立つ、貴族や重鎮だろう者達がこちらを遠慮も躊躇も無く見定めるように見ている。視線は決して友好的とはいえず、
「あれが――」「野蠻な――」等といった言葉が聞こえてくるが、一々相手をするのも疲れるので聞き流しておく。付き添いだった四人の顔に面目無いと書いてあった事も大きい。

ただ、その中でも玉座の左右に立つ二人の男女を始めとして、明らかに纏う雰囲気の違い者達にチェックを入れるのは忘れない。特に、《パーソナルサーチ 個体識別》で突出したレベルの者達はチェックしておく。

なるとは思っていないが、戦闘になった時に後ろから攻撃されま
したというのは遠慮したい。ダメージなどほとんど無いはずだが、
リアルでゲームのダメージ計算が通用するかという事に昨晩気付い
た。この世界があまりにもアルタベガルの世界と同じため、知らぬ
内に同一視していた。

（まあ、ステータスにHPもあつたんだから、ゲームと同じ目算
は高いんだけどな）

それでも、毒やHPとMPの全てを消費する自爆特攻のスキルを
使われればどうなるかは分からない。さらに言えば、たとえ一人一
人の力は俺に遠く及ばずとも、全員の力を統合するような技、もし
くは儀式魔法などといった“ゲーム外”の技術を持ち出されれば、
いかに最上位種族のカンストレベルといっても部が悪過ぎる賭けだ。
昨日、使いの騎士に取った態度が悔やまれるが、よく知りもしな
い他人との押し問答↓怒った友人に高額奢り発生というストレスの
溜まるコンボを喰らった所に來たのだから、仕方の無い事だったと
思う。なんていうか、タイミングが悪かったのだ。あれはお互いに
不幸な事故だろう。

だんだん現実逃避の方向に流れていく思考を弄びつつ、男に言わ
れた通り膝を付いて待っていると、ようやく王がやってきたらしく、
衛兵の声が上がった。俺が頭を下げると同時に、今まで俺に無遠慮
な視線をぶつけて來ていた者達も頭を下げた気配がする。

そんな中、二つの気配が部屋の隅、玉座の横方向から現れて玉座
へと向かう。それは静かな足取りで段を上って行き、

「ぐべっ」

どん、という音と共に何とも情けない声を上げた。

（何が起きた！？）

正直、顔を上げて何が起きたかを見たい衝動に駆られたが、寸で
のところで堪える。歩いていた気配が段の途中で止まっているから、
そこで何かあった、というか、十中八九こけたんだろ。無茶苦茶
見てみたいが、見たら確実に爆笑するだろうから我慢する。さすが
にそんな事で敵対したくは無い。

それからほどなくして気配は玉座まで上りきり、全員に顔を上げ
るように促した。

「表を上げよ」

「ハッハッハッ」

全員が声を揃えて答え、一斉に顔を上げる。俺もそれに合わせて
顔を上げて、初めて玉座に座る人物を見た。

質実剛健。

泰然と玉座に構えるその姿は、まさにそう表現すべきだろう。質
素とはさすがに言いがたいが、無駄に華美な装飾がある訳でも無く、
威厳を保つに足る最低限の装飾を施された衣を身に纏い、冠もそれ
に合わせたのか、金に銀で装飾した宝石の少ない物だ。

だが、その姿は装飾品で限界まで着飾るよりも遥かに威容を感じ
させる。

「そなたがリンセイルとやらだな」

「はい。その通りです」

「そなたの決闘は私も見ていた。この国でSランクの称号を持つ
灼斧のコールレイを下した腕は素晴らしい物だ。今後とも、その力
を人々のために役立ててもらいたい」

「……微力ながら、ご期待に沿えるよう努力させていただきます」

遠回しに仕官を要求しているのかと思ったが、この程度では言質を取ったなどと言えないし、謙遜を入れて承諾する。その答えに王はうむと満足げに頷いた。それから少し思案して、一つの問いを發して来た。

「ところで、そなたの格好は先日決闘で身に付けていた物と違うようだが、複数の武器と防具を持っているのか？」

「恥ずかしながら、珍しい武器や防具を手当たり次第集める悪癖があります。先日身に付けていた物は、そうして集めた中の一つになります。普段は使うどころか持ち出す事もないのですが、能力的にちょうど良かったので引つ張り出しました」

「……………わざわざ呪われた武器を使った理由は何故だ？」

（ステータスを大幅に下げなかったら、掠らせただけで殺しかねないから、なんて言えないよな）

そんな事を言ったら確実に化け物扱いだ。しかし、上手い躲し方もあると思いつかなかったたので、曖昧に笑って誤魔化す事にする。

「あの時はあの装備が最善だと考えただけです。他意はありません」

「最善か。参考までにどういった類の呪いか聞かせてもらいたいのだが、構わないか？」

「……………代償を伴って攻撃力や防御力を上げる類でも、凶暴性や狂人と化するような類でもありません。陛下がご心配なされるような装備者を侵し、他者に害を及ぼすような代物ではない、という事で満足していただけますか？ 一介の武人として、手の内の一つを、このような大勢の見ている前で明かすのは躊躇われますから」

今後あれを装備する予定はないが、呪いの内容をでっち上げるにしても、国が“有害”と見なさず、なおかつ呪いの装備として認め

るような効果を即興で思いつくのは無理だ。ただ、王の問いを無下に断ると不敬として周りの輩が騒ぎ立てるだろう。故に王の問いに答える気はあるが、人が多いから無理と言ったのだ。

しかし、そうして気を使っても騒ぐ者はいて、謁見の間は一時騒然とするが、王が片手だけでそれを制した。

「なるほど。確かにそなたの言う通りだ。情報というのはどこから漏れるか分かったものではないからな。手札を安易に晒さぬのは至極当然と言う他あるまい。さきほどの言葉は撤回しよう。軽々しく問いを発した事は謝罪する。軽率な事をしてすまなかった」

「いえ、本来不敬と言われても仕方の無い事ですから、私のような只人^{ただひと}には不問とされただけで十分です。まして謝罪など、分不相応過ぎてこちらが恐縮してしまいます」

「いや、非はこちらにあったのだ。謝罪すべき事は謝罪する。そうでなければ人の上に立つ資格など無い。我々王族は遍^{あまね}く全ての国民の見本でなければならぬのだからな」

何とか言い繕って返したのに対し、王はこの聖人君子かと思わせるほどに広い度量を見せる。人間としての器が俺などよりも遙かに大きい。そんな王の姿に良君名主という単語が脳裏に浮かぶ。あれは一体どこで見た言葉だったか。

その後もいくつか言葉を投げかけられ、俺がそれにボ口を出さないように四苦八苦して答えるという事が続いた。それも終わりようやく解放されるという段階で、今までだんまりを決め込んでいた王妃らしき女性が王に何事か提案した。それを聞いたのだろう、両隣の重鎮二人が顔を僅かに顰めたのが見えた。

嫌な予感が背筋を伝う中で、俺は王の言葉を待つ。

「リンセイルよ。貴重な時間を割いて余に割いてくれた事、礼を言う」

「いえ、私のような下賤の者にお目通りを許していただきいた事、至極光榮に思えばこそ、この時間に比べれば、他の事などとても貴重とは申せません」

正直な所、自分で言っておいて過剰だとすら思うほどに謙った言葉だったと思う。だが、居並ぶ者達は誰もそのような事は思っていないらしく、当然といった様子でこちらを見ている。そんな中、王は一つ頷いてから問いを發してきた。

「うむ。ところで、今後の予定などは決まっておるのか？」

言われ、少し考える。本来は今日出る予定であつたが、謁見が入つたために明日へと伸ばしたし、今後必要になりそうな物は食料を除いて全て揃えた。つまり、スイとミーナが何か予定を作つてなければ何も無いという事になる。

「いえ、一応明日にはここを發ち他の町へ渡る予定ですが、特に危急の目的も無い身ですから、何も無いと言つてなんら差し支えはありません」

「ふむ。そうか……」

正直に答えると、王はそう言つて深く考え込んでしまった。正直居たたまれない空気の中で、王妃だけが何故かニツコリ笑っている事に嫌な予感が膨れ上がっていく。

時間にしてそれほど経つた訳では無いだろうが、主觀的にはとても長い時間を空けて、王がこちらを見た。

「リンセイルよ。そなたとはまだ話したい事がある。今夜九の刻に次は共に旅する者達も連れて参内せよ。晚餐にそなたとその仲間を招待しよう。異論は無いな？」

「はい？」

第十話『布と王』（後書き）

謁見です。ちなみにこけたのは王様です。

次の話でようやくトレイン少女が出ます。本当に長かったです、
今後はきっちり頑張ってもらうので大丈夫でしょう。何を頑張ってもらうかはまだ決めてませんが、彼女ならきつとやり遂げてくれます。そのはずです。

本当にあと少しで最初の面倒極まりないキャラ出しから解放されます。楽とは言いませんが、気持ちの乗りやすい話が続くはずなので、一気に気が楽になりそうです。

会話分が苦手過ぎる神様 紡でした。

第十一話『布と会食（上）』（前書き）

すみません。またさらに遅れました。申し開きのしようも無いですが、しかもあと二、三話と言っていました。サブタイトルからも分かるように予定以上に文字数が伸びたため、一つの話をも二つに分けます。つまり、その分つまらない話が伸びる事になります。

毎度毎度、予告からズレてすみません。

第十一話『布と会食（上）』

（決闘の時にちょっとやり過ぎたかな）

指定された時刻十五分前に二人を連れて城へとやって来た中で、不意にそんな事を思う。ただ、もう一度同じ事が起きれば確実に同じ事をするだろうし、死なないレベルまで手加減したのだからそれ以上は過剰だろう。

まあ、やってしまった事はやってしまった事で割り切って、俺は両隣に座るスイとミーナを見やる。俺もそうだが、スイは初期装備である蒼と白の装飾少なめなバトルドレスで、ミーナもゴスロリは止めてイベント配布の紅いドレスコスチュームを着ている。

かくいう俺も会食という場に合わせて、かなり前に仲間連中でふざけて作った漆黒のスーツ姿だ。友人の一人が不用意に放った一言で巻き起こった一連の騒動は、今となっても鮮明に思い出せる。

「わざわざ会食の場まで用意して話す事って何だろうな」

「さあ？ 謁見で何も問題なしって判断して、仲間ごと取り込もうとかじゃない？ ていうか、初対面でろくに交流も無い相手に要求する事なんて、そう多くはないと思うけど」

「他にも何らかの厄介な依頼を持ちかけられる可能性もありますよ。プライベートな時間に依頼すれば、何かあっても知らぬ存ぜぬで無関係を決め込めますから」

「あのさ、話を振った俺も悪いけど、せめて時と場所を考えて発言してくれるか？」

食堂まで案内してくれる兵士の動きがぎこちなくなるのを見つつ、俺はため息混じりに暴言を否定する。そうしないと、主に他人からの視線や噂話といった辺りの面倒事が増えそうだ。

「とりあえず、厄介事を押し付けるなら後で使者でも送ってやればいいし、取り込むならもつと実績のある人格の知れた奴にするだろ。俺らみたいな出自不明、経歴不明、人格不明に能力不明と不明尽くしの輩を雇い入れるようなら、一国の王なんて務まらないから」

「じゃあ、リンはどうだって思うのよ」

「一つは俺達がこの王家とそれなりに深いつながりがあると他国にアピールして、最低でも他国に所属されないようにする事だなあとは、気障男の実家に対して、手を出せば王家に睨まれるぞと暗に示す事で面倒を事前に回避とか。どっちとも、食事をする事よりも食事をしたという事実が重要だな」

トップレベルの冒険者を圧倒できる実力の持ち主なのだ。それが他国に流れれば、種族特性からして『玄人向けの超高難易度種族』とまで言わしめた人族だ。レベルや質からして数だけが頼りだろうから、国力の関係で相当不利な立場に追いやられる事になるだろう。だからこそ、実際には抱き込めなくても、そう思わせるという事には意味がある。他国の王族と会食したというだけで、他の国の重鎮達は警戒する。逆に俺達は、無闇に手を出せば国際問題になる要注意人物として、権力関係のしからみからある程度だが守られるというメリットがある。

帰る方法を探すために、どこかへ所属するつもりは毛頭無い俺としては、多少の警戒を受けるよりも一々城だ何だと勧誘を受ける方が面倒だ。そんな事になれば、数日と経たずにキレル自信がある。

（まあ、今はそんな事より目の前の厄介事か）

あれこれ考えた所で、それは結局予想でしかない。こうだろうと予想して備える事は必要だが、あまり考え過ぎて思考が固くなるのも駄目だ。予想外の展開になった際に動けなくなる。

首を振って思考を打ち切ると、タイミング良く食堂に着いたらしい。兵士が食堂の前に立つ二人の騎士に俺達を案内してきた旨を報告し、敬礼した後去っていく。そんな兵士の代わりに、騎士の一人がこちらへと敬礼し、歓迎の意を示す。

「王はすでに中で席に着いています。ごゆっくりどうぞ」

「はい。ところで、座る場所は入り口に近い方の端から、という事で合ってますか？」

「はい。王と王に近い者が部屋の奥側に座り、客人は反対側の席に着くのが通常の席順です。ただ、時と場合によっては変動もありますから、部屋に入った後、王に一度聞かれるのが間違いないかと」

「分かりました。お仕事中にありがとうございました」

「いえ、これも仕事の内ですから」

礼を述べてから、中へと入る。扉は、それも仕事だからと騎士の人が開けてくれた。

中に入ってまず目に付いたのは、何メートルあるのか、という程に長いテーブルだ。途中にはいくつも燭台が置かれていて、立てられた蝋燭ろうそくは、壁の物と合わせて十分な光量を持って部屋を照らしている。また、壁にはしつこくならない程度に絵画が掛けられていて、その姿はまさしく王侯貴族の食堂だ。

キョロキョロと見回しているミーナのようにそれらを眺めていた気分ではあったが、その誘惑を振り切って部屋の奥へと視線を向ける。精霊であるスィが直立不動を保っているのに、契約相手である俺が失態を見せる訳にもいかない。

部屋の奥で座っていたのは、先程謁見した王と王妃、それに加えて一人の少女が緊張した面持ちで座っていた。王譲りの銀髪に王妃に似たであろう線の細い儂げな雰囲気美人だ。ただ、残念な事に顔を俯けているために、その造作は見取る事ができない。

そんな中、黙っている訳にも行かないので、背筋を伸ばして参内を告げる。

「お招きに与り図々しくも再度参内致しました。何分平民でありますので、礼を失した言動もございませう、お目こぼしをいただけると幸いにございます」

「そこまで慇懃な態度を取っておいて、礼を失する事などないと思うがな。まあ、この場においては礼も不要だ。特権階級のパーティーでも式典でもないのだ。気を楽にするがいい」

王の苦笑を多分に含んだ言葉を聞き、内心でほつと息を吐き出す。俺の礼儀作法など見よう見まねの付け焼刃だし、スイはともかくミナだつて宮廷作法などといった特殊な儀礼を知っているはずも無い。この場が一から十まで礼儀を必要とするなら、限りなく緊張する場となっていただろう。

「ありがとうございます。ところで、早速の無作法となつてしまふのですが、私達はどこに座ればいいのでしょうか？ 何分このような席は初めてなもので、どうすれば良いのかが分からないのです」
「む、そうか。だが誰も見ていない席で礼儀に拘るのも面倒だろう。好きな所に座りなさい」

「……分かりました」

一瞬こんな人間が国家元首で大丈夫なのかと思つたが、実際大丈夫だからこうして国王をやっているのだし、出かけた言葉は飲み込んでおく。たとえ追求したとして、何の利益も無い。

二人を促し、とりあえず入り口で聞いたように国王達と反対側の端に座る。なんというか、大声を出さなければ聞こえないんじゃないかというぐらいに距離が離れているのだが、どうにもこの部屋が静かなせいで、ある程度の声量で話せばきちんと向こうまで届く。

さらに言えば、こういった食事の場では話をする事自体非マナー行為なので、離れていても問題はあまり無かったりする。

俺達が迷う事無く正しい席位置に着いたのが意外だったのか、王がほう、と声を漏らすが無視して話を切り出す。せつかく滅多に経験できないだろう場所にいるのだ。後顧の憂いは断って楽しみたい。

「さて。まずは改めて自己紹介をしましょう。私の名はリンセイル。今のところ家名はありません。そして、そちらの獣人族がミーナ、反対側の蒼い髪の方はスイです」

「うむ。私はこの国の国王であるガルゼンテス・ノーセリア・アヴァロンだ。隣が妻のイセリア・クーズイム・アヴァロン。そして娘のアルシャ・リースレイ・アヴァロンである」

「ご紹介、痛み入ります。奥方様もお嬢様もとても見目麗しく、さすがは王の人徳が素晴らしいという事でしよう。未だ伴侶はおるか恋人にも恵まれぬ身には、羨ましく思います」

いや、お世辞ではなく王妃も王女も美人だ。大陸一と言われれば、本当に信じられそうなくらいに綺麗な顔立ちとスラッとしたモデル体型は誰もが目を奪われるだろう。

スイ？ あれは元々プログラムだったし、精霊であってそもそも生物の範疇に無い。ミーナ？ いや、顔立ちは整っているがさすがに外見年齢がな。俺は別にロリコンじゃないから裸を見た所で驚きはしても狼狽はしないと言い切れる。

そうして褒めると、さすがに悪い気はしないのだろう、王も若干機嫌良く頷いて見せる。

「余の自慢の妻と娘だからな。当然の事だ」

「そうですね。一人身には本当に羨ましい事です。それで、そろそろ本題に入りたいと思うのですが、よろしいですか？」

「む。まあ、腹に一物抱えたまま食事をする訳にもいかぬか」

俺の問い掛けに対して、すぐに察した王はやれやれと首を振る。それから、居住まいを正してこちらへと向き直った。それを受けて俺も、そして他の会話に参加していなかった四人も背筋を伸ばす。

「では、無駄な話を省いて問おう。先日、城の西にある森でモンスターを大量に討伐したのは主か？」

「……………ええ、まあ。予め言っておきますが、森を歩いていたところにトレイン——大量のモンスターを引き連れた人物が走ってきたため、仕方なく応戦しただけですよ。そのまま放っておいたら確実にその人物が死んでいたでしょうし、そうでなくても街まで到達してしまつては大惨事ですから」

今その事を問うてくる理由が思い浮かばず、正直に答える。特に魔物を狩るのが罪という事はありませんだろうし、何の問題も無いはずだ。

（いや、待て。それにしてもどこでその話を聞いたんだ？）

あの事を知っているのは俺とスイとミーナ、それにモンスターをトレインしていた少女だけだ。戦闘中に近くに人がいなかったのは確実だし、その後だつて見られてはいない。だというのに、王は“討伐”と言った。ただ移動した可能性もあるのに断言した時点で、詳しい経緯^{いきさつ}を知っている事になる。

その事に気付き、訝しげな顔を仕掛けたところで王がうむと頷いた。

「主がそうだったのなら話してもよからう。主が助けた冒険者だが、実は余の娘、アルシャだったのだよ。新しい装備に浮かれて森まで行つてしまつてな。主が通りかからねば死んでいただろう。今

更だが、礼を言う。後で褒美も取らせよう」

「困っていれば手伝う。危機に晒されているなら助ける。これは冒険者にとってマナー以前に当たり前の事です。だから、お気になさる必要はありませんよ。そのような当然の事で謝礼を受け取っては冒険者としての沽券に関わりますから。それに、ドロップ品で十分な金額になりましたからね。……まあ、先日見事に泡と消えましたが」

ただかスイーツ如きに消え去った金貨銀貨を思い出し、最後に小さく付け足して若干遠くを見る。まあ、すでに消え去った物に対していつまでも固執するのも馬鹿らしい事だ。すぐに頭を切り替えて言葉を続ける。

「そもそも、こうして王族と同じ場で食事を取っている事自体がすでに異常なんです。この上金銭にしても物にしても、何か受け取ったりすれば面倒な事になります。王も本来必要の無い火消しをするのは本意ではないでしょう？」

「確かに貴族共を黙らせるのは手間が掛かる。だが、それを理由に娘の恩人に何も返さなかったのでは、それこそ王家としての沽券に関わる。受け取ってはくれぬか？」

（正直全面的に拒否したいんだが。嫌がらせにしかないのを理解して欲しいね）

本当なら即答で拒否したい所だが、仮にも一国の王を相手にそれをする度胸はちょっと無い。故に、相手を立てつつ面倒事の発生しない報酬を考えて、そういえばと昨日検討していた事を思い出す。

“それ”なら、王家に不可能という訳でもなく、かといって誰かに咎められるほどの物ではない。言いがかりを付けられるような隙も無く、王家や国に一切の負担が掛からない分遠慮するだけの理由も無い。そう結論付けて、俺はその提案を王にする事にした。

「分かりました。では、一つだけ、王家の所有する書庫の自由閲覧許可をいただきたく存じます。王家以外には支払えず、かつ本を読むだけですどこにも負担の掛からない報酬です。無論、不可と言っのならば大人しく引きます。いかがですか？」

「……………禁書の閲覧は許可できない。それ以外だけで良いのならば、第二十七代アヴァロン国王として許可しよう」

「構いません。元より予定に無かった事です。許可されただけ僥倖でしょう。……………二人とも、勝手に決めておいて何だけど、それで良かったか？」

「リンの決定に異論を挟む気はありません」

「私はその件には関わってないし、何か言う気はないよ」

話の落とし所を付けてから、事後承諾となる確認を取ると、二人ともすぐに了承してくれた。その際、ミーナの目がキラキラと輝いていたのはご愛嬌というものだろう。

そうして話が一段落ついた所で、見計らったかのように食事が運ばれてきた。それらが並べられていく中で、王は手を叩いて笑みを見せる。

「さて、せっかくの食事だ。冷めてしまう前にいただくわけではないか。ああ、作法などは気にしなくても良いぞ。これは私的な会食だ。堅苦しく行くのは無しにしようではないか」

王がそう言った後、食前の祈りを捧げてようやく今日のメインとなる会食が始められた。

第十一話『布と会食（上）』（後書き）

一応、これで王の側は主人公達を絶対とは言えないものの信用のおける人物として見る事になります。知らなかったとはいえ、王女を救った相手なのですから、これで一切信用しないとなれば王家の威厳が地に落ちますね。

報酬に関しては、主人公は以前可能ならそうしたいが無理と結論付けていた事を要求しました。今回以外にチャンスはありませんでしたし、棚から牡丹餅的な状況でしたから、ある意味ボーナスですね。特に他の報酬も思いつかなかったので、これで通しました。

次回は会食後編です。フオールアウト₃が中々進まない神榛 紡でした。

第十二話『布と会食（下）』（前書き）

お久しぶりです。大分遅れてしまい申し訳ありません。

それで、さらに申し訳ないのですが、そろそろ富士見ファンタジア小説大賞に応募する原稿を書くころと思うので、一月から二月ほど投稿が遅れる事になると思います。

楽しみに待ってくださっている方々には本当に申し訳ないのですが、ご容赦の程をお願いします。

第十二話『布と会食（下）』

時たま響く、カチャ、という食器とスプーンやフォークのぶつかる音も途絶え、部屋が完全に沈黙する。

三者三様、それぞれの理由で持つて全員が沈黙する中、最も早く食事を終えて食後の紅茶を楽しんでいた王がカップをソーサーに戻した。カチャリ、という小さな音がやけに大きく響く。

「さて、話を続けようか」

小さく呟くような、しかし絶対に聞き逃す事がない威厳の込められた声を受けて、俺も笑みを浮かべて頷く。

「そうですね。まだ、我々をここに呼んだ本題まで行っていないみたいです、しっかり聞かせてもらいます。わざわざ王女殿下まで同席させている理由も含めてきちんとお聞きしますよ」

十中八九、王女様関連だろうな、と当たりをつけつつも笑顔で言い切る。笑顔なのは表情を読ませないための俺なりの方法だ。俺としては、無理に無表情を貫くより、常に一つの表情を眼前に押し出した方が細かい機微が読めないと思っている。

そんな俺の言葉に対して、王も笑みを湛えて頷いた。

「うむ。主のように聡明だと話が早いな。だがまあ、話としては簡単だ。主に、余の娘、アルシャを鍛えてもらいたいのだ」

「鍛える。つまり、弟子に取るという事ですか？ 雇用条件を聞く前に大前提として言っておきますが、私は剣士ではなくただの布使いですよ。真っ当な剣士に師事させた方が有意義だと思いますが、

本当に私のような者でいいんですか？」

「剣技だけなら、アルシヤはすでに基礎ができています。後はレベルを上げながら自分に合った戦い方を身に付けるだけだ。故に、師事する相手がどのような武器の使い手であろうと問題は無い。だいたい、主は剣も使えるだろう」

「ステータスの高さに任せて無理矢理型に嵌めてるだけです。あの程度でいいならミーナもできます」

王の言葉に肩を竦めてそう返す。そもそも、VRとはいえゲームしか知らない俺から見てさえ、この世界の武技はあまりにも“生温い”。だからこそ、大して修練も積んでいない俺に剣で敗れるのだ。おそらく、そういったステータスに無い強さの衰退も、レベルが低い一因となっているのだろうと思う。

「レベル差があっても卓越した技術があれば十二分に渡り合えます。そうでなければ人類はとくにこの世界から消えてますよ。この世界には神や精霊王を除いたとしても普通に一〇〇〇〇レベルとがいるんですから」

「滅多に出ない災害級の怪物を例えに上げられても困るのだから。それに、主はそういう者達を知っているのかもしれないが、余はそれだけの強者を知らぬのだよ。生涯に一目見る事すら適わぬような存在よりも、今近くにいますモンスターや賊徒から身を守るだけの力を与えてやって欲しいのだ」

それならなおさら俺は必要無い気がするんだが。そう口にしかけ、違うか、と思い直す。

（モンスターや“賊徒”と言った。そしてこの周辺にそこまで強いモンスターはいない。東のレッドドラゴン渓谷から出て来ないし、安全性では大陸で一番だ。だが、だからこそ、鍛える必要があるのか。少なくとも、“強引に関係を迫る馬鹿から身を守る”ために）

事が女性の貞操だ。これが金銭やくだらない見栄、プライドのためなら断る所だが、一人の不幸を未然に防ぐという大義名分のためなら十分一考の余地はある。今のところ、メリットとデメリットを並べればデメリットの方が僅かに多いが、その辺りの調整はここからするのだから問題は無い。

「王の依頼は理解しました。それを受けるに際して、細かく条件付けをしていきたいと思えますがよろしいですか？ 両者間に齟齬があってもいけませんし、取り決めが無いのはトラブルの元ですから」

「では、受けてくれるという事か？」

「報酬として、前回提示した報酬である書庫の閲覧における制限の解除と修行に関して一切の罪過を問わない事を確約し、さらに依頼の期間をこの街に滞在している間だけで納得していただけるならああ、当然、王女の体など微塵の興味も無いので、その所を理解した上でご検討ください。最低でもこれらの条件が守られるなら、全力で持つて事に当たる事を約束します。二人もそれでいいよな？」

「どうせ急ぎの用も無いし、私がやる訳でもないし、別に構わないわよ」

「私はリンに付いて行くだけだといつも言っていますよ。リンの

が残らなければ一切罪に問わない。その他細かい決定事項は契約書に準ずる。これが最終決定という事で良かったですね？」

十枚の紙を五枚ずつを束ねて片方を王に、片方を自分の前に置いて最後の確認をする。それを受けて、王は書類に目を通して頷いた。

「うむ。これで問題ない。では、確かに契約した。娘を頼むぞ」

「ええ。これだけ長い時間を掛けて契約したんです。見合うだけの働きはするつもりですよ」

部屋の窓から完全に日の落ちた外を見て言う。実際、たった五枚分の契約内容を決めるのに四時間以上掛かっているのだ。今日はこの城に部屋を用意してもらったという事で、スイとミーナは侍女の案内で客室に行っているし、王女も交渉が長くなりそうな気配を察し、すぐに部屋を出て行った。最後まで残っていた王妃は二時間前に王が部屋へ戻しているし、今部屋にいるのは俺と王、それに護衛の騎士四人に侍女が一人だけだ。

途中、遠慮無くい条件を出すための交渉をする俺に対し、騎士の中で一番若くて真面目そうな女性が斬りかかりそうになったが、そんな事は眼中にもおかず、王と二人で条件を詰めた。俺は中途半端は嫌いだし、王も娘に関わる事なので真剣に話し込み、結果としてこの時間だ。

騎士の一人が先ほどからあくびを噛み殺しているし、侍女も延々と部屋の隅で立ち続けて若干疲労が見える。悪い事をしたかと思い、大した用も無く話を伸ばすのはやめておこうと思う。

まあ、そう思ったのだが、王がおもむろに放った言葉でそれは無しとなった。

「さて、契約も無事済んだ事だし、出会いを記念して酒でも飲も

う」

うん。今の言葉を聞いて騎士の顔が引き攣って侍女の顔から感情らしき感情が消えた。ここで酌の誘いを受けたら周囲の好感度が一気に下がるだろう。闇討ちはさすがに無いと思うが、冷たい目で見られるのは勘弁して欲しいので一応反抗してみる。

「今日はもう遅いですし、王も疲れたものではありませんか？ 明日も政務があるのですし、お休みになられた方が良いのではないのでしょうか。私のような下賤の者と杯さかずきを交わした、というのも、外聞に関わると思いますし」

「はっはっは！ この程度で政務に差し支えるようでは王などとても務まらんよ。それよりレマ君、酒蔵にユグドラシルから贈られたワインがあつただろう。それを持って来てくれ」

「は、はい！ すぐに持ってきます！」

「うむ。慌てて落としたりしないようにな」

レマというらしい侍女が、王から言葉を掛けられてすぐに出て行った。よほど慌てているのか、ドアの向こうにアツた気配は物凄い勢いで離れていってすぐに捉えられなくなる。早い。

それを笑って見ていた王の気配が変わる。

「さて、そろそろ聞いておくべきだろう。主は本当は何者だ？

少なくとも、人でも魔人でも力人でもあるまい。だが、その容姿は紛れも無く人の系統だ。他に漏らす気は無いから、話してはくれないか。ああ、お前達も他言無用だ。勅命だと言っておくぞ。破れば厳罰に処す」

「はっ！　かしこまりました！」

「……………そこまでして隠すほどでもないんですけどね。まあ、隠せるに越した事はありませんし、ご好意には甘えさせていただきます。それじゃあ、自己紹介をもう一度しましょう」

知る者が極少数で留まるなら話しても構わないだろう。実際、広く知られた所でどうこうされるようなつもりは無いが、わざわざ無用な危険を呼び込む必要も無い。そう判断して、俺は頷く。

「ご存知の通り、私の名前はリンセイルです。二〇〇〇レベルの始祖で、実質的な能力値は人族の六〇〇〇レベルと同等になります。諸事情あり、現在のギルドにおけるランクは最低のF-になってます。過去に単独で倒した敵の最高レベルは一四二八二ですね。代償に最高位のアイテムを湯水のように使って一日全部使い切りましたよ。自己紹介としてはこんなところですが、質問はありますか？」

自己紹介を終えて王を見ると、ぽかんとした顔をしていたので首を傾げる。多少非常識な戦歴かもしれないが、俺が異端だという事は初めから解っていたはずだが。それに、この程度で驚いているなら、《歩く非常識集団》などと揶揄された俺達の経歴を聞いたら卒倒するような気がする。

「王？」

「……………はっ！　いや、何でも無い。始祖などというのは伝説上の種族だとばかり思っていたのでな。少々、いや、かなり驚いた。まさか、生きている内に会う事になるとは思っていなかったからな」

「始祖がありふれてた存在だったら怖いですよ。まあ、中身に関

してはただの人です。怒りもすれば落ち込みもしますし、喜びもすれば悲しみもします。生物としての在り方が特殊な以外は他と変わらないただの一種族ですよ」

実際問題として、不老や一步抜きん出た能力値を除けば、他の最高位種族とそう変わらない。種族専用のフィールドは他の最高位種族にも存在しているし、そういった所は人格には全く関係ない。まあ、この世界でどうかは知らないが、少なくとも俺とミーナには関係していないのだから、間違っではないだろう。

「うむ。それもそうだな。少なくとも、アルシャを任せる上でこの上なく安心できる実力者という事が分かったというだけで十分だろう。どれだけの期間になるかは分からないが、よろしく頼む」

「はい。全力を尽くさせていただきます」

俺と王は笑みと共にがつしりと手を結んだ。そこにガチャリと音を立てて先ほどお酒を取りに行った侍女が戻ってきた。握手を止めた王は侍女からワインを箱ごと受け取るとテーブルの上にドンと置いた。

「では、酒も来た事だし、飲もうではないか。ユグドラシルのワインは美味いぞ」

「あはは。ご相伴に預からせていただきます」

（うん、すっかり忘れてた。というか、なんであの侍女は箱ごと持って来てるんだ。普通一本だろ）

パツと見ても十本以上あるワインのビンを見て、俺は長い夜にな

りそうだな、と乾いた笑みを浮かべて頷いた。そもそも俺はまだ未成年だと言いたいが、どうせこの世界に飲酒法などあるまい。

明日は二日酔いにならない事を祈りつつ、俺は初にして長い酒盛りに挑んだ。

第十二話『布と会食（下）』（後書き）

会食終了です。この後リンは王様の娘自慢に延々と付き合わされる事に。

色々と条件を付けて契約を結びましたが、その内容を出す予定はありません。次からはしばらくアルシャ魔改造特訓的な話に入っていきます。

次回、鬼師匠リンセイルをお楽しみに（嘘）

総評が早く来ないかな、と思う神榛 紡でした。

第十三話『布と種子』

「さて、まずは改めて自己紹介と行こうか」

銀髪の少女の前で、俺は笑って自らの素性を告げる。

「冒険者のリンセイル。種族は始祖でレベルは二千だ。出自は秘密。得意武器は布で、布武術と触り程度の剣術を嗜んでいる。ちなみに、布武術は俺が自身で開発した武技なので、同じ技を持つ者は一人も、ああ、いや、一人しかいない、だな。まあ、そっちは会う事も無いだろうから気にするな。そして、今日から最低一ヶ月間君を鍛える事になる。否が応にも指示に従ってもらうからそのつもりでいるように。まあ、俺の自己紹介はこんな所か。次は君だな。最低でも名前と得意武器に目指している戦闘スタイルは押さえる事。はい、開始」

淡々と自己紹介をして、少し不意打ち気味に自己紹介を強制させる。パン、と手を叩いた音に慌てて短期の弟子となった少女、アヴァロン国第一王女アルシャ・リースレイ・アヴァロンが自己紹介を始める。

「あ、アルシャ・リースレイ・アヴァロン十六歳です！ 得意武器は剣で、将来は剣も魔法も使える魔法剣士になりたいと思います！ まだまだ十五レベルの若輩者ですが、どうぞご指導ご鞭撻の程をお願いします！」

「とりあえず、叫ぶな。俺の耳はそこまで悪くない。まあ、剣が得意で剣と魔法の両立を目指している事は分かった。趣味嗜好は一ヶ月もあるんだから追々分かっていくとして、魔法剣士という事は剣を振るいながら魔法も操る、という事だな。正直かなり難しい高

等技能だ。俺でも本気で動いてる時は魔法行使をする余裕なんて無い。道は険しいなんて物じゃないぞ」

「はい。それはもちろん分かっています。でも、それができたら相手の意表を突けますよね。それに、どうせ目指すのなら難しい方にしよう、って思ったんです」

笑顔で言うアルシャに、俺は、ほお、と少し感心した。ただ格好いいから、強そうだから、などという理由だったなら強制的に一つの武器に絞らせて鍛え上げていた。だが、多少認識が甘い所もあるが及第点と言っているいい考えだ。

実際、武器と魔法の両方を鍛えている奴は恐ろしく少ない。理由としては、さっき言ったが本気の戦闘ではインファイトである武器戦闘とアウトレンジで行うべき魔法戦闘は両立できないからだ。それを行うのは、手で書き物を行いながら足で編み物をするような曲芸染みた行為で、最低でも並列思考マルチタスクを習得する必要がある。

まあ、どちらかを無意識レベルで行えるように修練を積み重ねるのだが、そこまで鍛錬を積んだなら一方に絞った方が遥かに効率的だ。

（とりあえずはこのお姫様がマルチタスクをこなせるかどうか、だが、それは最後でいいか）

並列思考は超高難易度の高等技術だ。多大な才能と長大な訓練をこなして、使える“かも”というレベルの代物なのだから、初期の段階でそちらの方向に突き進む愚を犯す事はない。そんな方法で強くなれるのは、真正の天才だけだ。

魔法主体だというのなら、モドキレベルの複数思考でもいいから身に付けさせるが、アルシャの目指す方向性は武器主体なのだから必要ない。逆に行動を阻害する可能性がある以上、今あるスペックは全て近接戦闘に注ぐべきだ。

「まあ、意気込みは理解した。が、平行作業で魔法まで手を出すのは馬鹿のする事だ。まずは剣を鍛え、レベルを上げる。それが最優先になる。そのためにも、いくつか知っておくべき事がある。アルシャ、お前は何の《種族種子》^{レースード}を宿してる？」

そう。そこが最重要だ。アルタベガルで最弱である人族が過疎化しなかった最大の理由が《種子システム》^{シード}の存在であり、それによる器用貧乏だった人族の多様化である。

このシステムが本当に曲者で、一キャラクターにつき別の初期種族が作れる種を二つ使えるのだが、組み合わせ次第でステータスの上がり幅が大きく違う。さらに言えば、この種の組み合わせによって、次に転生する上位種族が限定されたり、特定の組み合わせだと他には無い上位種族に転生できる。

例えば、俺はここに来るまで人族↓仙人↓始祖と来ているのだが、人族から始祖になるためにはこの仙人という種族と超高難易度の特殊条件イベントをクリアして転生する全種族共通の上位種族《英雄^{ヒーロー}》になる以外の方法は分かっていない。

仙人になるための種の組み合わせを行うと、驚く事にレベル一つに冥霊族の五倍のモンスターを倒す必要がある。もう一つは条件自体は極めて分かりやすいのだが、発生が恐ろしいほど少ない《国家間戦争》で英雄的素質を示す事だ。

詳しく説明すると、レベル千以上の敵プレイヤーを相手に所属する総数の三分の一を超えて殺害し、さらに貢献度一位で戦争に勝利しなくてはならないのだ。

そもそも、戦争の発生には二国間における友好度を極低まで持つて行き、さらにその状態で敵国へと送られる使者を殺害しなくては発生しない。当然、破格の高報酬を支払われる『使者の護衛』というクエストが発生するため、殺害は恐ろしく困難だ。故に、アルタベガルでもついぞ発生しなかったイベントで、当然ながら英雄とい

う種族は一人たりとて存在しない。

ただし、その分英雄も仙人も上位種族としては異常な能力を誇り、当時のアルタベガルは騒然とした物だ。まあ、英雄はスペックが公表されただけで一人もいなかったし、仙人は俺が種の種類を教えなかったために一人だけだったので、すぐに収束する結果になったが。ちなみに、事種子システムに関しては完璧な表など存在しない。

初期種族だけでまさしく星の数ほどいるのだから、当然種子の組み合わせもそれに習いほとんど無限。運営すら把握していないと噂されるくらいに多様な組み合わせが存在している。

その種子の組み合わせ如何によって、効率的に経験値が得られるモンスターや、場合によっては武器の変更も考える事になるので、修行開始前に聞いておこうと思ったのだ。

だが、アルシャから返って来たのは困惑だった。

「ええと、あの、れーすしーど、とは何ですか？」

「は？ ん？ ええ、ああ、んー。……………もしかして、種子システムを知らないのか？」

「あの、もしかして冒険者には常識の知識なのですか？ 知っていて当然、とか……………」

「ああ、いや、ちょっと待ってくれ。考えをまとめるから」

種子はステータスには表示されないため、ステータスで推し量るか、本人に聞くかぐらいしかない。前者はステータスが低過ぎて無理、後者は本人がそもそも種子の事を知らなかったために図らずも駄目出しとなった。

この場合として考えられるのは、そもそも種子が存在しない、または存在が知られていないか、別の名称で広まっているかの二通りだろう。

ただ、存在しなければ説明が面倒だし、別の名称で知られている場合は認識の齟齬を合わせるのが大変だ。

という訳で、三つ目の確認方法を取る事にする。

「まあ、百聞は一見に如かずとも言っし、とりあえず使ってみろ」

思考を放棄した俺は、アイテムウィンドウから冥霊族の二強と呼び声高い《冥王族》の種子——いくらでも生成可能なのをいい事に知り合いを捕まえて所持上限である九十九個まで作らせた——を一つ取り出してアルシャの手に押し付けた。ちなみに、冥王族の種子はぼんやりと発光する六芒星を閉じ込めた、薄い黒の球体だ。アルタベガルでも半血種^{ハーフシード}と並ぶキャラクター作製手順の面倒な《^{ファーストシード}純血種》の一つである冥王族の種子。アルタベガルですら希少なそれを受け取ったアルシャは、手に持ったそれを見て困惑するのみだ。

「あの、これをどう使うのですか？」

「……普通に一度アイテムウィンドウに入れてから使えばいいと思うんだが」

「まずそこから分からないのですが、詳しく説明していただけないか？」

「……………すまん。こっちの基準で考えてた」

いつの間にかアルタベガルでの初心者指導と混同していた事に気づき、謝罪する。

しかし、向こうと同じ使用方法でないとすると、どうやって使用するのかという事が切実な疑問となってくる。

（食べる？ いや、それはさすがに無いだろう。あつたとしても最後の手段だ。ここはやっぱ順当に、胸に押し付けるとか頭にぶつけるとかね）

「とりあえず、胸の中心と頭に一度ずつ当ててみる。それで無理なら今度は魔力を込めながら繰り返し」

「分かりました。やってみます」

アルシャは素直に言われた事を行動に移す。まず胸に種子を当て、ついで、頭に当てる。しかし、変化は無い。まあ、手探り状態なのにそうそう簡単に正解にぶつかる事などありえない。仕方の無い事だ。

だが、次の瞬間、アルシャが命令通り魔力を込めて胸に当てようと、魔力を通した瞬間に変化は起きた。

ピシッ

魔力を受けただろう瞬間、種子にヒビが入り、内の六芒星が発光し始める。それを見たアルシャが種子に送る魔力を止めようとしたのを見て、俺は反射的に叫んだ。

が、それがいけなかったのだろう。

「止めるな！ そのまま送り込め！」

「ひゃっ！」

俺の声を受けて、アルシャは種子を取り落としてしまった。地面に落ちた種子はそのまま文字通り粉々になる。そのまま光の粒となつて空気に溶けるそれを、アルシャは呆然とそれを見つめ、俺はそんなアルシャと種子を半分は納得、残り半分は割れたなあ、という単純な思いと共に眺めた。

第十三話『布と種子』（後書き）

ご指摘を受けたので、今回から後書きなどは活動報告に移ります。
ちなみに、実施中のアンケートはアルシャ修行編が終わるまでです。

第十四話『布と修行風景』

「……………三日三晩不眠不休で百ちよつとか。やっぱりちよつと無謀だったか？」

少し離れた場所でモンスターに囲まれ、延々と戦い続けるアルシヤを見て、少しだけそう思う。

あの後、再び試した冥王族の種子は難無く彼女の体に吸収され、種子自体使われていない事が分かった。種子を見せても反応が無かったため予想は付いていたが、弱体化の原因の一つはそういった強化手順の失伝もあるだろう。

最終的に彼女に使わせた種子は二つ。アルタベガルで最もレアな種子であり、知人友人にしなければ億単位の金が飛び交っても不思議ではない初期種族の種子だ。

その中でも、ハズレと名高い組み合わせである冥王族と天王族の組み合わせ。ステータスが軒並み低い。軽鎧までしか装備できなくなる。冥霊族と比べて約一・五倍の経験値が必要になる。etc.

正直に言えば、俺がこの組み合わせを取っていたのは、キャラクターが気に入っていた事とたまには縛りゲーもいいかという気まぐれに過ぎなかった。当然知り合った他のプレイヤーには正気かと疑われた事もあるし、成長速度やステータスから滅多にパーティなど組めなかった。今でもソロなのはその名残でもある。

俺や仲間内以外に始祖がいないのは、他の強力な純粹種の種族種子を二つ使うと似たような事になるためだ。そういった事実から、おそらくゲームバランスを取る為だろうと、プレイヤー達は勝手に納得していたのだ。結果的に間違っていた訳だが、仲間の話を総合すると、おそらく純粹種二つの種子を使用するのが始祖へ至る第一段階と考えていい。

その後、俺が仙人になつて一步以上抜きん出ると一時後を追おうとする者達も出たのだが、その結果としてトッププレイヤーが独走さらに追いつくのが困難な事態となつて泣く泣く諦めたらしい。中にはそのまま頑張り続けた者もいるのだが、最後まで始祖になれたという話は聞かなかった。

実際、初期からそれを選択しても仲間に恵まれなければ底辺を這う以外無いような仕様だ。自分で言うのも何だが、仲間に恵まれただけでなく、才能もあつたんだろうな、とも思っている。

「ま、筋も悪くないし、大丈夫だろ。……にしても、疲労も回復できたのはビックリしたな」

この世界で実際に使用して分かった事なのだが、回復魔法でHPを大きく余剰すると、疲労まで回復できてしまう。しかも、脳の疲労まで回復してしまうので、こまめに上位の回復魔法を掛ければ不眠不休で活動できる。といっても、最上位種族の莫大なMPと高いIntが無ければ、途中で枯渇するかあまり効果が無くジワジワと蓄積が溜まるかだろう。

それでも、王族や大商人などは大きな案件を片付ける際に専属で人を雇つて使用するみたいだが。

そんな事もあつて、現在アルシャは百レベルを越し、延々と一人で戦い続けた事から剣筋も実戦で洗練された物になりつつある。基礎がきちんと出来ていたというのも幸いだった。細かく指導する事ができなくとも、今ではまともに攻撃を喰らう事も無く、たまに掠る程度になっている。

周囲が見渡せる草原のど真ん中、オリハルコン製の檻に《魔寄せの香壺こっほ》という名前の小さな壺が入られている。その壺から放たれる匂いは使用者のレベル＋五ゝ十のモンスターを引き寄せるため、延々とレベル上げを続けるには丁度良いのだ。

ただし、俺みたいな最上位種族のレベル千以上が使うと神原域ク

ラスの奴らがワラワラと湧き出てきて、使用した者を集中攻撃して消えていく。今も似たような感じだが、どこからとも無く湧いてくるくせに死体が残って血臭が酷いのは何故なのか。地属性魔法で埋めたり燃やしたりしているが、割と面倒だ。

ちなみに、アルシヤは逃げられないように魔法で檻と繋いであり、一定以上離れられないようになっている。鬼、悪魔等と言われたが、俺は始祖だと返しておいた。

「おー、やってるわね」

「ミーナか。何かあったのか？」

「とりあえず、どれくらいの期間が掛かるか分かったから、一度も帰って来ない馬鹿に教えにね。鼻が曲がりそうで後悔したけど。一体どれだけ殺したのよ」

地面からひよいと出てきて、ミーナは心底呆れたとでもいうように言ってきた。軽く使っているが、目印マーキングを使用しない転移は各属性でも最上位の魔法だ。しかも、アルタベガルですら使い手が二桁だけというレアな魔法である。

そんな代物を使用しての用事が、誰かに手紙か伝言でも頼めば済む事だというのだから、こいつも感覚が狂っていると思う。ちなみに、俺は上位の街や村への転移までしか保有していない。

「目算が立つたんだったら、ギリギリまで鍛えられるな。つか、そこまで殺っていないぞ。せいぜい千から二千つとこだろ。昔、エンドレスの湧き場ポップポイントで半日足止めされた時の方が殺してるだろ」

「ゲームじゃ血臭は無かったじゃない。ていうか、あれと一緒にするのは間違ってるわよ。広域殲滅何発もぶち込んで殲滅しても、一秒待たずに同数が再湧出リポップとか、あからさまに欠陥イベントだったじゃない。その証拠に、運営にコールしたらすぐ消えたでしょ」

（あれ、単純にミーナのクレームに心が折れただけの気がするん

だけどなあ)

「まあ、臭いのは認めるが、そこまででも無いだろ。あの真っ只中ならともかく、こっちは風上だし、ちよっと臭う程度だと思うんだが」

「獣人のスペック舐めちゃ駄目よ。人がちよつと汗臭いつて感じるレベルでも、鼻が曲がるくらいにきついんだから。嗅覚操作のスキルが無かったらすでに百回気絶してるわ」

はつきりと断言されて俺は黙り込む。ゲームでは、本来人間とそう変わらない嗅覚を強化し、匂いでモンスターの追跡や罠の察知をするための獣人専用スキル。その一つが嗅覚操作だ。それを真逆の方向に使用しなくてはならない時点で、獣人の嗅覚がどれほど鋭敏なのか分かる。

「そんなに深刻な顔をしなくてもいいわよ。我慢できないほどじゃないし、獣人が、というより獣人の純血種が特別敏感なんだろうしね。狼系の獣人じゃなくて助かった、ってところよ」

「確かに、狼系の獣人だったらやばいかもな。魔獣だって、狼系の奴は臭いに敏感だし」

「こんな事になるんだったら、嗅覚遮断のスキルを取っておくんだったわ。臭いを感じなくなるし、聴覚が強化されるから、他の人達は結構取ってたのよね」

「あー、経験と事前情報があれば聴覚の強化なんていらなからな。そもそも、嗅覚を無くしたら、臭いで判別できる罠が分からなくなるし、本来は縛り用なんだよな。グランドファームのボスは発する臭いで攻撃パターンが変わるし、五感をフルに使えないと上位フィールドはやってけないし」

そもそも、アルタベガルも他のアクション系ゲームの例に漏れず、ある程度のモンスターまでならパターン化された行動ルーチンが設

定されている。データベース上で神格位・準神格位・上位・中位・下位と五段階分けされた内、上から人間と変わらないレベルの思考能力を持ったAI・決められたルーチンに関してのみ高度学習機能を持つAI・基本ルーチンから大きく離れない程度の学習能力を持つAI・基本ルーチンを逸脱しない範囲で学習するAI・基本ルーチンのみのプログラム体となっている。

その中で、目に見えない等の行動時の音を聞き、空気の動きを肌で感じて対処しなければならぬモンスターはそこまで居ない。居るのも、最高で中位のモンスターまでだ。ここまでなら、些細な音すら拾えるようになる嗅覚遮断のスキルは有効だろう。

が、逆に臭いで危険を察知出来る事態は最上位のフィールドまで存在している。臭いが攻撃パターンに直結していたり、ダンジョン内で致死性トラップがある付近では血臭がする等がその一例だ。意外と無用だと思われがちだが、嗅覚はアルタベガルで上に行くためには重要なファクターの一つと言える。

「ていうか、実際あのスキルって聴覚上げて盗み聞きするくらいしかないわよね。数ある無駄スキルの内の一つよ。バーバリとかの叫び声なんて、聴覚上げてたら拷問でしょ」

「いや、滅多に出ないレアモンスターを例に上げられてもな。それより、本を調べる期間はどうなったんだ？ そっちが本題だろ」

「あー、そっち。そっちね」

元々その話で来たのだから、できれば話題にしたいくないような様子に首を傾げる。怪訝そうに見つめると、ミーナは盛大にため息を吐き出して答えた。

「最低一ヶ月、最大で半年よ。あのクソ馬鹿ども、貴重な資料や本を整理もせずに適当に突っ込んでね。今は一旦いくつか風通しの良い部屋を強制的に空けさせて虫干し中よ。数が多いからそれだ

けでもかなり時間がかかるし、整理もすればさらに時間が掛かるわ。……全く。本を一体何だと思ってるのかしら」

「それは大変そうだな。まあ、俺達が帰るにも必要な事だ。頑張ってくれ」

「言われなくてもそうするわ。というか、あの本全部持つてけなにかしら。あんな碌な保管もできない愚図どもに所有されるなんて本が可哀想だわ。著者への侮辱よ。私の物になれば、全力でお世話してあげるのに勿体無い」

頬を膨らませて可愛らしく言うが、ここでもし同意でもすれば、十中八九あらゆる手段を持って城の本を奪い取るだろう。しかも、その場合ぎりぎりグレイゾンの手法まで使うから性質が悪い。本が関わる事に関しては、どこぞの腹黒政治家も真つ青な策略謀略を繰り広げるのがミーナという女だ。

「とりあえず、手に入れようなんて考えるなよ。そんなに心配なら、司書にでも管理方法を叩き込んでおけばいいだろ」

「それはもうしてるわよ。書物を駄目にする人間は人生も駄目にするわ。きつちり調きよ……ゴホン。教育してあげるから何の問題も無いわ」

「今調教って言いかけただろ。お前の手にかかると、本に人生捧げる人間が出来上がりそうで怖いな」

「何言ってるの？ 本に全てを捧げて生きられるなんて最高の幸せじゃない。人としてそれに勝る幸せなんてそうそう無いわよ。……」

「……ところで、一ついいかしら？」

「？ 何だ、いきなり？」

幸せそうな顔から一転、真剣な顔を見せるミーナに眉根を寄せる。そんな俺に対し、ミーナはあるものを指差しながら言った。

「…………あの娘、普通に死に掛けてるけど大丈夫なの？」
「あ……………」

第十五話『布と一時の休息(?)』

「死ぬかと思いました」

あれからすぐにモンスターを消し去り、壺を仕舞った後、アルシヤを治療した。

それから血臭が酷いからと移動し、アルシャが放った第一声がこれだ。

「いや、それについては本当に悪かった。この修行が終わったら何か埋め合わせを考えておくから、勘弁してくれ」

「ホントよねえ。会話に夢中になって弟子を死に掛けさせるとか、師匠失格じゃない?」

「お前にだけは言われたくないが、何も言い返せないな」

完全にこちらが悪いため、しっかりと頭を下げる。埋め合わせについては、手持ちから何か武器か防具を渡す事にしようと思う。オーバースペックな武器を持てば、多少のレベル差くらいならどうとでもなるのだし、それが一番無難なはずだ。

「それにしても、三日三晩ずっと戦い通しだったんでしょ? よく倒れたりしなかったわね」

「あ、はい。食事はちゃんと取ってましたし、疲労はリンセイルさんが小まめに回復魔法で取ってくれましたから。最初は無理だと思いましたが、三日も経てば慣れてしまします」

「こうしてお姫様はリンに調きよ——もとい、洗の、じゃなくて、教育されていくのね」

「ミーナ、今何て言おうとしたのか教えてくれないか? 俺にはどうも調教だの洗脳だのと聞こえた気がするんだが、きつと俺の耳

が悪いんだよな」

「あはははは。大丈夫よ。私はちゃんと分かってるから」

お前が分かっているにも意味が無い。そう叫びたいのを、喉元で無理矢理押さえ込む。ご機嫌に笑っているミーナと顔を引き攣らせているアルシヤをよそ目に、眉間をトントンと叩く。この話題を続けると頭痛で悩まされる事になりそうだ。

「まあ、いい。どうせ物は言い様だ。教育と洗脳は同義。どちらも他者を汚染するという事では変わらないだろう。その差異は他者から見た物にしか過ぎない。自分では教育と思っても、他者から見れば洗脳にしか見えない事もある。逆もまた然り、だ。この場合は虐待というのも選択肢に入るかもしれないけどな」

「ま、教育とか洗脳って言うよりは正しいよね。別に何か教えてる訳でも無いし。むしろ一種の拷問じゃない？ 永遠に戦い続けるか殺されて死ぬか。いや、管理が徹底してる分には戦闘一択だけだよ」

「食事休憩があるから精神的にもギリギリ持つだろ。そもそも、思考する余地が無い分マシだ。エンドレス死階で出てくる因幡を狩って肉を納品するクエストなんか、関係ないモンスターがワラワラ湧いてくるし、ようやく因幡を見つけて殺しても肉が出ないしで精神的にかなり参るぞ」

死階というのは四千四百四十四階の事だ。別名四ゾロ。その階だけ殺傷系トラップの数が多く、モンスターも普通に六千〜七千の強力な奴が出てくる。エンドレスにおいて最も死人が多く出るためにそう通称される事になった。まともにエンドレスを攻略する上では最大の壁とも言える階層だ。

そして、そんな場所では出て来ないのが先程言った因幡というモンスターだ。

希少な上に機敏で、しかも他のモンスターの攻撃であつさり死んでしまう特殊なモンスターで、その肉はアルタベガル中で最も美味。メソポタミアのギルドには年中肉を入手するクエストが貼つてあり、これをクリアすると索敵系スキル《食材探査》と毒の有無から味の優劣まで分かる《食材鑑定》が手に入る。

難易度と報酬が限りなく釣り合わないクエストの一つだ。俺のような暇人がネタで取るにしても、ちよつと躊躇してしまうような過酷なクエストである。無論、躊躇しただけでしっかり取ったのだが。しかし、ミーナの方は別の意見があるらしい。

「うーん、それも確かにキツイとは思うけどねえ。私的には神原域の走破が一番苦痛だと思うかな。精神摩り減らす隠蔽^{ハイドニング}か地獄のよくな強行突破かの二択だったし、三位以内に入れないければ報酬無しだったし」

「あー、あれか。あれはそもそも根底からおかしいだろ。ダンジョンタイムアタックとか砂漠フィールド走破とかならまだまともな需要があつたけど、二、三百メートルも隠蔽無しでいれば神獣巨獣もろもろが群がってくるような場所でタイム競うとか、マゾ通り越して鬼畜外道だろ。死人が大量生産されてたし」

「…………師匠達の話が天上過ぎて付いて行けません」

イベントその物の内容的にも、実際に行つた際の過程とか結果的にも悲惨な事になつた当時の出来事を思い出して頷いていると、隣で聞いていたアルシャが先程以上に疲れた様子でグデツとなつた。回復魔法で疲労は抜いてあるはずだが、何かあつたのだろうか。

「どうかしたか、アルシャ？」

「どうかしたか、じゃないですよ。師匠達は軽く話してますけど、実際は伝説級の所業ですからね？ 神原域なんて御伽噺の中でしょうか聞きませんし、現在エンドレスで攻略されている階層は三千百階ま

です。死階つていうのが何階かは分かりませんが、確実にそれより奥ですよ」

「おいおい、後退し過ぎだろ。せめて四千四百四十四階でストップしてますっていうならまだしも、それ以前つていうのは割と問題だぞ。あの迷宮、少なくとも一万五千階までは確認されてるし」

以前、エンドレスで最大何階まで行けるかというレースがプレイヤー主催で行われたのだが、それで打ち立てられた記録が一万五千百十四階だったと記憶している。俺も一万四千階の半ばまでは行つたのだが、そのくらいまで潜るとカンストの廃人でも一撃死だ。後半はいかに上手く隠れ続けたかというのが肝だった。

その辺の苦勞を言つてやると、盛大にため息を吐かれた。

「師匠達に常識を求めるのは無駄だつてよく分かりました。そもそもやつてる事からして命を投げ捨てるような狂行ですし、それで生還しているのですから、もはや何と言えいいのか分かりません」

「死ぬ時は大抵あっさり死ぬものだけだな。まあ、その程度はできないと、始祖になろうなんて妄言は吐けない。事実として、始祖になるための試練はそれ以上の修羅場が連続する。死なない方が不思議なくらい在地獄だぞ？ 例え神話級の怪物が立ち塞がったとしても、絶望的な戦力差を抱える修羅場程度、今更だ」

「まあ、その辺りは神様の匙加減次第だけだね。私とリンじゃ難易度の桁が違ったし、他も個々人の性格や能力なんかを見てるんだと思うけど、その辺りの詳しい事は分からないわ。甘くないのは事実だけど、万人には達成不可能というレベルの物でもないわ。最低でも神獣の単独討伐ができないと無理だけど」

肩を竦める俺と飄々と事実を話すミーナを交互に見て、「神獣を討伐とか、その時点ですでに人ではありえません」と言つて突っ伏した。修行中よりも疲労度が増しているように見えるし、モンスター

「殺害無期限耐久レースより、常識を宇宙の果てまで投げ捨てた人外達との会話の方が辛かった、ということだろう。」

「という訳で、精神的疲労を癒すためにも修行を再開しようか。タイムイズマネー。時は金なり、だ」

「じゃあ、ちょっとだけ見学してから私も戻るわ。本も心配だし」

「し、師匠、疲れたって分かってるなら休ませてください。ミーナさんも、お願いですから本より私の心配をしてください。このままじゃ死んじゃいます！」

「大丈夫。死ぬって言うてるうちは死なない（わ）」

「い、いやあああああああ！」

さて、休憩も終わった事だし、（俺的には）生温い修行を再開しますか。

第十六話『布と座学』

「師匠、一体こんな所で何をするんですか？」

「着けば分かる。今は黙ってついて来い」

アルシャ瀕死事件からさらに四日が経ち、中々上がらないレベルを見て面倒になった俺は、アルシャを連れて北のコースト山脈まで来ていた。

このコースト山脈、特に中心にあるスレベント山は、あの草原よりは壺の最低レベルも最高レベルも高く、あれが存在していれば、数日で五百レベルまで上げられるというのが主な理由だ。後は見飽きたから場所を変えたいという個人的な理由しかない。

山道は険しく、モンスターも決して弱くは無いため相当に厳しい旅路になるのが普通だが、仮にも始祖である俺が徹底的に援護した結果、余裕を持って道程を消化できている。

「師匠、黙ってついて来いと言いますけれど、どこへ何をしに行くのかが分からないと不安になります。教えていただけませんか？」

「はあ。仕方が無いな。俺達がこれから行こうとしているのは『神霊の祠』だ。現存しているかどうかは分からないけどな」

「神霊の祠、ですか？ そのような物があるという話は聞いた事ありませんが」

「当たり前だろう。生者には関係の無い場所だ。その祠がある洞窟は、生きている者は視認もできなければ入る事もできない。そんな場所が公に知られていれば、逆に俺が驚く」

神霊の祠というのは、設定では死者の転生が行われる特別な場所であり、それを作り出した神が死者以外が迷い込まないように結界を持って封じている特殊なダンジョンだ。付け加えるなら、最奥に

存在する祠まで出向き、そこで何らかの試練を突破する事で、上位種族へと転生する事ができる。何らか、というのは本当に何らかだ。十人十色で内容が一定ではないので、何をする、とは言えない。

今回はその利用が目的ではないので、今は置いておくでしょう。

「ああ、入れないなら何故向かっているのか、なんていうのは気にしないでいいぞ。その程度の事は問題にもならない。まあ、それほど難しい事でもないし、気楽に行こう」

バラしてしまうと、今回やろうとしているクエストの内容はただのクイズだ。アルタベガルに関する、ちょっと調べれば分かるような問題を一問解いて一レベル上がる。それが二百問前後延々と続くだけで、集中力さえ続けば誰でもできる初心者救済のサービスクエストである。

受託条件は二百レベル以上三百レベル未満で、初期種族の内、人族である事であり、大抵の人は知らずに過ぎる特別なクエストだ。仙人を目指すならば、これをこなすだけで大分楽になる。

………すでに俺が知っている時代から六千年以上経過しているのを忘れていた。

「という訳で、ちょっと基礎知識から詰め込んでくか。最近ずっと戦闘続きだったし丁度いいだろ」

「えっと、話が見えないのですが、説明していただけますか？」

「いや、クエストが問答系だからな。俺がやった頃の連中なら問題無かったんだが、アルシャだと保有している知識に差があるからな。最低限余裕で突破できるように、歩きながら座学だ」

「………せめて休憩しながらにしませんか？」

「却下。そもそも休憩できるような場所がどこにある」

上目遣いのお願いを即答で棄却した俺は、アルタベガルにおける

[illegible]

「何を言ってる。俺は人族の始祖だと言っただろう。じゃあ、次、
と言いたい所だが、タイムアップだな。ここが祠の入り口だ」

祠があるのは、山の斜面にいくつかある洞窟の一つで、巨大な岩に隠されているのが見つけるための目印になる。その岩には、岩その物の模様に見せかけた魔方陣が描かれている。よく見れば、ルーン文字ともオガム文字とも取れる、複雑かつ難解な文字が幾何学模様と共に刻まれている。

「この岩は神が設置した物で、神の他ではそれこそ精霊王クラス
の力でも無ければ壊せない。レベルで言うなら十万オーバーだな。
よって、ここから先に俺達生者が進む方法はたった一つ。鍵となる
道具を揃え、然るべき手順を踏む必要がある」

「そうだ。道具は《靈王の雫》《靈化符》《精靈の守護符》の三つだ。まず、靈王の雫を飲み込み、靈化符を發動する。靈化符は幽霊になる訳ではなく、霊子——幽霊が持つ魔力のような物を纏い、これによって岩を透過できるようにする。精霊の守護符は持つてい
るだけでいい。それで効果を發揮する」

言いながら、小さい透明な勾玉と二枚の符を渡す。一枚には岩と同じ文字が踊っており、もう一枚は美しい蒼に染まっている。蒼いのは水の大精霊であるスイの守護が掛けられているからだ。三つとも、大量に保持しているので多少の消費は全く問題ない。

「時間が勿体無いからさっさと行くぞ」

「あの、せめて心の準備をさ——」

「却下。どこぞの馬鹿貴族に押し倒されたくないならさっさと飲め。そして発動しろ」

自身が割と危機的な立場だって分かっているのかどうか。七日も死闘を続けてなお温さを保つ精神に半ば感心しながら、それでも最低限の危機感を煽る。

普通はあんな拷問染みた事なんて耐え切れないだろうに、さすが王族とでも言うべきか耐え切ったところか未だに精神的には余裕そうなアルシャも、女性としての尊厳を失うのは耐えられないのだろう。何を想像したのか顔を青くさせつつも勾玉を飲み込む。

実際、あのナルシストとか典型的なデブ貴族とかに押し倒されて好きにされるのは死ぬより辛いだろう。それを指摘するのは、気が進まない上にやる気を減退させかねないが、最低限動かすには十分過ぎるネタという事だ。

俺も、言う事を聞かなければ体重百キロ超過の女に逆レイプさせると言われれば、どんな事でもするだろう。

自分で考えた事に吐きたくなっただが、無理矢理抑えて靈王の雫を飲み込んで靈化符を発動させた。それと同時に全身を見えない膜が包んだような感覚がして、同調するように岩が僅かに発光する。

「さっさと靈化符を発動させろ。さっさと行ってさっさと終わらせる」

「……………発動しましたけど、なんだか変な感じがしますね」

「それが霊子だ。冥霊族でも無ければ滅多に触れる事も無いから、覚える必要は特に無い」

アルシヤも霊化符を発動させ、身を覆う霊子に戸惑った様子を見せる。俺は、そんなアルシヤの手を掴み引き寄せた。

間近でこちらを見上げるアルシヤは、顔を赤くして慌てるが関係ない。

「あの、その、し、師匠！　こういう事は順序という物がですね！」

「知るか」

懸命に俺を押し離そうとするアルシヤの言を一刀両断し、手首から襟首へと掴む場所を変える。そして――

――投げた。

「きゃああああああああああああああああああ！」
「………………。さて、行くか」

少々強く投げ過ぎたのか、ドップラー効果を伴って遠ざかっていく悲鳴を聞きつつ、俺は岩にズブズブと足を踏み入れて行った。

まあ、死んではないはずだ。………多分。

第十七話『布と転生の洞窟？』

ダンジョン『転生の洞窟』の中は意外と明るい。

その理由は周囲に浮かぶ人魂だ。封印の岩が洞窟を塞いでいるために中へ光がはいり事はないのだが、薄らばんやりと仄かに発光する実体の無い球体が、ふらふらゆらゆらと漂いながらゆつくりと奥へ向かって進んで行く。しかしそれも、ある一定の場所から分岐し始める洞窟のあちこちへと別れていき、先は見通せない。

懐から精霊の守護符を出してみれば、それはぼんやりと光を放っている。この守護符が、周辺の人魂やそれが発する靈気に当てられるのを防いでくれているのだ。だからこそ、道の端で人魂を興味深く観察しているアルシャのような只人でも平然としていられる。

もしこれが無ければ、始祖である俺はともかく、アルシャは靈気に当てられて狂うか、そうでなくともまともに動く事すら出来ないだろう。無論、設定上の話で、ゲームでは一部種族を除いて行動不能に陥るだけだ。

ダンジョンの真っ只中で。

そうなる理由は、隠しパラメータである瘴気汚染値という物があり、それが一定以上になると突然の行動不能状態——俗に言う“中であつた”という状態になるためだ。これは、必要パラメータを満たした上で、必須アイテムを消費する浄化魔法を使えば持ち直せる。もちろん、俺もそれは使えるが、それらは本来、強力だけど呪いがバイ装備や、防御力自体は低いけど、吐き出す瘴気で敵本体を攻撃できなくなった場合のために神官や巫女として生きていた者達が開発した魔法だ。その種類は多種多様に渡る上、各種宗教を参考にしているために割とマイナス要因も多い。

正直、呪いの装備は装備するなという話であり、そういった呪い

を使うエネミーは、祠と同じマイナスパラメータと知られて以来、精霊の守護符を使って挑むのが普通になっているため、需要はもうゼロに近い。

精霊の守護符も性能の高低があったため、需要が完全に無くなる事は無かったため、苦勞は報われたのだろう。

「まあ、そんな理由があつて、守護符っていうのはここでは必須になる訳だ。それ無しで行きたいなら、人なら最低でも仙人や半精霊になるぐらいは必要だ。どっちも生半可な苦勞じゃなれないから、素直に守護符を使っておきましょう、っていう話だな」

「あの、魔法でその、瘴気汚染、ですか？ それを防げなかったんですか？」

「いや、できた。できたんだが、その為には継続的に一定量の魔力を消費したんだ。瘴気に侵された土地っていうのは、基本的に強力なモンスターがいる。そんな場所で継続的に魔力を使い続けるっていうのは、魔法という万能に近い武器を手放すと同義だ。だから、結局使わなくなったんだよ」

初期種族ではその魔法を二千レベルでようやく最低ラインで使えるくらいで、上位種族では十全に魔法を使うために使用せず、最上位種族ではそもそも大抵の種族が瘴気汚染自体受け付けなかった。

そもそも、精霊の守護符自体は十二分に流通していたため、需要自体無かったのだ。それでも開発したのが極一部の酔狂な開発者集団だったが、彼ら自身が“作った”という事実満足して広めようとしなかったのもある。

「さて、無駄話はこれまでにして先へ進むぞ。ここは変容型迷宮だ。可能な限り早く突破する」

「変容型……つまり、迷宮の形が変わるという事ですか。可能な限り早くという事は、時間経過で変容するって事ですよね。なん

で、死者が生まれ変わるための神聖な場所がそんな事になっているんですか」

「暇潰しだそうだな。ここの管理者が退屈な転生作業の片手間に形を変えて遊んでるんだと。少なくとも、俺が聞いたのはそういう理由だ」

変容型迷宮というのは、時間経過、もしくは条件を満たす度、無限に変化、変容するダンジョンの事だ。遙か昔、ゲームの割と初期の時代に製作された不。議のダンジョンシリーズが最初とされるタイプの物で、入る度に、スイッチを押す度に、ボスを倒す度に、等と様々な条件で変化していくダンジョンだ。

アルタベガルでもこの形式のダンジョンはよくあるが、さすがにAIの暇潰しと気紛れで変化するダンジョンはほとんど存在しない。……複数あるのは否定できないが。

そんな話がある程度ばかりで伝えると、アルシャは何か考えるようにボソツと呟いた。

「……………迷宮地獄の話はここからできたのかもしれないね」

「迷宮地獄？」

「はい。人を騙して陥れたり、迷宮で殺人の罪を犯すと落ちると言われている地獄です」

アルシャが言うには、一番下の階まで降りると罪が許されるといふ塔型の地獄なのだが、中の迷宮が変化し続ける上に、様々な生き物の影が襲ってくる場所だそうで、幾度も殺されながら永遠に彷徨い続けるという地獄らしい。

その噂の根源に心当たりがあるのは黙っておいた方がいいのだろうか。

「まあいい。とりあえず、俺の傍から離れるなよ。悪質な罠に掛

「かつたら一発でお陀仏だからな」

「分かりました」

「……近過ぎだ。もうちょい離れろ」

[illegible]

転生の祠はおおよそ三つに別けられて、それぞれ《生》《死》《不死》を司っている。それらの管理者は同形の三つ子のような存在で、全員が繋がっているらしいのだが、そのダンジョンにおける嗜好全く違う。

生の祠に行くには、《過剰治癒》オーバーヒールの掛かり続ける道を駆け抜けた
り、異常な回復速度を持つモンスターを倒したり、生きる・生かす
方向性の危険が立ち並ぶ。

死の祠へ行くには、即死トラップや毒霧の満ちた小部屋等を突破し、アンデッド系のモンスターを殺し、四つの大部屋からなる茨界・屍界・齒界・刺界の四つの死界を越えていく必要がある。

不死の祠へ行くには、インモータル・ファウスト《不死の亡霊》の群れを幾度も突破しなければならず、さらにはフリーフォールや回復薬でできた底なし沼など、死なないし抜けられないトラップが溢れている。

これら三つの祠の中で、今回向かうのは生の祠だ。今回行うクエストはどの祠でも同じなので、わざわざ難易度の高い死や不死のダンジョンに挑む必要は無い。

カツ、カツ、カツ。

俺はアルシャを連れて洞窟を歩いていく。ダンジョンが変化するのは午前零時丁度なので、あまり気にする必要は無い。最短で一時間、最長の場合でも六時間ほどで抜けられるはずなので、時間的には余裕だ。

そう、余裕のはず。

「師匠、なんだか、いつまでも代わり映えしませんね」

「確かにおかしいな。普通、ここまで歩けば一度くらいは敵やトラップに遭遇するはずなんだが」

かれこれ三十分以上歩き続けている。だというのに、ゴールはあるか、小部屋の一つも見えて来ない。

運良くそういう道に行き会っていないというのも有り得ないし、別に床が進む速度に合わせて動いているという訳でもない。樹海のように方向感覚を狂わせるにしても、迷宮でグルグル回っていればさすがに気付くというか、一応で付けている一定間隔の傷に行き会っていない以上、それも無いだろう。

「……………いつそ、ぶち抜くか」

——ビクッ！

「ん？」

「え？」

どうせ二、三層の階層があるのだから、わざわざ階段を探すなんて事をする必要も無いよな、と思い呟いたところ、あからさまに通路全体が脈動した。というか、ビクついた。

つまり、それが意味する所はたった一つだけ。

「ふむ。人を飲み込む生きた宝部屋というのはあったが、生きて人を迷わせる通路というのは初めてだな」

「あの、やっぱり、そうなのですか？」

「ああ。生きてるなら延々と道を改変し続けて歩かせ続けられるし、トラップが無いのは迷宮自体がダメージを負うか、回復機能を悟らせないためだろう。おそらく、入り口からそう遠くない場所を延々と歩かせられていたはずだ」

言いつつ、取り出すのは真つ青な短槍。アルタベガル全体で数本――数えるほどしか存在していない最上位の凍結魔法が封じられた強力な槍《凍華の槍棘》フロージャ・スクリームだ。その効果は、MP消費の前方完全凍結攻撃で、ゲームだとINTの高さに応じて前方へと一直線に太い氷の道を作り、射線上の敵を凍らせる。

そのかなり凶悪な装備を、俺は何の躊躇も無く、ゲームと同じように地面へと突き立てた。

バキンッガキンッ！

「わああ、これは予想以上というか想像以上」

「び、びつくりしました」

「俺も驚いた。まさか通路全てが敵性判定とは恐れ入る。というか、強力過ぎるな。機会があれば別の装備も試し撃ちした方がいいか。ぶつつけ本番でうっかり町の一つでも消しちゃいました、じゃ、洒落にならん」

「というか、そう安易に強力な武装を持ち出さないでください」

氷雪系ダンジョンでもないのに出来上がった氷の迷宮に対して、もはや乾いた笑いしか出なかった。

これからもう少し自重しよう。

第十八話『布と転生の洞窟？』

洞窟の一角を丸々生物化していたらしく、結構な距離を走ってようやく凍っていない場所まで辿り着いた。

「さすがに内部で完結している訳じゃなかったのは幸運だったな」
「そうですね。そうなっていたら、二人で寂しく餓死するしかありませんでしたから。良かったです」

「何を言ってるんだ？ その時は壁でも床でもぶち抜くに決まってるだろ。わざわざ貫通特化の大技を使わなくて運が良かったって話だぞ。下手に撃って社を粉碎したら困るからな」

「……本当に道が続いていて良かったです」

まさか俺がそこまでできるとは思っていなかったのだろう。心の底から安堵の息を吐き出すアルシャに、俺は肩を竦めて見せる。

「まあ、使ってせいぜい中位くらいだ。ああ、そこ気を付けろよ。床がスイッチになってる」

「え？ スイッチ ガコン ですか？」

「……………」

「……………」

言ったそばからしつかり踏みつけてくれたアルシャと無言で見つめ合う。もちろん、恋人同士の甘い見つめ合いではなく、冷たい視線で射抜く俺と、冷や汗がダラダラと出ていそうなアルシャという図だ。

「何かいう事は？」

「……申し訳ありません。踏んでしまいました」

響く、絶叫。

口を開いた時にそれが来る事は予測が出来たといっても、回避も防御もできなかったそれが鼓膜を直撃し、ぶち抜き破り飛ばすような衝撃が脳髓に響く。数百とも見えるそれから放たれた音響爆撃と言っても過言ではない口撃に、意識がシャットダウン一歩手前まで追い込まれる。

耐えられたのは、弟子の前で無様はさせないという意地があったからだ。

それでも若干ふらつく体を無理矢理押さえてアルシャを見れば、今にも気絶してしまいそうな体だったが、なんとか意識を失わずに堪えられたらしい姿が確認できた。

しかし、畏はこれだけでは終わらない。終わるはずが無い。

——グチュリ。

数多在る口から突き出された……………手。

小さな、赤子のような二つの手が唇を鷲掴みにし、おぞましい音を立てて横へと広げる。そうして自らを引っ張り上げて生まれたのは、三頭身の体を持つ赤子だった。

その背筋を凍らせるような悪寒を伴う異形に目を瞑れば、だが。引き上げられた赤子は、形だけ見れば腕二、足二、頭一の普通の人型だ。しかし、腕に開く小さな目の群れが、腹に大きく開いた口が、胸の上で空気を吸い、吐き出す鼻が、そして、眦の下がつた目を見開き、口を裂くかのように笑みを作った大人のような顔が、多大な恐怖を、強大な拒絶を、絶大な嫌悪を抱かせる。

想像して欲しい。そんな赤子が辺り一帯を埋め尽くし、こちらへ

と視線を向ける様を。そんな赤子に足元まで埋め尽くされる状況を。全く同じ姿形のおぞましい異形に囲まれて、平然としていられるなら、それはきつと人間として当たり前に持つ何かが壊れてしまっているのだろう。全く同じ顔、同じ姿の人間が複数人並んでいるだけでも恐ろしいと感じるのに、それ全てが異形なのだ。

気持ち悪いを通り越して、圧倒的に怖い。生理的に受け付けない。そんな容貌のバケモノ達が一斉に俺とアルシャへと向き直り、

嗤った。

ケラケラ、ケタケタ、嗤い、晒つて、笑う。

あまりにもおぞましいバケモノに囲まれて、狂ってしまいそうになるのをギリギリの淵で押し留めて己を落ち着ける。ただ気持ち悪いだけで、このダンジョンの難易度上、俺にはダメージも通らないのだから。

だが、ここには俺以外にもいるという事を忘れていた。

「ひっ」

「っ！」

小さく悲鳴を漏らし、体を縮めて竦み上がる。連中が襲い掛かるにはそれだけの合図で十分だった。

一斉に、悲鳴を漏らしたアルシャと、ついでのように俺へと襲い掛かってくる。

「落ち着け馬鹿弟子！　こんなのは見掛け倒しの雑魚だ！」

叫ぶと同時に、自らの周囲にいた連中を肉塊に変える。《絶対斬

ーゲッター

ワン・タ

《擊領域》を持つ天刀は使えない。あれは固有のパッシブスキルなので、この世界の住人でパーティの組めないアルシャがいる場所では、味方殺しになるので決して抜けない。

「アルシャ、無事か!？」

「邪魔だ！ 消える雑魚共！」

特に、グチュ、ブチ、クチャクチャ、と噛み千切ったアルシャの肉を租借しながらもケラケラ嗤っている奴らは、他よりも念入りに、塵とするような勢いで細切れにして殺す。

それから俺は、アクティブスキルの《敵性威圧》を使い、連中をこれ以上近付けなくした上で最上級魔法回復薬の《エリクス神水》を取り出した。それから、痛みで意識も朦朧としているアルシャを抱き起こして小さな壘の縁を口元へつける。

ゆつくりと傾けて口の中へと注ぎ込むが、氣絶寸前のせい、口の端から液のほとんどが零れ落ちる。

「……チツ。躊躇してる暇は無いか。聞こえていないとは思うが一応言っておく。すまない」

これからする事への謝罪を耳元で囁き、もう一度エリクス神水を取り出すが、今度はアルシャの口へは直接入れず、自らの口内へと中身を全て出す。それからアルシャの顔を上向け、

躊躇無く、唇を重ねた。

エリクス神水をアルシャへ口移しで飲ませ、嚥下するまで吐き出さないように口を塞ぐ。錆びきった血の味が舌に広がるが、口を離す訳にもいかないので嚥下して自身の呼吸も確保した。

そうこうしている内にアルシャはエリクス神水を飲み込み、その効果でまるでマンガかアニメのように肉体が蠢き、跡一つ残さずに全ての傷が塞がった。

それを確認してから、ゆっくりとアルシャの体を横たえて、バケモノどもへと向き直る。

「……一匹残らず殺す」

蹂躪は、僅か一分足らずで終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4725r/>

Cloth Edge

2011年11月16日22時03分発行